

# ひょうご —神と仏— 伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>



遠い昔から、語り継がれてきた伝説。  
美しく織り上げられた一枚の布のように、  
そこには小さな時のかけらや、人々の心が織りなされ、  
さまざまな文様を描きながら、  
今も輝き続けています。

「ひょうご伝説紀行」は、数多い兵庫県の伝説と  
その故地に残されたさまざまな文化財をめぐり、  
歴史にふれていただく番組です。

昨年に続く第二作目は、  
人々の身近にあった神仏の伝説から、  
二十一の物語を収録しました。

伝説の扉を開いて、地域の歴史へ。  
しばし、異空間の旅をお楽しみ下さい。

歴史博物館ネットミュージアム  
ひょうご歴史ステーション

1	五社明神の国造り 泥海の大蛇とのたたかい	3
2	鼻かけ地蔵 白いお米がぼろぼろ落ちる	5
3	粟鹿山 「大山」の地名伝説	7
4	難儀にあったお薬師様 がっこんじ、がっこんじ	19
5	青倉山の不思議な水 祠の滝が目をいやす	21
6	妙見の臼 不思議な少年の正体	32
7	埴の里とはじか野村 大笑いした仲良しの神様	42
8	高座石の椀貸し 感謝がつなく神様と里	52
9	男神と女神の山造り よく似た山はどちらが高い	62
10	北野の文殊 文殊さまの知恵比べ	74
11	海の神様と山の神様 かみ島はどちらのもの？	83
12	右手のない阿弥陀様 海の底で見守る手	85
13	橋の地蔵様 うつぶせになったその訳は	94
14	イザナギとイザナミの国造り 高天原、地上の世界、黄泉の国	106
15	大猪と狩人忠太 ほら穴にかがやく本当の姿	118
16	松帆神社の曲がり松 神様たちの待ちぼうけ	121
17	春日の鹿と八幡の牛 室津と生穂の村ざかい	123
18	とびはねた薬師様 火中の命びろい	133
19	追手の神と鐘ヶ坂 鐘の行方と、鶏とシイの実	135
20	くわばらくわばら欣勝寺 雷の子と和尚さん	145
21	おこった氏神様 たび重なるお祈りの結末	156
	参考情報	167

ひょうごに伝わる伝説の数々をご紹介します。  
その地を訪れ、物語にふれ、歴史を感じてください。

ひょうご  
—神と伝—  
伝説紀行

五社明神の国造り  
泥海の大蛇とのたたかい

鼻かけ地蔵  
白いお米がぼろぼろ落ちる

粟鹿山  
「大山」の地名伝説

伝説

五社明神の国造り  
泥海の大蛇とのたたかい  
鼻かけ地蔵  
白いお米がぼろぼろ落ちる  
粟鹿山  
「大山」の地名伝説

紀行

国造りの神様と鼻かけ地蔵

- ・ 神々の伝説とはるかな過去の記憶
- ・ 円山川をさかのぼる
- ・ 絹巻神社
- ・ 来日岳
- ・ 出石神社
- ・ 粟鹿神社
- ・ 鼻かけ地蔵
- ・ 小田井縣神社
- ・ 養父神社と齋神社
- ・ 粟鹿山

関連情報

用語解説  
参考書籍  
所在地リスト



## 五社明神の国造り 泥海の大蛇とのたたかい

大昔、まだ豊岡（とよおか）のあたりが、一面にどろの海だったころのことです。



人々は十分な土地がなくて、住むのにも耕すのにも困っていました。そのうえ悪いけものも多く、田畑をあらしたり、子供をおそったりするので、人々はたいへん苦しんでいました。この土地を治める五人の神様は、そのようすを見て、なんとかしてもっと広く、住みよい所にしたいものだと考えました。

そこで神様たちは、床尾山（とこのおさん）に登って、どろの海を見わたしてみました。すると、来日口（くるひぐち）のあたりに、ものすごく大きな岩があって水をせき止めています。

「あの大きな岩が、水をせき止めているのだな」

「あれを切り開けば、どろ水は海へ流れるにちがいない」

「そうすれば、もっと広い土地ができるだろう」

「それはよい考えた。どろの海がなくなれば、たくさんの人が安心して暮らせる」

神様たちはさっそく相談して、大岩を切り開くことにしました。

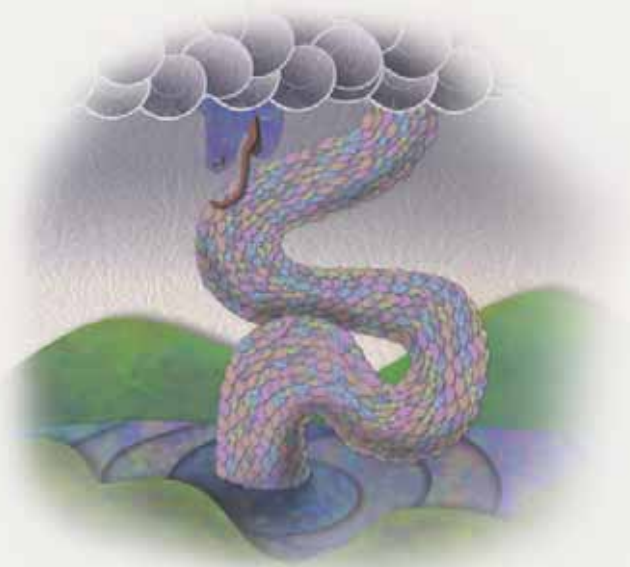
大岩を断ち割り、切り開くと、どろ海の水はごうごうと音を立てて、海の方へ流れ始めました。神様たちはたいそう喜んで、そのようすを見ていました。

ところが、水が少なくなり始めたどろ海のまん中から、とつぜんおそろしい大蛇（だいじゃ）が頭を出して、ものすごくいなり声を上げながら、切り開かれた岩へ泳ぎはじめました。そして、来日口に横たわって水の流れをせき止めてしまったのです。

神様たちはおどろきました。

「この大蛇は、どろの海の主にちがいない」

「これを追いはらわねば、いつまでたっても水はなくなるぞ」



神様たちがそろって、大蛇を追いはらおうとすると、大蛇はすぐにどろにもぐってにげてしまいます。あきらめてひきあげると、大蛇はまたあらわれて、水をせき止めてしまいます。神様たちはたいそうおこりました。

すきを見て大蛇に飛びかかり、神様たちは、とうとう大蛇を岸に引きずり上げてしまいました。そして頭と尻尾（しっぽ）をつかんで、まっぴたつに引きちぎろうとしましたが、大蛇もそうはさせまいと大暴れします。それどころか、太くて長い体を神様たちに巻き付けて、しめころそうとするのでした。

五人の神様と大蛇は、上になったり下になったりしながら、長い間戦いました。大蛇が転がるたびに、地面は地震（じしん）のようにゆれます。けれども五人が力をあわせ、死にものぐるいでたたかいましたので、大蛇もしだいにつかれてきました。そこで神様たちが、大蛇の頭と尻尾にとびかかって、えいっと力をこめて引っ張りますと、さしもの大蛇も真っ二つになってしまいました。

こうして、どろの海の水は全部日本海へと流れ出し、後には豊かな広い土地が残りました。そしてどろの海のまわりにはびこっていた悪いけものたちも、みなにげ出してしまいましたので、人々はたいへん喜び、それからは安心して暮らせるようになったということです。

このできごとをお祝いして、毎年八月に、わらで大蛇の姿をした太いつなをつくり、村人みんなでひっぱってちぎるというお祭りが、行われるようになったということです。



五社明神の国造り 泥海の大蛇とのたたかい  
おわり

## 鼻かけ地蔵

### 白いお米がぼろぼろ落ちる



昔、但馬（たじま）の楽々浦（ささうら）の村に、貧しい漁師の男が住んでいました。毎日、楽々浦であみを打って働いていましたが、暮らしは少しも楽になりません。そんなある日、男の夢にお地蔵様があらわれて、こんなふうにおっしゃいました。

「私は、大水にさらわれて、楽々浦の底にしずんでいるのだよ。暗いし冷たいし、その上ここにいたのでは、人々を救うこともできない。どうかおまえの力で助けておくれ」

ふしぎな夢もあるものだ。男はそう思いましたが、翌日さっそくあみを打って水底をさぐってみました。すると、夢のとおりのお地蔵様があみにかかってあがってきたのです。男はさっそく、小さなお堂をこしらえて、お地蔵様をていねいにお祭りしました。

あくる日、男がお参りしてみると、お地蔵様の足元に白い米つぶがたくさん散らばっています。どうしたことかと思って見ていると、なんとお地蔵様の鼻の穴からぼろり、ぼろりと米つぶがこぼれ落ちているではありませんか。男はびっくりするやらうれしいやら。さっそく、おけを持ち出して、お地蔵様の鼻の下に置きました。



ぼろりぼろりとこぼれ落ちるお米は、だんだんとおけの中にたまってゆきます。  
「これはありがたい。もう苦勞をして働かなくても暮らしていける」

それからというもの、お地蔵様の鼻の穴からこぼれるお米で、男はだんだん豊かになりました。いつまでも止まることなく出てくるお米を、近所の人たちに分けてやるようにもなりました。

ある日、男は考えました。

「あの鼻の穴がもっと大きければ、もっとたくさんお米が出てくるんじゃないかな。そうすれば、もっといい暮らしができる」

ようっ！ 男はのみと金づちを持ち出すと、さっそくお地蔵様の鼻の穴をけずりはじめました。

トン、カン、カン・・・。

鼻の穴は少しずつ大きくなってゆきます。「よしよし」男はにっこりしました。

「もう少しだ」

ところが、あと少しというところで、手元がくるってしまったのです。

「あっ！」

しまったと言うひまもなく、次のしゅん間、お地蔵様の鼻は欠け落ちていました。そしてそれきり、お地蔵様の鼻から出ていたお米は、ぱったりと出なくなっていました。

男はぼう然としましたが、もう元にはもどりません。

「何とばちあたりなことをしてしまったんだろう」

男はすっかり目が覚めました。心から反省し、毎日お地蔵様にお参りしておいのりするようになりました。前にもまして、楽々浦であみを打ち、いっしょうけんめい働きました。やがて男はおよめさんをもらい、二人は幸せに暮らしたということです。

今でも、鼻の欠けたお地蔵様は、楽々浦のほとりにあるお堂の中で、村の人たちの暮らしを見守っています。どんな願い事でも、ひとつだけちゃんとかねてくれるというお地蔵様には、毎日きれいな花が絶えることがありません。



鼻かけ地蔵 白いお米がぼろぼろ落ちる  
おわり



## 粟鹿山

### 「大山」の地名伝説

遠い昔のことです。

但馬（たじま）の山東（さんとう）や和田山（わだやま）のあたりは、向こう岸が見えないほど広い湖でした。粟鹿山（あわがやま）や、まわりの高い山々も、その湖の上に頭を出した島でした。人々は、粟鹿山のことを、大山（おおやま）と呼んでいたそうです。

ある日のこと、アマツヒダカヒコホホデミノミコトという神様が、天から粟鹿山の頂上に降りてきました。そして山の上からあたりを見回して、「この広い湖の水を海へ流し出して、広い土地を造ったならば、人々が住みやすくなるだろう」と考えました。



ここで、この長い名前の神様のことを、少しだけお話ししておきましょう。

アマツヒダカヒコホホデミノミコトは、天の上にある、高天原（たかまがはら）という神様の国から下ってきたニニギノミコトが、地上でコノハナサクヤヒメと結婚（けっこん）して生まれた三人の子（ホデリノミコト・ホスセリノミコト・ホオリノミコト）の一人、ホオリノミコトの別名だということです。

ホオリノミコトにはもう一つ名前があって、山幸彦（やまさちひこ）とも呼ばれていました。お兄さんのホデリノミコトは、海幸彦（うみさちひこ）と呼ばれています。『古事記』という本には、山幸彦が兄の海幸彦との争いに勝って、海の神のむすめ、豊玉姫（とよたまひめ）と結婚し、ウガヤフキアヘズノミコトという子供が生まれたと記されています。そしてこのウガヤフキアヘズノミコトの子供が、日本で最初の天皇である、神武天皇（じんむてんのう）になったという神話へと続いてゆくのです。





さて、粟鹿山の頂上から下りると、アマツヒダカヒコホホデミノミコトは、水をせき止めていた山をけりくずしました。水はごうごうと音を立てて、みんな日本海へと流れ出してしまいました。そのあとには広い土地ができましたが、まだ水気が多くてぬかるんでいたところもありましたので、そこには大きな石のお地蔵様をうめこんで、土地を固めたそうです。

それからというもの、この土地にはたくさんの人が住み着いて、あちこちに豊かな村ができました。人々は、アマツヒダカヒコホホデミノミコトが国を見わたした山を、見国岳（みくにだけ）と呼んで毎日拜んでおりました。

ある日のこと、アマツヒダカヒコホホデミノミコトが見国岳で休んでおると、一頭の美しい牝鹿（めじか）が、三本の粟（あわ）の穂（ほ）を角の上ののせてやって来て、うやうやしくささげました。これが粟鹿山という名の始まりになったのです。その後人々は、山のふもとに粟鹿神社（あわがじんじゃ）を建てて、アマツヒダカヒコホホデミノミコトをお祭りするようになったということです。



粟鹿山 「大山」の地名伝説

おわり

## 紀行「国造りの神様と鼻かけ地蔵」

### 神々の伝説とはるかな過去の記憶

去年の伝説紀行に登場したアメノヒボコノミコトは、但馬の国造りをした神様（人物？）でもあった。けれども但馬地方には、ほかにも国造りにまつわるお話がいくつか伝えられている。各々の村にも、古くから語り継がれた土地造りの神様の伝説があったのだ。

太古、人々がまだ自然の脅威と向かい合っていたころから、それを克服して自分たちの望む土地を開拓するまでの長い時間の中で生まれてきたのが、そのような神様たちの伝説なのだろう。「五社明神の国造り」や「粟鹿山（あわがやま）」の伝説は、そんな古い記憶をとどめた伝説のように思える。

二つの伝説に共通しているのは、「但馬（特に円山川（まるやまがわ）流域）はかつて湖だったが、神様（たち）が水を海へ流し出して土地を造った」という点である。実はこの「かつて湖だった」というくだりは、必ずしも荒唐無稽（こうとうむけい）な話ではなさそうなのだ。今から6000年ほど前の縄文時代前期は、現代よりもずっと暖かい時代だった。海面は現在よりも数m高く、東京湾や大阪湾は今よりも内陸まで入り込んでいたことが確かめられている（縄文海進）。

但馬の中でも円山川下流域は非常に水はけの悪い土地で、昭和以降もたびたび大洪水を起こしている。近代的な堤防が整備されていてもそうなのだから、そんなものがない古代のことは想像に難くない。実際、円山川支流の出石川周辺を発掘調査してみると、地表から何mも、砂と泥が交互に堆積した軟弱な地層が続いている。

豊岡市中谷や同長谷では、縄文時代の貝塚が見つかっている。中谷貝塚は、円山川の東500mほどの所にある縄文時代中期～晩期の貝塚だが、現在の海岸線からは十数km離れている。長谷貝塚はさらに内陸寄りにある、縄文時代後期の貝塚である。これらの貝塚は、かつて豊岡盆地の奥深くまで汽水湖が入り込んでいたことを物語っている。

縄文時代中期だとおよそ5000年前、晩期でもおよそ3000年前のことである。「神様たちが湖の水を海に流し出した」という伝説は、ひょっとするとこういった太古の記憶を伝えているのではないだろうか。

### 円山川をさかのぼる

円山川をさかのぼって北から南へ。それぞれの神社（北から順に、絹巻神社、小田井縣神社、出石神社、養父神社、粟鹿神社）を訪ねて、五社明神のお話を考えてみた。途中、鼻かけ地蔵さんと、伝説に登場する来日岳（くるひだけ）に立ち寄ったのはもちろんである。

## 絹巻神社

円山川が日本海に注ぐすぐ手前、豊岡市城崎町（きのさきちょう）の気比に、国造りをした五社明神（但馬五社）のひとつ、絹巻神社（きぬまきじんじゃ）がある。円山川と背後の山に挟まれた狭い場所に、河口の方、つまり北を向いて建てられた社殿は、僕たちが訪ねたときにはちょうど工事の最中であった。どうしてこんな狭い場所をわざわざ選んだのだろう。単に建物をというなら、ほかにもっと適地があったんじゃないだろうか。神様が河口をいらんでいる、それには、水との苦闘を繰り返した歴史が隠されているような気がするの、僕の思い込みだろうか。



奉納された北前船の碇



円山川の対岸から



絹巻神社（鳥居）



絹巻神社（本殿）



絹巻神社（看板）

## 鼻かけ地蔵



お地蔵様



本当に鼻がない？

絹巻神社から少し円山川をさかのぼった右岸に、楽々浦（ささうら）という、普通の川では珍しい大きな入り江がある。この楽々浦のほとりに立っているのが、鼻かけ地蔵様だ。円山川から大きく入り込んだ浦は、まわりを囲む小高い山の緑を静かな水面に映した、とても美しい場所である。

鼻かけ地蔵様は、村の人たちにとっても愛されているようで、お祭りを拝見に伺った時には、まさに村中総出のにぎわいだった。区長の岩村隆雄さんのお話では、昔から村でお祭りをしてきたが、『まんが日本昔ばなし』で放送されてから、「鼻かけ地蔵尊祭」として盛大におこなうようになったという。テレビアニメがきっかけで、人々のつながりも強くなったというのは、いかにも現代のお地蔵様らしいエピソードだなと思う。

楽々浦には、ほかに「浮弁天」という弁天様もお祭りされている。「どんなに水かさが上がっても、弁天様だけは沈まない」という伝説があると岩村さんから伺った。

波静かな楽々浦は、美しい景色だけでなくよい漁場としても、古くから生活の糧を与えてくれただろう。どことなくユーモラスな鼻かけ地蔵様にお参りして、何となくほっとしたような気分になりながら、次の目的地を目指した。



楽々浦の景観



お堂の遠景



お堂



お祭り



浮き弁天の遠景



鳥居



## 来日岳

楽々浦からそう遠くない円山川左岸、ちょうど豊岡の町と城崎とを分けるような場所にあるのが、来日岳。少し上流側から見ると、川面にたおやかな山容を映す風景がとても美しい山である。国造りの伝説では、このあたりにあった大岩を、神様が突き崩して水路を開いたことになっている。その真偽は別として、確かにこの来日岳のあたりは、川の左右から山が迫り、兩岸の平野もぐっと狭まっているから、円山川が洪水をおこしたときには水の流れがせき止められそうに見える。



円山川と来日岳



雲海の曙光



日出



頂上の石仏たち



雲海を背に



輝く雲海



雄大

この来日岳の頂上からは、夏から秋にかけての早朝、素晴らしい雲海を見ることができる。日の出直前の山頂に立つと、遠くに床尾の山々が見え、手前の豊岡盆地から来日岳のふもとにかけて、綿菓子や並べたような雲海が広がる。日の出が近づくとともに、少しずつ色を変える雲は、川の流れに沿うようにごくゆったりと海の方へと流れてゆく。豊岡盆地の奥深くまで湖となっていた時代、ここからはどんな風景がながめられたのだろう。山頂に立って想像するだけで、ちょっと神様気分である。



床尾山の遠景



雄大な床尾山の山容

## 小田井縣神社



参道から

豊岡市街地の東端、円山川の堤防のすぐわきには、小田井縣神社（おだいがたじんじゃ）がある。南北に延びるまっすぐな街路に向かって建つ石の鳥居をくぐると、きれいに整えられた、明るい境内である。鳥居は南向きだが、本殿は川の方（東）を向いて建てられているから、これも水と関係があるのだろうか。お祭りされているのは、オオナムチノミコトである。



小田井縣神社(門)



小田井縣神社(境内)



本殿と拝殿



拝殿から



## 出石神社

豊岡市出石町（いずしちょう）宮内にある出石神社（いずしじんじゃ）も、但馬五社のひとつである。出石神社にはアメノヒボコノミコトが祭られていて、この人物自身が泥海だった豊岡を開墾したという話が伝えられている（詳細は『ひょうご伝説紀行～語り継がれる村・人・習俗～』参照）。小田井縣神社に祭られているオオナムチノミコトは、『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』では国占めで争ったライバルなのだけれど、但馬ではどうだったのだろうか。



出石神社（鳥居）



出石神社（桜門）



出石神社（境内）

## 養父神社と齋神社

さらに川をさかのぼった養父市養父市場（やぶしやぶいちば）にあるのが、養父神社（やぶじんじゃ）である。やはり円山川に面して建つ神社であるが、ここには「お走りさん」とか「お走り祭り」と呼ばれる祭りが伝わっている。



狛犬たち



養父神社（鳥居）



養父神社（拝殿）



養父神社（看板）



森に映える朱色の橋



齋神社（鳥居）



残念なことにまだ見たことがないのだけれど、毎年4月15日から16日にかけて、150kgもある神輿（みこし）を担いで、片道およそ18kmもある齋神社（いつきじんじゃ）まで往復する祭りで、特に途中でおこなわれる大屋川の川渡りは圧巻だそうである。祭りの由来は、「但馬五社の神様たちが、齋神社の神様に大蛇退治をお願いしたので、そのお礼としておこなわれるようになった」ものだとしていて、伝説のページとは少し内容が異なっている。ただ、「豊岡のあたりが泥海だった」という点は共通しており、但馬のこの伝承が同じ起源をもっていることが想像できる。



齋神社（本殿）



木立の中を上る階段



齋神社（看板 お走り祭）

## 粟鹿神社



粟鹿神社(鳥居)



粟鹿神社(門)

そして円山川の水源の一つ、粟鹿山のふもとにあるのが粟鹿神社（あわがじんじゃ）である。古代の主要街道の一つであった山陰道、現在の国道427号線が、遠阪峠（とおざかとうげ）を越えて但馬に入って間もなくの南に、以前はうっそうとした鎮守の森を見ることができたが、現在では高速道路に視界を遮られている。



粟鹿神社(本殿)



背後には小さな丘がある



灯がともる



勅使門

『延喜式』の中では、但馬一宮、名神大社と定められている神社である。古くから朝廷の尊崇も厚く、勅使門を備えた格式高い神社は、巨杉が育つ深い鎮守の森に囲まれて、古代の雰囲気そのままに伝えている。本殿の背後には、ご神体として祭られている小山があるが、これはどう見ても自然の山には見えない。

この勅使門には、精緻な鳳凰（ほうおう）の彫刻が施されている。社務所で伺ったところによると、この鳳凰は、かつて夜ごとに鳴き声をあげていたという伝説があるそうだ。



鳳凰



掘り出された鳥居の礎石

## 粟鹿山



粟鹿山(遠景)



霧が昇る

河口から数十キロメートル。円山川に沿う五社の伝説は、どのようにしてできあがってきたのだろうか。その背後にあった太古の記憶は、どうすれば解き明かすことができるのだろうか。アマツヒダカヒコホホデミノミコトが降り立ったという粟鹿山を最後に、今回の紀行を終えることにしたい。



頂上から粟鹿神社方向を望む



頂上から丹波側の眺望



## 用語解説

アメノヒボコノミコト（あめのひぼこのみこと）

天日槍・天日矛とも書く。またアメノヒボコともいう。

記紀や『播磨国風土記』などに記された伝説上の人物。新羅の王子で、妻の阿加流比売（あかるひめ）を追って日本に來たという。その後、越前、近江、丹波などを経て但馬に定着し、その地を開拓したとされている。出石神社の祭神。

円山川（まるやまがわ）

兵庫県北部を流れて日本海に注ぐ但馬最大の河川。朝来市円山から豊岡市津居山（ついやま）に及ぶ延長は67.3km、流域面積は1,327平方キロメートル。流域には平野が発達し、農業生産の基盤となっている。河川傾斜が緩やかで水量も多いため、水上交通に利用され、鉄道が普及するまでは重要な交通路となっていた。

縄文海進（じょうもんかいしん）

後氷期の世界的気温上昇に伴い、完新世初頭（約1万年前）に始まり、縄文時代前期の約6,000年前に最盛期を迎えた海面上昇。最盛期の海面は、現在より数メートル高かったと考えられている。

中谷貝塚（なかのたにかいづか）

豊岡市中谷に所在する縄文時代中期～晩期の貝塚。1913年に発見された、但馬地域を代表する貝塚の一つである。出土する貝はヤマトシジミが98%を占めており、ほかにハマグリ、アサリ、マガキなどが見られる。また、クロダイ、タイ、ニホンジカ、イノシシ、タヌキなどの骨、トチ、ドングリなども出土している。ヤマトシジミは海水と淡水が入り混じる汽水域に生息することから、縄文時代の豊岡盆地が、入り江となっていたことがわかる。

長谷貝塚（ながたにかいづか）

豊岡市長谷に所在する縄文時代後期の貝塚。出土する貝はヤマトシジミが80%を占め、サルボウ、マガキ、ハマグリなども見られる。また、タイ、フグ、ニホンジカ、イノシシ、タヌキなどの骨、トチ、ノブドウなども出土している。中谷貝塚同様、豊岡盆地が汽水域の入り江であったことを示す遺跡である。

絹巻神社（きぬまきじんじゃ）

豊岡市気比（けひ）の、円山川河口右岸に所在する神社で、但馬五社の一つ。天火明命（あまのほあかりのみこと）、天衣織女命（あまのえおりめのみこと）、海部直命（あまのあたえのみこと）を祭神とする。背後の山地に広がる、シイ、クスノキ、サカキ、ダブ、ヤマザクラ、ツバキなどの暖地性樹林は、県の天然記念物に指定されている。

来日岳（くるひだけ）

豊岡市城崎町の円山川左岸にある山。標高は566.7m。山麓には式内社（しきないしゃ）の久流比神社（くるひじんじゃ）が祭られている。夏季の早朝には、山頂から雄大な雲海を見ることができる。

小田井縣神社（おだいがたじんじゃ）

豊岡市小田井町に所在する式内社で、大己貴命（おおなむちのみこと）を祭神とする、但馬五社の一つ。羽柴秀吉の中国地方遠征にともない、多くの神領・神供田を没収されて衰微したが、17～18世紀に復興した。昭和になり、円山川河川工事で移転や境内の改築が行われて現在に至る。

## 用語解説

オオナムチノミコト（おおなむちのみこと）

記紀や風土記に見られる神。国造り、国土経営などの神とされるほか、農業神、商業神、医療神としても信仰される。大穴牟遲神・大己貴命・大穴持命・大汝命など、さまざまに表記される。『播磨国風土記』では、葦原色許乎命（あしはらのしこをのみこと）、伊和大神と同一神とみなされているようである。また記紀では、大国主神（おおくにぬしのかみ）と同一神として扱われる。こうした神名の多重性は、本来、各地域で伝承された別個の神を、記紀編集などの過程で統一しようとしたため生じたものであろう。

出石神社（いずしじんじゃ）

豊岡市出石町宮内に所在する式内社（しきないしゃ）で、但馬五社の一つ。但馬国の一宮（いちのみや）。アメノヒボコを祭神とし、アメノヒボコが新羅よりもたらした八種神宝（やくさのかんだから）を祭る。

播磨国風土記（はりまのくにふどき）

奈良時代に編集された播磨国の地誌。成立は715年以前とされている。原文の冒頭が失われて巻首と明石郡の項目は存在しないが、他の部分はよく保存されており、当時の地名に関する伝承や産物などがわかる。

養父神社（やぶじんじゃ）

養父市養父市場に所在する式内社（しきないしゃ）で、但馬五社の一つ。倉稻魂命（うかのみたまのみこと）、大己貴命（おおなむちのみこと）、少彦名命（すくなひこなのみこと）などを祭神とする。

お走りさん・お走り祭り（おはしりさん・おはしりまつり）

養父神社で4月15・16日におこなわれる祭りで、但馬三大祭に数えられる。祭りの由来は、但馬五社の神々が養父市斎（いつき）神社の彦狭知命（ひこさしりのみこと）に頼んで豊岡市瀬戸の岩戸を切り開いてもらい、豊かな大地が生まれたので、養父大明神が代表として、彦狭知命にお礼参りするという故事による。

祭りの朝、「ハットウ、ヨゴザルカ」のかけ声で、神輿は養父神社を出発。斎神社までの往復35kmを練り走る。重さ150kgの神輿が、軽く走っていくように見えたことから「お走り」という名が付いたとされる。もとは旧暦12月におこなわれていたが、厳寒の季節で川渡りが大変であったことから、明治10（1877）年に現在の日程になったという。

斎神社（いつきじんじゃ）

養父市長野に所在する神社で、彦狭知命（ひこさしりのみこと）を祭神とする。養父神社との間でおこなわれる「お走り祭り」は、但馬三大祭の一つとされる。

粟鹿神社（あわがじんじゃ）

朝来市山東町粟鹿に所在する式内社。但馬五社の一つで、但馬国一宮ともされている。延喜式に定める名神大社（みょうじんたいしゃ）で、彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）または日子坐王（ひこいますおう）を祭神とする。勅使門は市指定文化財。



## 用語解説

### 延喜式（えんぎしき）

藤原時平、忠平らにより、延喜5（905）年から編纂が始められた法令集で、全50巻。完成は927年。967年から施行され、その後の政治のよりどころとなった。

### 名神大社（みょうじんたいしゃ）

延喜式で定められた神社の社格。鎮座の年代が古く由緒正しくて霊験ある神社。名神社。

### 勅使門（ちやくしもん）

勅使（天皇の使者）が寺社に参向した時、その出入りに使われる門。

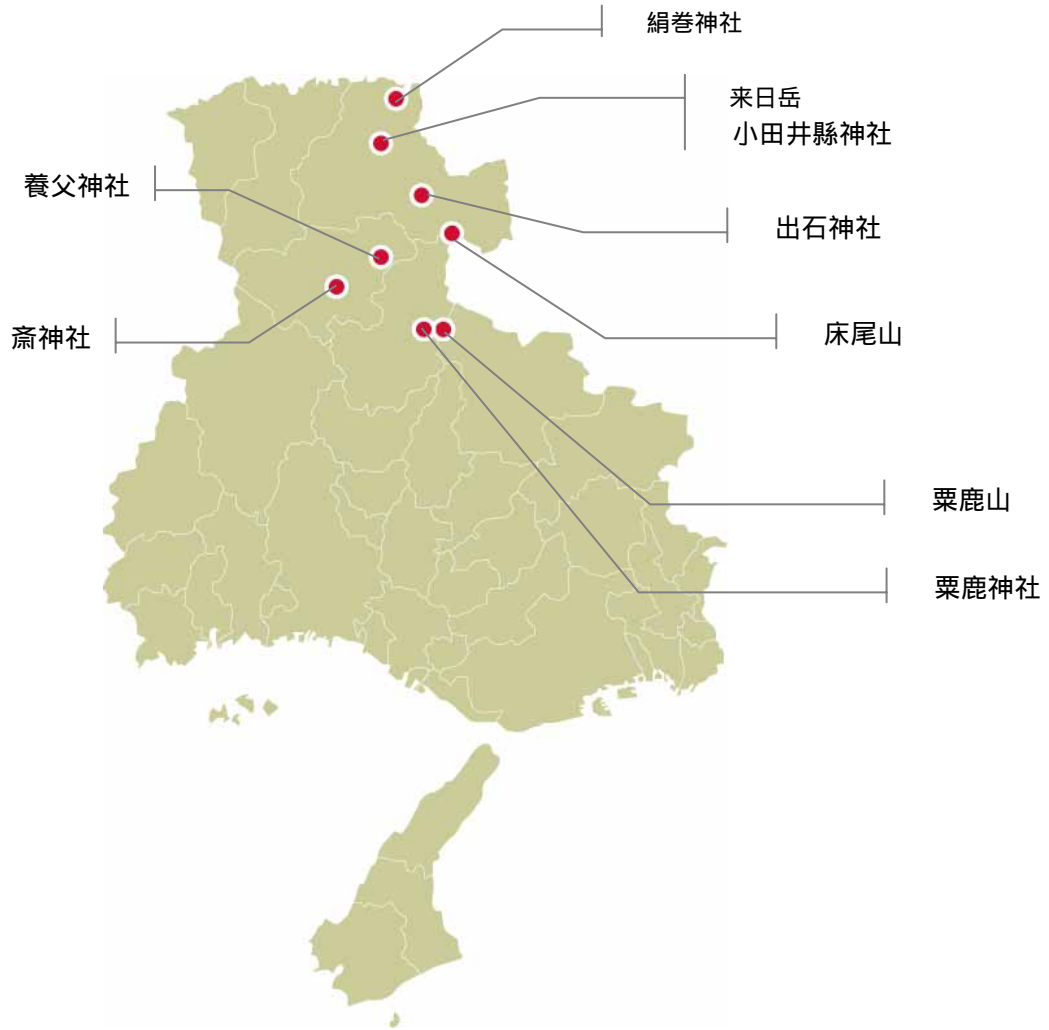
### アマツヒダカヒコホホデミノミコト（あまつひだかひこほほでみのみこと）

記紀神話に登場する神。邇邇芸命（ににぎのみこと）が、高天原から九州の高千穂の峰に降り、木花之佐久夜毘売（このはなのさくやひめ）と結婚して産まれた子の一人。表記は天日高日子穗穗出手見命であり、アマツヒコヒコホホデミノミコトとも読む。三人の子は、火照命（ほでののみこと）、火須勢理命（ほすせりのみこと）、火遠理命（ほおりのみこと）と呼ばれる。このうち火遠理命の別名が、アマツヒダカヒコホホデミノミコトとされている（『古事記』による）。また、火照命は別名を海幸彦（うみさちひこ）、火遠理命は別名を山幸彦（やまさちひこ）ともいう。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	兵庫県むかしむかし 西播・但馬	1974	兵庫県老人会連合会	兵庫県老人会連合会
	兵庫の伝説	1980	兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
	日本伝説大系第8巻	1988	黄地百合子・酒向伸行・田中久夫・福田晃	みずうみ書房
	Relation 第144号	2007	加芝輝子	たじま農業協同組合
歴史・文化	旧石器考古学事典 三訂版	2007	旧石器文化談話会	学生社
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	兵庫県史考古資料編	1992	兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
	日本思想体系1 古事記	1982	青木和夫・石母田正・佐伯有清 校訂	岩波書店
その他	日本古典文学大系2 風土記	1958	秋元吉郎 校訂	岩波書店
	兵庫のふるさと散歩4 但馬編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
	但馬五社絹の宮	2007	絹巻神社	絹巻神社
	養父神社由緒記	不詳	養父神社	養父神社

## 所在地リスト



養父神社	養父市養父町市場840
床尾山	豊岡市出石町奥山・朝来市和田山町竹ノ内
出石神社	豊岡市出石町宮内99
来日岳	豊岡市城崎町来日
小田井縣神社	豊岡市小田井町15-6
絹巻神社	豊岡市気比4006
齋神社	養父市長野265
鼻かけ地蔵	豊岡市楽々浦77
粟鹿山	丹波市青垣町稲土・朝来市山東町粟鹿
粟鹿神社	朝来市山東町粟鹿2152

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と伝

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館


〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日


ひょうご

—神と仏—

伝説紀行



難儀にあったお薬師様  
がっこんじ、がっこんじ



青倉山の不思議な水  
祠の滝が目をいやす

伝説

難儀にあったお薬師様  
がっこんじ、がっこんじ  
青倉山の不思議な水  
祠の滝が目をいやす

紀行

朝来の神仏と文化財をめぐる

- ・ 古代の道が交わる地
- ・ 南但馬の王墓
- ・ 八子と薬師様
- ・ 青倉山を登る
- ・ そびえ立つ巨岩と流れ落ちる滝
- ・ 生野から播磨路へ

関連情報

用語解説  
参考書籍  
所在地リスト



## 難儀にあったお薬師様 がっこんじ、がっこんじ



何百年か昔、楽音寺（がくおんじ）というお寺にどろぼうが入りました。「何か金目のものはないか」と探しているうちに、お祭りしてあった一尺二寸（四十センチほど）ばかりの金のお薬師様が目につきました。お薬師様は、病気を治してくれる仏様で、手には薬が入った小さな壺（つぼ）を持っています。

「よしよし、こいつは金になるぞ」

どろぼうはそう言うと、お薬師様をつかんでそのままにげてしまいました。

どろぼうは、遠くまでにげると、お薬師様を鍛冶屋（かじや）に持って売り飛ばしました。この鍛冶屋も悪い人だったので、買い取っ薬師様をとかして、金のかたまりにしてしまおうと考えました。

さっそく火をおこしましたが、どんなに火をたいてあぶっても、お薬師様は少しもとけません。おこった鍛冶屋は、それなら金づちでたたいてつぶしてやろうと、大きな金づちを持ち出しました。そして大金づちをふりあげると、力いっぱいお薬師様をたたきました。ところがお薬師様は少しもへこんだりしません。「ええい、このやろう」と、たたくと、こんどはたたくたびに、お薬師様が「がっこんじ、がっこんじ」とおっしゃるではありませんか。



鍛冶屋はびっくりしてこしをぬかしました。

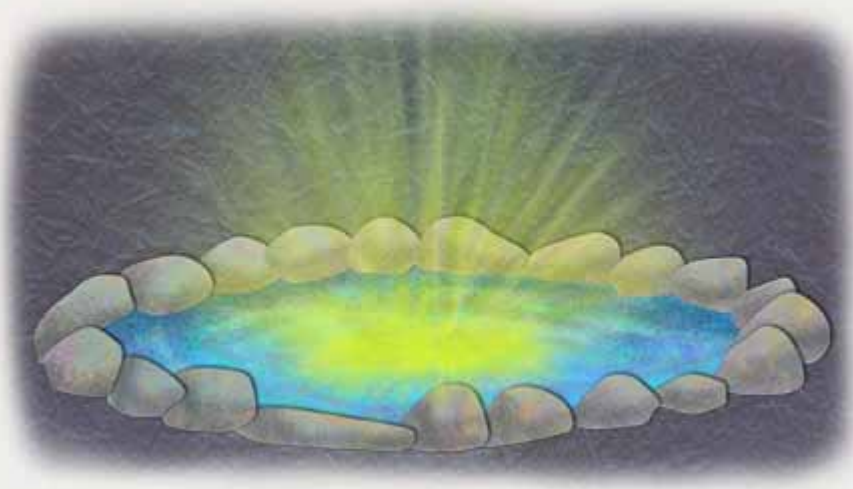
「こんな仏様をつぶしたりしたら、ひどいばちがあたるかもしれん」

こわくなった鍛冶屋は、日が暮れるのを待って、お薬師様をかかえるとこっそり楽音寺までやってきました。そして、お堂のそばにあった弁天池に、お薬師さまを放りこんでにげてしまいました。



それから何日か後のことです。ちょうど日暮れ時に遠坂峠（とおざかとうげ）を歩いていた旅人が、楽音寺のあたりをながめていると、何かぴかぴかと光るものが見えます。「いったい何だろう」と思いながら、その光るものを目指して歩いていると、弁天池に行き当たりました。

光は、池の中からさしています。



旅人はおどろいて、お寺のお坊（ぼう）さんのところへ飛んでゆきました。話を聞いたお坊さんが、村人にたのんで池の底をさらってみると、なんと先日ぬすまれたお薬師様が見つかったではありませんか。

お坊さんはさっそく、お薬師様のために新しいお堂をたてて、ていねいにお祭りしました。

火で焼かれたり、金づちでたたかれたり、たいへんな難儀（なんぎ）にあったのに、無事にもどってきたお薬師様です。きっとどんな病気でも、けがでも助けてくださるだろうという話が、遠くまで伝わりました。それからというもの、近所だけでなくずっと遠い村からも、お参りする人が絶えなくなったということです。

## 青倉山の不思議な水 祠の滝が目をいやす

むかし、朝来（あさご）の伊由谷（いゆうだに）に、たいそう心の優しい、親孝行な息子が、年老いた父親といっしょに住んでいました。二人で小さな畑を耕すほかに、山に入って山菜や川魚をとって暮らしをたてていました。

ある春のことです。お天気がよい日を選んで、父親は近くの山へ入っていました。うどをとろうと思ったのです。うどが思いのほかたくさんとれるので夢中になってしまい、気がつくやうに遠く青倉山（あおくらさん）まで来ていました。

「あまりおそくなると、息子が心配するだろう」

父親は、うどを束ねて背負いましたが、立ち上がろうとしたとたん足がもつれて、よろよろとたおれてしまいました。すると運悪く、さきほど自分がかり取ったうどの株の上にたおれこんで、切り株で右目をさしてしまったのです。

右目からは血があふれてきます。ひどい痛さをがまんしながら、父親はけんめいに歩いて、ようやく家まで帰り着きました。



息子は、父親が血だらけの顔で帰ってきたので、おどろきました。小さな山の村ですから、もちろんお医者さんなどいるはずがありません。井戸（いど）の水で手ぬぐいをしばって、傷口を冷やしたり、いろいろと手をつくしましたが傷の痛みはひどくなる一方です。

とほうに暮れた息子は、必死になって神仏にいのりました。

そのうちに息子は、昼間のつかれもあつてうとうととねむりこみました。

「高い山の滝（たき）まで行って、その水を取ってきてつけなさい」

真っ白な衣を着た老人が、息子の夢の中に現れてそう言ったところで、息子ははっと目を覚ましました。

「何ともふしぎな夢だ。けれど、もしかすると神様のお告げだろうか」

そう思った息子は、ねむっている父親を近所の人にとのみ、山へ入って滝をさがしました。

ところが滝はなかなか見つかりません。必死になって山という山を探しまわり、つかれきった時、小さな祠（ほこら）を見つけました。

「ああ、もう一度神様にお願いしてみよう」

息子が祠の前で手を合わせようと近づいてみると、水音が聞こえます。ふと見上げると、祠の上に滝があるではありませんか。

「これが、お告げにあった滝にちがいない」

大喜びした息子は、その水をくむと飛ぶように走って家まで帰り、父親の目を洗ってやりました。

するとおどろいたことに、あれほどの痛みがすうっと消えてゆき、父親の目は元通り見えるようになったのです。



この話を伝え聞いて、目の病気で困っている人たちが、山へ登って滝の水を求めるようになりました。そしてたくさんの方が、ふしぎな滝の水で目を治し、喜んで帰ってゆきました。こうして青倉山の水は、目によい水として知られるようになったのです。

それ以来、青倉神社の氏子（うじこ）たちは、うどを食べなくなったということです。

青倉山の不思議な水 祠の滝が目をいやす

おわり



## 紀行「朝来の神仏と文化財をめぐる」

### 古代の道が交わる地

都から日本海側へと延びる古代の山陰道と、播磨（はりま）から北へ続く但馬道は、朝来市（あさごし）の和田山町で交わる。山々にトンネルが掘られ、高速道路が平地を縦貫した現代からは想像もできないけれど、古代からこの道に沿って、どれほど多くの人や物が往来したことだろうか。きっと、さまざまうわさや物語、伝説もまた、行き交う人々によってもたらされ、運ばれていったのだろう。

この但馬道 現在で言うと国道312号線ということになるのだが に沿って、北から順に伝説の舞台を訪ねながら、いくつか文化財にも立ち寄ってみよう。

### 南但馬の王墓



茶すり山古墳（遠景）



茶すり山古墳（全景）



整備が進む古墳



雄大な墳丘

最初の訪問地は、旧山東町である。国道312号線の加都（かつ）北交差点を東へ折れて、県道136号線を走ると、1kmちょっとで道は豊岡自動車道の下を通るが、くぐり抜けたちょうどその場所にあるのが、茶すり山古墳である。

2002年に発掘調査がおこなわれたこの古墳は、直径が90mもある円墳で、円墳としては近畿最大、全国でも第4位という大古墳である。墳丘の一部は壊されていたが、幸いにも埋葬部は無傷で、見つかった二つの木棺からは、大量の副葬品が出土し、5世紀に築かれたものであることがわかった。朝来市和田山町にある、城ノ山（じょうのやま）古墳、但馬最大の前方後円墳である池田古墳などに後続する、但馬の王墓であることは疑いない。古墳は現在、整備工事がおこなわれており、見学できるようになる日も遠くないだろう。



墳頂から平野を望む

## 八チと薬師様

茶すり山古墳のふもとを過ぎると、間もなく低いながら峠道にさしかかる。ここが宝珠峠（ほうじゅとうげ）である。「宝珠」というとお寺に関係しそうな名前だが、調べてもその由来はわからなかった。ただこの付近では、高速道路の建設にともなって多くの遺跡が発掘されているから、宝珠峠を越える道が長い歴史をもっていることは間違いないだろう。峠を越えて緩やかな坂道を下ると、左手（北）に楽音寺の集落が広がっている。

楽音寺は、平安時代初期に創建されたとされており、楽音寺へと続く道の両側には、八チの像がたくさん飾られている。いったいなぜかといぶかしく思う人もいるかもしれないが、楽音寺の境内は、「ウツギノヒメハナバチ」という小さな八チが、大集団で営巣することで有名で、県の天然記念物に指定されているのである。

ご住職の藤本さんによれば、最近では巣の数がずいぶん減ったので、土を入れ替えて巣作りがしやすいように努力されているそうである。



楽音寺（全景）



楽音寺（門）



楽音寺（薬師堂）



薬師堂の内部



境内  
(砂地はウツギノヒメハナバチ生息地)



焼けた薬師様は  
木造の薬師様の胎内仏



焼けただれた薬師さま



上記3枚の写真は楽音寺提供

八チの巣を踏まないように、境内の端を通って薬師堂を拝見した。伝説のお薬師様は、秘仏で、25年に1度だけ開帳されるということである。その代わりにとお薬師様の写真を見せていただいたが、小さな像は半身以上が焼けただけで表面が粟立ったようになった部分もあり、思っていたよりずっとひどい様子であった。

盗人がこのお薬師様を放り込んだのが、楽音寺のそばにある弁天池だった。現在の楽音寺にも、南に接して弁天様がお祭りされた池があるのだが、藤本住職によると、本来の弁天池は、楽音寺の南側にある尾根を越えたところにあった池ではないかという。その池は、今はもう埋め立てられてなくなってしまったということであった。



池と弁天様のお堂



遠阪峠から楽音寺方面を望む



弁天池（看板）

今の弁天池からも、かつてもう一つの池があった場所からも、伝説にあったように遠阪峠（とおざかとうげ）を遠望できる。



## 青倉山を登る



青倉神社の鳥居

楽音寺からもう一度国道312号線に戻り、4kmほど南下すると、道の左手（東）に、大きな石の鳥居が見える。これが青倉神社の鳥居で、道から見ると、鳥居の向こう側に青倉山の雄大な山体が見える。

この鳥居から、東の奥にある川上の集落を経るのが、青倉神社の正規の参道だと思うが、撮影機材を抱えた取材では徒歩というわけにもゆかないので、もう一つ南の多々良木（たたらぎ）から車で登る道を選んだ。



鳥居から見た  
青倉山

国道から2kmほど東へ入ると、谷をせき止めた多々良木ダムが見えてくる。上流側にある旧生野町の黒川ダムから落下させた水で発電し、その水を多々良木ダムに蓄えて、再び黒川ダムへくみ上げるといふ、揚水式発電の下部ダムである。1974年に完成したダムは、普段は青い水をたたえているが、湧水期には湖底に沈んだ集落の跡が現れる。石垣や庭の木立、畑の跡など、ダムに沈んだ集落は、遠い未来には現代の暮らしを伝える遺跡になるかもしれない。

ダム湖の横を通り、次第に斜度を増す道を登ってゆくと、やがて青倉神社の駐車場が見えるので、そこに車を停めて山腹に建てられた神社を目指す。新しく設けられた参道を100mほど歩き、長くはないけれど急な石段を登らねばならない。

## そびえ立つ巨岩と流れ落ちる滝

青倉神社の社殿はかなり風変わりである。普通なら、拝殿があってその奥に本殿があるのだが、ここは2階建てになっていて、お参りする人は靴を脱いで2階に上がり、畳の部屋に座って神様を拝むのである。



青倉神社（本殿）



本殿の入り口



長い階段を上る

実はこの社殿の裏手には、高さが10mを超える巨大な岩があって、社殿はその岩のすぐ前にぴったりとくっつけるように建てられているのだ。社殿一階の奥には、岩の根元が見えている。

社殿の右手から裏へ回ると、ご神体の巨岩の後ろには、幅10mほど、高さは20m以上ありそうな岩壁がそびえ、そこに滝が流れ落ちている。これが伝説に語られた、目の病気に効く水なのである。



本殿背後の巨岩

こけむした岩肌を流れ落ちる清冽（せいれつ）な水の音以外、何も聞こえない山奥である。ずっと昔、杣道（そまみち）を登りつめてきた人は、巨岩と水が織り成す光景に圧倒され、この場所こそ神が宿ると信じたことだろう。

伝説の地を訪ねると、しばしばこうした風景に出会い、そのたびに心が洗われるような気がする。



岩壁を流れ落ちる水



## 生野から播磨路へ

国道をさらに南へ走ると、旧生野町に入り、「椀貸し伝説」でも訪ねた新井の「椀貸し狐」、崎山稲荷（さきやまいなり）神社も遠くない。

さらに播但国境に至る手前には、2007年に開鉱1200年を迎えたという生野銀山があるから、ここまで訪ねてみてほしい。鉱山開発が始まったと伝えられる大同2年は、奇しくも、楽音寺の創建と同じ年である。この開鉱そのものは伝説的であるとしても、中世には山名氏がここに城を築いて銀山を掌握したとされている。その後は織田信長から羽柴秀吉を経て、徳川家の支配するところとなった。さらには明治時代へと、近世～近代日本で最も重要な鉱山の一つとして採鉱され続けた、兵庫県でも随一の鉱山と言えるだろう。また最近では、飾磨港と生野銀山を結んだ「銀の馬車道」も、近代化遺産の一つとして注目を集めている。

朝来市を縦断してきた「但馬道」は、ここから峠を越えて播磨国へと続いてゆく。



生野銀山（遠景）



旧坑道



生野銀山開坑略記

## 用語解説

### 山陰道（さんいんどう）

都から発し、丹波・丹後・但馬を経て山陰地方を結んだ、古代の主要街道の一つ。兵庫県下では、篠山市、丹波市、遠阪峠を通過して但馬に入り、朝来市、養父市、香美町、新温泉町を経由する。また養父市からは、豊岡市域に所在した但馬国府へ至る支線があった。

### 但馬道（たじまみち）

播磨国と但馬国を結び中国山地を貫く南北の街道。姫路を起点にして粟賀、生野、竹田、和田山、八鹿、納屋、豊岡を経て城崎まで、延長約95kmを測る。温泉として有名であった湯嶋（城崎）へ向かう道として利用されたほか、近世以降は、生野銀山と姫路を結ぶ産業道路としての性格も帯びるようになった。瀬戸内側では市川、日本海側へは円山川と並行して整備されていたので舟運とも競合していたようである。納屋（豊岡市日高町）から北へ城崎までの4里（約16km）の間は道路事情が悪いため、舟に乗るのがよしとされていた。

### 茶すり山古墳（ちゃすりやまこふん）

朝来市和田山町筒江に所在する古墳。5世紀前半に築造された円墳で、直径は90mを測り、円墳としては全国で第4位の規模である。北近畿豊岡自動車道の建設に伴って発掘調査がおこなわれ、頂上部に埋葬された2基の木棺から、畿内以外では初めてとなる「三角板革綴襟付短甲（さんかくばんかわとじえりつきたんこう）」をはじめ、多数の鉄製品、銅鏡、玉類などの副葬品が出土した。5世紀前半の但馬地域の王墓と考えられている。なお古墳は、道路の設計を変更して保存され、2007年現在整備工事中である。

### 城ノ山古墳（じょうのやまこふん）

朝来市和田山町東谷に所在する古墳。4世紀末に築造された円墳で、直径は36mを測る。長さ6.4mという長大な木棺を埋葬しており、人骨のほか、銅鏡6面、石製腕輪、玉類、鉄製品などが出土している。城ノ山古墳の築造は、南但馬における王墓の成立として重視されている。

### 池田古墳（いけだこふん）

朝来市和田山町平野に所在する古墳。古墳時代中期前半に築造された但馬地域最大の前方後円墳で、全長136m、後円部の直径76mを測る。1重の周濠（しゅうごう）をめぐらせる。埋葬施設は、古くからの土取り作業によって完全に破壊されているため不明。墳丘からは埴輪類が、周濠からは木製品が出土している。

### 楽音寺（がくおんじ）

朝来市山東町楽音寺に所在する真言宗の寺院。正覚山（しょうかくさん）と号する。本尊は薬師如来。寺伝によれば、807年の創建とされ、当時は七堂伽藍に12の僧坊を連ねた大寺院であったという。所蔵の経瓦は県指定文化財。また600平方メートルの境内は、ウツギノヒメハナバチの群生地として、県の天然記念物に指定されている。

## 用語解説

### ウツギノヒメハナバチ（うつぎのひめはなばち）

ヒメハナバチ科に属するハチ。体長は10～13mm。学名はAndrena prostomias。年に一度、5月末～6月中旬に現われる。地中に巣を掘り、団子状の花粉を蓄えて幼虫の食餌（しょくじ）とする。

### 遠阪峠（とおざかとうげ）

丹波市と朝来市との境界にある峠。標高363m。古代山陰道にも、遠阪峠を越える路線があった。急峻で、特に冬季には雪が多い難路であったが、現在はトンネルが開通している。

### 青倉神社（あおくらじんじゃ）

朝来市川上に所在する神社。社殿は、青倉山中腹に露頭した巨岩の下に建てられている。祭神は稚産霊神（わくむすびのかみ：日本神話では穀物、養蚕の神）。創建年代は不詳。社殿背後の岩壁から流下する滝の水は、眼病に効果があるとして信仰の対象となっており、参拝者が多い。

### 青倉山（あおくらやま）

朝来市中央部に所在する山。標高は811m。中腹に青倉神社があり、当地の滝の水は眼病に効果があるとして信仰の対象となっている。頂上からの展望が良く登山者も少なくない。

### 生野銀山（いくのぎんざん）

生野鉱山（いくのこうざん）のこと。朝来市生野町に所在する鉱山。807年に発見されたと伝えられており、2007年で開鉱1,200年を迎えたという。室町時代末期から本格的な開発が始まり、織田信長、羽柴（のち豊臣）秀吉らの支配を経て、江戸幕府直轄の鉱山となった。明治29（1896）年からは三菱の経営となり、採掘が続けられたが、昭和48（1973）年に操業を終えた。現在、鉱山跡地は史跡に指定されており、生野鉱物館があって、旧坑道も見学可能である。

### 織田信長（おだのぶなが）

戦国時代末期、尾張の大名（1534～82）。父織田信秀の死後、尾張を継承し、大国であった駿河の今川義元を桶狭間の戦いで敗死させた。その後三河の徳川氏と結んで美濃へ進出し、斎藤氏を滅ぼした。1568年には、足利義昭を奉じて京へ上ったが、1573年にはこれを追放して、室町幕府に終止符を打った。同年には浅井氏・朝倉氏の連合軍を破り、1575年には長篠の合戦で武田勝頼を破って、本州の中央部を押さえ、最大の勢力を誇った。

1576年安土に築城開始。楽市楽座の実施により産業を振興したほか、城下でのキリスト教布教を認めるなど、西洋文化の導入にも意を注いだ。しかし中国地方への進出途上、家臣であった明智光秀に殺害された（本能寺の変）。

### 羽柴秀吉（はしばひでよし）

安土桃山時代の武将（1536～98）。尾張国中村の人。はじめ木下藤吉郎と名乗る。年少の時期から織田信長に仕え、戦功をたてて重用され、羽柴氏を称した。信長の命による中国地方経略の途上で、明智光秀による信長殺害（本能寺の変）が起こった。秀吉は毛利氏と和睦し、山陽道を経て淀川右岸を北上、山崎の合戦で光秀を破った。

その後、各地の大名を服属させた秀吉は、1585年に関白、翌年には豊臣姓を下賜され、また太政大臣に任ぜられて天下統一を達成した。晩年には、朝鮮および明への侵攻を図り、2度にわたって派兵したが失敗に終わった（文禄・慶長の役）。太閤検地による税制の確立、兵農分離政策、都市や主要鉱山の直轄支配など、幕藩体制への基礎をつくった。



## 用語解説

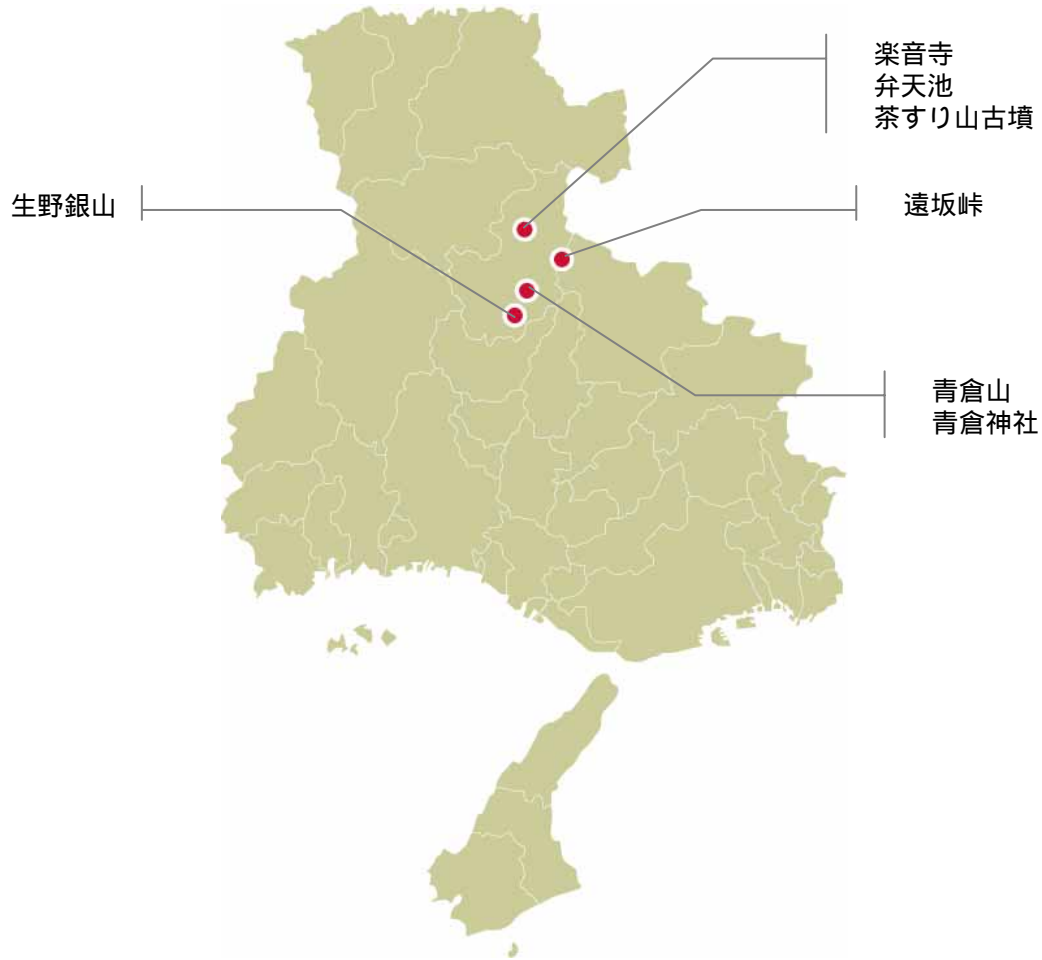
銀の馬車道（ぎんのばしゃみち）

旧生野鉱山寮馬車道の愛称。明治9年に朝来市生野町と姫路の飾磨港との間、市川沿いの約49kmを結んだ馬車専用の道路である。産出した銀を港に運ぶ一方、港から鉱山には精錬に必要な機械や石炭が運ばれた。欧米の最新工法を取り入れた馬車道は、幅約6m、日本初の高速産業道路とも言われる。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話但馬篇	1972	郷土の民話但馬地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	兵庫県むかしむかし 西播・但馬	1974	兵庫県老人会連合会	兵庫県老人クラブ連合会
	兵庫の伝説	1980	兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
歴史・文化	兵庫のふるさと散歩4 但馬編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	兵庫県史考古資料編	1992	兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
	但馬の王墓 茶すり山古墳調査概報	2003	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編	学生社
その他	正覚山楽音寺(参拝者資料)	不詳	楽音寺	楽音寺
	南但馬まほろば紀行(観光用資料)	不詳	南但馬歴史・文化ミュージアム推進協議会	南但馬歴史・文化ミュージアム推進協議会

## 所在地リスト



遠坂峠	丹波市青垣町遠阪
楽音寺	朝来市山東町楽音寺579
弁天池	朝来市山東町楽音寺579
茶すり山古墳	朝来市和田山町筒江
生野銀山	朝来市生野町小野字大谷筋33-5
青倉山	朝来市山内
青倉神社	朝来市山内権現谷5

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日

ひょうご

—神と伝—

伝説紀行

## 妙見の臼

### 不思議な少年の正体

伝説

妙見の臼  
不思議な少年の正体

紀行

妙見菩薩の坐す山と古代の養父

- ・縁に導かれて
- ・妙見の臼と夏祭り
- ・名草神社の朱塗りの塔
- ・飛鳥の夢・但馬の古代
- ・網場から妙見山を望む

関連情報

用語解説  
参考書籍  
所在地リスト



## 妙見の臼

### 不思議な少年の正体

はるかに遠い昔。八鹿（ようか）の妙見山（みょうけんさん）に、妙見菩薩（みょうけんぼさつ）がお下りになったころのことです。

網場村（なんばむら）に森木三右衛門（もりきさんえもん）という人が住んでいました。三右衛門は妻と二人暮らしでしたが、信心のあつい働き者でした。

ある夜のことで、三右衛門が仕事を終えてねようとしていたところ、とんとんと戸をたたく音が聞こえました。

「こんな夜ふけにだれだろうか」

三右衛門がふしぎに思いながら戸を開けてみると、暗やみの中に一人の少年が立っています。

「夜おそく申しわけありませんが、一晩、とめてもらえないでしょうか」

少年のつかれきったようすを見て、気の毒に思った三右衛門は、家に招き入れました。

「何のおもてなしもできんが、休んでいきなされ」

家の明かりであらためて少年を見ると、どうもただの人とは思えません。顔だちはまだ少年ですが、何とも神々しい気配がします。

少年を部屋へ案内した後も、三右衛門はどうも落ち着きませんでした。何か大切なことを忘れていたような気がしてならないのです。そのうちどうしたわけか、蔵の中にしまっている木の臼（うす）のことが気にかかりはじめました。



そこで、三右衛門は妻と相談して、臼を少年の部屋まで運びこみました。すると少年は、当たり前のようにその臼に座ってこう言ったのです。

「私はこれから休ませてもらいます。けれど、私が休んでいる間、けっして部屋の中をのぞかないでください」

そう言われると、三右衛門は、ますます気になってしかたがありません。布団に入っても、なかなかねつかれないまま考えこんでいましたが、夜中をすぎるころ、とうとうがまんできなくなってしまいました。ねどこをそっとぬけ出すと、少年の部屋に近づいて、戸のすきまから中をのぞいてしまったのです。するとそこには、臼にぐるぐると巻きついてねむっている、一ぴきの大きな白い蛇（へび）の姿がありました。

あまりのことに、三右衛門は気を失うほどおどろきました。ふるえながら自分の布団にもどり、そのまま朝までねむることもできませんでした。



ようやく東の空が白みかけたころ、少年は起きてきて、三右衛門に声をかけました。

「とめていただきありがとうございます。私はこれから帰ることにいたします」

支度をととのえて、少年は出て行きました。しかしきみょうなことに、街道ではなく、道のない山の方へと向かってゆきます。神社の森がある山へ向かってまっすぐに進み、やがて、尾根（おね）をこえるところで、その姿が夜明け前の空にくっきりとうかんで見えたのでした。三右衛門はようやく気づきました。

「そうか、妙見さまのお使いだったのだ」

そこで三右衛門は、少年の姿が最後に見えた尾根の上に鳥居を建てて、妙見様をおがむ場所にしました。それから、三右衛門の家は栄えて、お金持ちになったといひます。これを聞いた村人たちは、鳥居がある場所を、富貴が擽（ふきがたわ）と呼ぶようになりました。



しかし、言いつけに背いて部屋をのぞいたためか、その後、この家のあととりに生まれた人は、みんな生まれつき右の目が見えなかったということです。

三右衛門から何代か後、信心のない人がこの家の主になりました。妙見様を信心せず、鳥居が古くなってたおれても、知らん顔をしていたところ、だんだんと貧しくなって、とうとう家は絶えてしまったのです。

けれどもあの臼だけは、分家の三吉（さんきち）があずかっていた。

文化4（1807）年の秋、網場村に大火事がおきました。村中の家が焼けてしまいましたが、臼をしまってあった三吉の蔵だけは焼けませんでした。

「きっと、妙見様が臼を守っておられるのだらう」

そう考えた三吉は、この臼を日光院（にっこういん）へ納めて、供養してもらうようにとたのみました。

こうして、いまでもこのふしぎな臼は、日光院にお祭りされています。

## 紀行「妙見菩薩の坐す山と古代の養父」

### 緑に導かれて

「妙見の臼」 このお話を読んで、とても印象が深かったのを覚えている。妙見様と蛇という組み合わせ、そして今でも伝説の「臼」が伝わっているということが、面白く感じられたのだ。

妙見山そのものにも、強く引きつけられた。何度か、林道を通って蘇武岳（そぶだけ）や三川山（みかわやま）から妙見山までの尾根を歩いたことがあって、美しいブナ林の芽生えや、夏の日の深い森の静けさの鮮烈な印象が残っていたからである。

その後、妙見様を祭っている日光院へ連絡させていただいたところ、森田副住職から「今年は、ちょうど『妙見の臼』の本を作ろうとしていたところです」とうかがって、もう一度驚くことになった。縁とはこういうことを言うのだろうかと思いながら、伝説紀行の旅は始まったのである。

### 妙見の臼と夏祭り



日光院（石碑）

妙見菩薩を祭る日光院は、養父市八鹿町（やぶしようかちょう）の石原にある。背後の妙見山から、東に延びる尾根の中腹に位置していて、ふもとには円山川支流の八木川が流れる。旧八鹿町の中心部から西へ、県道267号日影養父線の緩やかな長い坂を登り、妙見蘇武林道を通って石原の集落を過ぎると、少し急な上り坂となる。そのまま、いくつか大きなカーブを過ぎると、巨樹がそびえる日光院の、白い塀が見える。



日光院（門）



護摩堂



妙見の臼と由緒書



由緒書



日光院（境内）



日光院（看板）



臼の底

境内に足を踏み入れてまず感じたのは、巨樹の香りと、靈気とでも言えるような不思議な印象だった。こけむした地面をはうように根が伸びる。天を指すケヤキはすばらしい母樹で、育苗のための採種もおこなわれているようだ。数百年の巨樹の種子が、人の手を経て、また子孫を残してゆく。考えてみると、これも未来へ向けての伝説と言えるかもしれない。



妙見の臼

日光院の森田副住職のお話では、「妙見の臼」は江戸時代に日光院に奉納されたとのことである。副住職の特別のご配慮をいただいて、宝物の臼と、その由来を記した古文書を拝見することができた。

最初に物語を読んだときは、どっしりとした石臼を思い描いていたのだが、実際は木製の臼で、想像していたよりも深く背が高いものであった。虫食い穴がたくさん開いていて、作られてからの年月を思わせる。普通の餅つきに使うような横杵（よこぎね）には、この臼は深すぎるので、おそらく縦杵（たてぎね）が使われたのだろう。

妙見様のお使いであった蛇が、この臼にどんなふうにかき付いていたのか、森田副住職のお話では、「臼の中に入って、とぐるを巻いていた」とも言われているようだ。

由来の内容は、伝説に語られたとおりである。地元の村の大火でもこの臼は焼け残ったということだから、何か不思議な幸運に恵まれていたのだろう。



妙見菩薩のお使い？





妙見星祭

日光院では、毎年7月18日に夏まつりが開かれている。境内に並べられた、1000を超える紙コップ。その中に点されたろうそくの光が、小さな灯籠（とうろう）のようにゆらめく、ささやかな万灯会である。村の人たちが総出で、日暮れ前から準備をする。それぞれに願い事が書かれた紙コップに火が入るのは、夏の空が藍色になるころである。子供たちは境内で、甘いものをほおばりながら昔話の紙芝居を見る。

去年（2007年）の夏まつりの時には雲が多かったが、晴れていれば、漆黒の空に銀の粉をまいたような星空がながめられたに違いない。

祭りの中でも大切なのが、護摩堂で午後7時半ごろからおこなわれる護摩焚（ごまだき）である。読経の中、数百の護摩木が焚かれる。参拝した人は皆、護摩堂の床に座って合掌しながら、僧侶の読経に唱和する。まだ若い女性が、ごく自然に般若心経を唱和している姿には、驚きとともに、このお祭りが村の人たちにとって本当に身近な、暮らしの一部になっていることを感じた。



妙見星祭

## 名草神社の漆塗りの塔



名草神社（鳥居）



名草神社（境内）



名草神社（本殿）

日光院から5キロメートルほど山を登った所には、名草神社（なぐさじんじゃ）がある。元はこの場所が日光院の位置だったが、神仏分離によって現在の姿になったという。今も残る名草神社の三重塔は、出雲大社の境内に出雲国の守護大名である尼子経久（あまこつねひさ）が願主となって大永7（1527）年に建立したものだ。出雲大社本殿の用材として妙見杉を提供した縁によって、譲り受けたものである。寛文5（1665）年、塔は解体され、日本海を船で運ばれて現在の場所で再建されたのである。昭和62（1987）年に解体修理がおこなわれ、現在では丹塗りの鮮やかな姿となっている。屋根の四隅には、「見ざる、聞かざる、言わざる、思わざる」が陣取っているけれど、忙しい現代、僕たちはなかなかその境地には至らないのである。

名草神社は本殿・拝殿ともに県指定文化財である。急な階段を登りつめると、静穏な明るい境内に、落ち着いた古色をおびた社殿が建っている。



三重塔



名草神社（看板）

## 飛鳥の夢・但馬の古代

妙見山のふもとには、古代にさかのぼる文化遺産がいくつもある。南の山すそ、尾根に抱かれたような谷筋のひとつに、箕谷古墳群（みいだにこぶんぐん）がある。1983年の発掘調査で、2号墳の石室から、銅象嵌（どうぞうがん）の銘文がある鉄刀が出土して一躍有名になった。



箕谷古墳群（石碑）



箕谷古墳群（全景）



2号墳正面



石室内部

象嵌は、細いタガネなどで表面に文字を刻み、そこに金銀や銅などの針金を埋め込んだ後に研ぎ出すという手法である。その後の研究で「戊辰年」は、西暦608年の可能性が高いとされ、古墳や出土した土器の年代を決める上で、たいへん重要な手がかりとなった。

608年は、推古天皇16年にあたる。飛鳥に宮を営んだ女帝の下には、厩戸皇子（うまやどのみこ）、蘇我馬子（そがのうまこ）があり、さらには遣隋使、法隆寺の造営など、飛鳥文化が開花したところである。しかし一方では、その後の「大化の改新」に見られるような、激しい政治的暗闘の時代でもあった。箕谷2号墳に葬られた人物は、そんな時代を生きていたのだ。

刀は、この地の長へ、飛鳥の朝廷から下賜されたものだったのだろうか。鮮やかな五色に彩られた法隆寺の完成、厩戸皇子の死、蘇我氏の興隆と滅亡、中大兄皇子の活躍。古墳の主は、そういった出来事を見たのだろうか。その時代の但馬には、どのような歴史が展開していたのだろうか。想像は尽きない。



戊辰年五月  
□

箕谷2号墳出土  
銘文入鉄刀  
（重要文化財）  
国（文化庁）保管

## 網場から妙見山を望む

箕谷古墳群から北東へ2.5km。八木川が円山川に合流するあたりが、網場（なんば）である。「妙見の白」の主人公、森木三右衛門の屋敷があったのが、この網場村だったということである。ここから妙見山の方をながめると、川の西側になだらかな尾根が延びている。その少しへこんだように見える所が「富貴ヶ撓（ふきがたわ）」であろうか。



網場付近の円山川



富貴ヶ撓



富貴ヶ撓から妙見山を望む

ゆったりと流れる円山川から、何千年も変わらない妙見山をながめる。僕たちの時代は、どんな伝説を、未来の人たちの心に伝えられるだろうか。



## 用語解説

### 妙見山（みょうけんさん）

兵庫県下では各地にこの名を冠した山があるが、ここでは養父市に所在する山。標高は1,139m。氷ノ山後山那岐山国定公園（ひょうのせんうしろやまなぎさんこくていこうえん）に属し、ブナの原生林をはじめ植生がよく保存され、動物も豊富である。

### 日光院（にっこういん）

養父市八鹿町石原に所在する真言宗の寺院。妙見山（みょうけんさん）と号する。本尊は弘法大師作と伝えられる妙見大菩薩。日本三妙見に数えられる。寺伝によれば、敏達天皇（びだつてんのう：6世紀）の時、日光慶重（にっこうけいちょう）が草庵を開いたのがはじまりという。永禄・天正年間（16世紀）には最盛期を迎え、妙見信仰の一大霊場となった。現在名草神社に残る三重塔（重要文化財）は、この時期に出雲大社より日光院へ寄贈されたものである。しかしその後、羽柴秀吉による山陰攻略の兵火で堂宇の多くを焼失したという。江戸時代には復興したが、明治5（1872）年の神仏分離令により、現名草神社と分離した。妙見信仰を示す史料は「日光院文書」として県指定文化財。

### 妙見菩薩（みょうけんぼさつ）

仏教における信仰対象である天部（てんぶ：仏法を守護する天界の善神の総称）の一つ。妙見菩薩は他の菩薩と異なり、インドが発祥ではなく中国で成立した。中国では北斗七星を信仰する思想があり、これが仏教思想と融合して神格化されたものが妙見菩薩だという。「妙見」は、見る力に優れた者の意味であり、真理や善悪を見る力に優れた仏であることを示す。国土を守り幸福をもたらすとされ、日本では、奈良時代から信仰の対象となってきた。全国に散らばる「妙見山」は、妙見菩薩信仰が広くおこなわれていたことを示すものである。

### 名草神社（なぐさじんじゃ）

養父市石原に所在する式内社（しきないしゃ）。妙見山山腹の、標高800m付近に位置する。祭神は名草彦命（なぐさひこのみこと）ほか6神だが、北辰（北極星）とされる天御中主神（あめのみなかぬしのかみ）を含むことから、同地の帝釈寺と一体化して、平安時代末より妙見信仰の場となっていたという。明治5（1872）年の神仏分離令により、現日光院と分離した。日光東照宮を模した本殿、厳島神社を模した拝殿は県指定文化財。また、16世紀に出雲大社より寄贈された三重塔は国の重要文化財。

### 神仏分離（しんぶつぶんり）

明治時代初め、政府が天皇の神権的権威確立のためにとった宗教政策。従来習合していた神道と仏教を分離することを旨とする。この政策が廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）の運動となって、全国で仏教に対する破壊的活動が起こり、廃寺となる寺院が続出した。

### 出雲大社（いずもたいしゃ）

島根県出雲市大社町に所在する式内社（しきないしゃ）。出雲国一宮。祭神は大国主神（おおくにぬしのかみ）。記紀神話では、大国主神が天津神に出雲国を譲るよう言われた時に、「国譲りの代償として、この地に立派な御殿を建ててほしい」と求めて建てられたのが、出雲大社の始まりであるという。縁結びの神様としても知られ、神在月（かみありつき：一般的には神無月（かなづき）と呼ぶが出雲国のみは神在月と称する。10月のこと）に、全国から八百万の神々が集まり神議がおこなわれるという話はあまりにも有名である。



## 用語解説

出雲国（いずものくに）

律令下の国の一つ。現在の島根県東半部にあたる。国府・国分寺は、現在の松江市に置かれた。

守護大名（しゅごだいみょう）

南北朝期～室町時代に、将軍足利氏によってその国の支配を委任された守護。主に足利氏の一門や有力家臣が任命された。守護は幕府から与えられた権限を利用して、国人（こくじん：領地を所有する在地の武士）層を家臣として組織化し、この結果、守護と国人層による領国制度が成立していったとされている。

尼子経久（あまこつねひさ）

戦国大名（1458～1541）。出雲国守護代であった尼子清定の子。はじめ守護代となったが、1484年、室町幕府に追われて流浪した。その後勢力を回復して、因幡（いなば：現在の鳥取県東部）以西の山陰地域を攻略し、山陽道にも進出した。このため周防（すおう：現在の山口県東部）の大内氏と対立したが、自身の配下であった毛利元就（もうりもとなり）が大内氏と結んだため、以後は大内・毛利の両氏と交戦した。

箕谷古墳群（みいだにこふんぐん）

養父市八鹿町小山に所在する、古墳時代後期の5基の円墳からなる古墳群。円山川支流である八木川の、左岸に派生する尾根に挟まれた谷に立地する。1983～84年に体育施設建設に伴う発掘調査がおこなわれ、2号墳から「戊辰（ぼしん）年五月」の銅象嵌（どうぞうがん）銘文がある大刀が出土して注目を集めた。「戊辰年」は、西暦608年とされており、同古墳で出土した須恵器（すえき）とともに、古墳の年代を研究する上での基準資料となっている。箕谷古墳群は国史跡、大刀は重要文化財に指定されている。

推古天皇（すいこてんのう）

第33代の天皇（554～628）で、史上初の女性天皇。母は蘇我氏の出身。敏達天皇（びだつてんのう）の皇后であったが、その没後に立った用明天皇（ようめいてんのう）がわずか2年で病死、さらに崇峻天皇（すしゅんてんのう）が在位5年で死亡（蘇我馬子による暗殺説がある）すると、蘇我氏に推されて即位した。厩戸皇子（うまやどのおうじ：聖徳太子）を摂政とし、大臣蘇我馬子との均衡を図りつつ政治を運営した。その治世には冠位十二階や十七条憲法の制定、遣隋使（けんずいし）の派遣、法隆寺の建立、国史の編纂など、政治制度の整備や文化の振興などがおこなわれた。

厩戸皇子（うまやどのおうじ）

用命天皇の皇子（574～622）。聖徳太子は諡名（おくりな：死後に贈られる名）。おばに当たる推古天皇の摂政として、政権の整備をおこなった。冠位十二階と十七条憲法の制定（ただし十七条憲法については、『日本書紀』編纂時の創作とする説もある）、遣隋使（けんずいし）派遣などの業績は著名である。大陸文化の導入、仏教興隆に尽力し、四天王寺、法隆寺などを建立した。

蘇我馬子（そがのうまこ）

飛鳥時代の中央豪族（？～626）。地位は大臣（おおおみ）。大連（おおむらじ）であった物部守屋を滅ぼし、天皇との姻戚関係を利用して勢威をふるった。仏教を受容し、法興寺（ほうこうじ：馬子が建立した日本最古の伽藍。飛鳥寺）を建立した。子は蘇我入鹿。

## 用語解説

### 法隆寺（ほうりゅうじ）

奈良県生駒郡斑鳩町に所在する聖徳宗の寺院。聖徳太子が建立した寺院のひとつで、創建年代は7世紀の前半とされる。創建時の伽藍は670年に焼失したことが『日本書紀』に記録されており、金堂、五重塔などがある現在の西院伽藍は、その後に再建されたものと考えられている。西院伽藍は、木造建築としては世界最古のもので、建築のうち西院伽藍と東院伽藍の夢殿が国宝に指定されているほか、仏像、工芸品などに多数の国宝がある。1993年に「法隆寺地域の仏教建造物」としてユネスコの世界文化遺産に登録。

### 中大兄皇子（なかのおおえのおうじ）

飛鳥時代、舒明天皇（じょめいてんのう）の皇子（626～71）。後の天智天皇（てんじてんのう）。中臣鎌足とともに蘇我氏を滅ぼし、孝徳・斉明の両天皇の皇太子として、大化改新後の政治を主導した。外交では百済を支援したが、白村江（はくすきのえ）の戦いで唐と新羅の連合軍に大敗した。668年に滋賀県の大津京で即位。

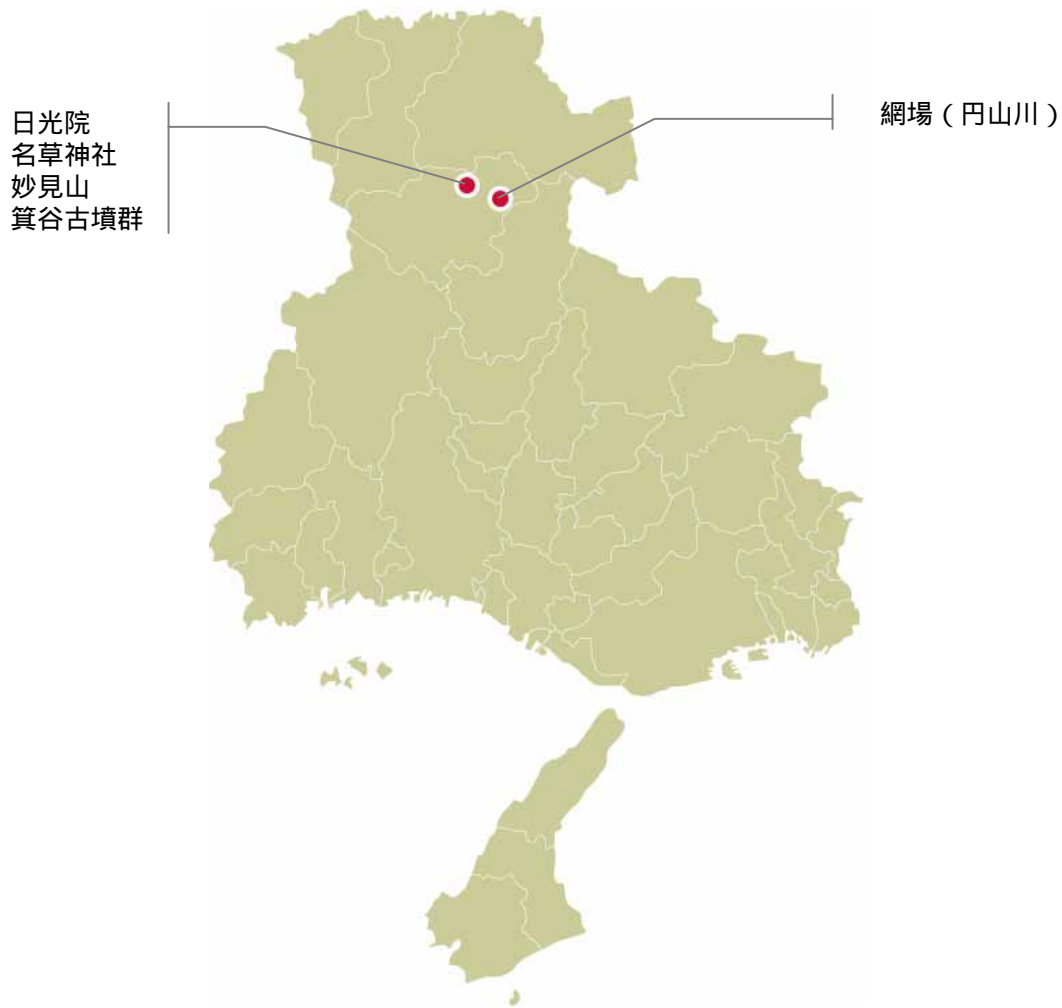
### 円山川（まるやまがわ）

兵庫県北部を流れて日本海に注ぐ但馬最大の河川。朝来市円山から豊岡市津居山（ついやま）に及び延長は67.3km、流域面積は1,327平方キロメートル。流域には平野が発達し、農業生産の基盤となっている。河川傾斜が緩やかで水量も多いため、水上交通に利用され、鉄道が普及するまでは重要な交通路となっていた。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話但馬篇	1972	郷土の民話但馬地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
歴史・文化	兵庫県むかしむかし第二集	1974	兵庫県老人会連合会	兵庫県老人会連合会
	日本古典文学大系65 日本書紀 下(推古天皇の条)	1975	坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注	岩波書店
	兵庫のふるさと散歩4 但馬編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	兵庫県八鹿町ふるさとシリーズ第4集 八鹿の文化財	1991	八鹿町教育委員会編	八鹿町教育委員会
	兵庫県史考古資料編	1992	兵庫県史編集専門委員会	兵庫県

## 所在地リスト



網場 (円山川)	養父市八鹿町下網場
日光院	養父市八鹿町石原450
名草神社	養父市八鹿町石原1755-6
妙見山	美方郡香美町村岡区作山・養父市八鹿町尾崎
箕谷古墳群	養父市八鹿町小山・西家ノ上

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日



ひょうご

—神と伝—

伝説紀行

## 埴の里とはじか野村

大笑いした仲良しの神様

伝説

埴の里とはじか野村

大笑いした仲良しの神様

紀行

国造りをした神様のあしあと

- ・『播磨国風土記』を手に
- ・埴の里と初鹿野
- ・「ぬか」がつく地名
- ・揖保川・林田川の流域

関連情報

用語解説

参考書籍

所在地リスト

## 埴の里とはじか野村 大笑いした仲良しの神様

遠い昔のことです。播磨（はりま）の国に大汝命（おおなむちのみこと）と、少彦名命（すくなひこなのみこと）という二人の神様がいました。大汝命は体が大きくて、たいへん力持ちの神様でした。一方の少彦名命は、体は小さいのですが、すばしこくてがまんづよい神様でした。二人の神様はとても仲良しで、いっしょに播磨の国づくりをしていました。

ある日のことです。少彦名命がこんなふうに言い出しました。

「埴（はに：赤土のねん土のこと）の荷物を背負って歩いて行くのと、うんこをがまんして歩いて行くのと、どっちが遠くまで行けると思う」

「おれだったら、うんこをがまんする方だな」

大汝命は笑って答えました。

「じゃあ、競争してみるかい」

「ようし、やってみよう」



小さい少彦名命は、大きくて重たい埴を背負って歩きはじめました。あんまり重たいので、よろよろしています。それを見た大汝命は笑いました。

「荷物を持たないで旅をするのは、楽でいいもんだ」

少彦名命は、顔じゅうあせまみれになり、うんうん言いながら歩いています。一方の大汝命は、楽々と歩いてゆきました。

旅を続けて何日かたつと、少彦名命の顔はあせとほこりにまみれて、黒くよごれていました。もうへとへとです。ところがあれほど笑っていた大汝命も、まっ青な顔をして、あぶらあせを流していました。うんこをがまんするのが、苦しくなってきたのです。



神崎郡（かんざきぐん）についたころ、とうとうがまんしきれなくなった大汝命は、「もうだめだ」とさげんで道ばたの草むらにかけこむと、たまっていたうんこを、一気に出してしまいました。あまりの勢いに、うんこはササの葉にはじきとばされ、飛び散って石になりました。こういうわけで、うんこがはじき飛ばされたあたりのことを、初鹿野（はじかの）と呼ぶようになりました。

それを見た少彦名命も、「おれも、もうだめだ」と言って、背負っていた埴を道ばたに投げだしました。この埴も同じように固まって、石になりましたので、そのあたりを埴岡里（はにおかのさと）といいます。

「いや参った。本当に苦しかった」  
大汝命がそう言って、大きなため息をつくと、少彦名命も「まったくだ、苦しかったよ」と答え、二人は顔を見合わせて大笑いしました。



埴の里とはじか野村 大笑いした仲良しの神様  
おわり



## 紀行「国造りをした神様のあしあと」

### 『播磨国風土記』を手に

去年制作した、『ひょうご伝説紀行～語り継がれる村・人・習俗～』の中でも取り上げた「伊和大神」は、いろいろな顔を持っている神様だ。多くの解説書で、『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』の中に登場する伊和大神（いわのおおかみ）とオオナムチノミコトは、同じ神様だとされているようだし、アシハラノシコヲノミコトもそうであるらしい。記紀の記述からは「オオクニヌシ」という名もあてられるらしい。僕は神道についてはまったくの門外漢だから、一人の神様がこんなにたくさん名で呼ばれることが当たり前なのかどうかはわからないけれど、『播磨国風土記』の記事からすると、本来は別々の神様だったものが、朝廷によって神様の系譜が整理される過程で、次第にまとめられたような気がしてならない。ただ『播磨国風土記』では、そのまとめり方が不十分なのではないだろうか。

その当否はともかく、『播磨国風土記』には、オオナムチノミコトとスクナヒコナノミコト、この二人が国造りをした神様としてたびたび登場しているし、各地の神社にも祭られているのをしばしば見かける。風土記に登場する回数と内容からは、オオナムチノミコトの方が主役のようであるが、大小二人の神様に関する記事は、どちらかという土臭くて、整然と構成された神話というよりは、地域ごとに、人々の暮らしに根づいていた伝承という印象が強い。伝説のページで紹介した「埴の里」の話も、おおらかで素朴な笑いを伝える話である。

そこで今回の伝説紀行では、この二人の神様が関わった場所を訪ねてみることにした。播磨国の広い範囲に散らばっている伝承の地を、すべて巡るのはなかなか大変なことだが、何かの折ごとに訪ねてみるのも良いのではないだろうか。今回は、「埴の里」からの出発である。

### 埴の里と初鹿野



日吉神社（鳥居から）

「埴の里」の伝承地は、神崎郡神河町比延（かんざきぐんかみかわちょうひえ）にある日吉神社である。JR播但線（ばんたんせん）の寺前駅から、県道404号線を、1kmほど南へ下った所にある大きな神社が、日吉神社である。僕たちが取材に訪れた時は、ちょうど秋祭りの時期であつたらしく、たくさんの幟（のぼり）が立てられていた。

この神社の本殿裏に、スクナヒコナノミコトが担いでいた埴土から変わった岩があるとされている。そして、市川を挟んだ対岸に三角形の山容を見せる初鹿野山（はじかのやま）とその周辺が、オオナムチノミコトの糞（くそ）がササにはじかれて飛び散った場所だそうだ。

『播磨国風土記』の伝承では、この物語の後に、応神天皇（おうじんてんのう）がこの地を訪れて、「この土は土器作りに使える」と述べたので、埴岡という名になったとも記されているので、埴岡については二つの伝説が重なっているのかもしれない。実際には、この地に特に古代の窯跡が多いわけではないし、目立って埴輪が出土するわけでもない。今のところこの物語に、特別な考古学的意味を与えるわけにはゆかないだろう。ただ埴岡や初鹿野山は、市川と越知川が合流する地点に近く、ここから下流に向かって一気に平野が開けるから、位置的にも重要な場所と言えそうで、応神天皇がわざわざ訪れたという伝承も、こうしたことを背景にできあがったのではないだろうか。



日吉神社（看板）



祭の幟が並ぶ



日吉神社（境内）

## 「ぬか」がつく地名



粳岡（遠景）



粳岡（近景）

埴岡の里から12～3kmほど市川に沿って下った姫路市船津町八幡に、粳岡（ぬかおか）がある。ここは、伊和大神の軍勢がアメノヒボコノミコトの軍勢と戦ったとき、食事のために米をつき、その粳が集まって岡になったという。船津町八幡の集落を通る細い道を北へ抜けたところにある、竹藪におおわれた少し小高い場所なのだが、実際に行ってみると、「岡」という言葉から受ける印象ほど高くはない。ここから東へ2kmほど離れた、福崎町八千種は、アメノヒボコノミコトの軍勢が集結した地点ということになっているから、伊和大神の軍は市川を背に東に向いて、アメノヒボコノミコトの軍は山を背に西に向いて布陣したことになるのだろうか。

「ぬか」といえば、加西市網引町には糠塚山（ぬかつかやま）がある。加古川支流の満願寺川の南にある、標高150mほどの山である。一見したところは何でもない山なのだが、『播磨国風土記』では、オオナムチノミコトが近くの村で米をつかせた時、その糠がこの山まで飛び散ったのだという。「米（稲）をつく」というおこないは、粳岡と糠塚山のほかにも何度も登場するが、単に食料としての米を精製するということの他に、何か象徴的な意味があったのだろうか。それとも、米糠を盛り上げたようななだらかな山容から、古代の人たちが素直な空想をめぐらせたのだろうか。糠塚山の周囲に続く豊かな里山をながめながら、想像してみる。

加西市内には、他にもオオナムチノミコトゆかりの場所がある。豊倉町にあるフラワーセンターの、西に隣接する飯盛山もそうだ。『播磨国風土記』には、「オオナムチノミコトの御飯をこの山に盛った」と記されている。この文だけでは、オオナムチノミコト自身が食するご飯なのか、人々がオオナムチノミコトを祭るための祭事だったのかが分かりにくい、

僕が参照した本では、後者の説を採っていた。そこから2kmほど南の牛居町（うしいちょう）は、風土記に見える、「オオナムチノミコトが碓（うす）を作って稲をついた碓居谷（うすいだに）」に比定されている。風土記にはほかにも、オオナムチノミコトの事跡と関連して箕谷（みのたに）、酒屋谷（さかやだに）という地名がみえる。これらの場所も加西市周辺にあったのだろうが、今の地名からその痕跡を見つけることはできない。



糠塚山と万願寺川



糠塚山（近景）

## 揖保川・林田川の流域

さて目を西に転じてみると、播磨西部、揖保川（いぼがわ）や林田川の流域にも、オオナムチノミコトを中心にした伝承地がある。

『播磨国風土記』には「御橋山」という地名が見えるが、これは現在のたつの市新宮町鯨崎（はしさき）にある屏風岩（びょうぶいわ）に比定されている。「オオナムチノミコトが俵を積み上げて橋にしたので、山の岩が橋に似ている」という伝承であるが、揖保川の対岸あたりからながめると、なるほど上流（北）に向かって順番に岩を積み上げたようにも見える。この岩の段を登って、神様が天に昇ったと考えたのだろう。



屏風岩（遠景）



天まで届く岩





峰相山（遠景）

揖保川下流域にはほかにも、アシハラノシコヲノミコトがアメノヒボコノミコトとの国占め競争のとき、大あわてで食事をしてご飯粒をこぼしたという「粒丘（いいぼのおか：たつの市揖保町中臣）」、伊和大神がこの地方の国占めをしたときに、鹿が来て山の上に立ったことから名づけられた「香山里（かくやまのさと：たつの市新宮町香山）」などがあるし、宍粟市（しろうし）にも、伊和大神やアシハラノシコヲノミコトにゆかりの地名などが点在している。



峰相山と麓の村

揖保川の東を流れる林田川流域にも、いくつかの伝承地が残っている。

姫路市伊勢にある峰相山（みねあいさん）は、中世の文献『峰相記』で有名であるが、『播磨国風土記』では、オオナムチノミコトとスクナヒコナノミコトが、埴岡の里にある「生野の峰」からこの山を見て、「あの山に稲種（いなだね）を置こう」と話しあい、ここに稲種を積み上げたので、山の姿も稲積に似ているとしている。「稲積」とは、刈り取ったままの、穂がついた稲だとされているが、どのあたりがそう見えるのか、現地に立ってみてもよくわからなかった。それをどんなふうに積み上げたのだろう。

伊勢から林田川に沿って遡ると、昨年の伝説紀行でも取り上げた安師里（あなしのさと）に至る。ここでは伊和大神が安志姫命（あんじひめのみこと）に求婚し、容れられなかったので、石で林田川の上流をせき止めて、別の方へ流れるようにしたという。林田川の水量が少ないことを説明する伝説である。



林田川の流れ



水は多くない

国造りをした神様（たち）の足跡は、佐用郡、宍粟郡（しろうぐん）、揖保郡（いぼぐん）、神崎郡（かんざきぐん）、飾磨郡（しかまぐん）へと広がっている。今回の紀行ではまわりきれなかったが、『播磨国風土記』には、オオナムチノミコトが、乱暴者の息子ホアカリノミコトを捨ててしまおうとしてその怒りをまねき、船が難破してしまったという伝承もある。その遺称地は、姫路市街の西にいくつか比定されているし、姫路城が建つ姫山 風土記では日女道丘（ひめぢをか）としている の女神と、「オオナムチスクナヒコネノミコト」が契ったという記事も見える。



安志姫神社（鳥居）



安志姫神社（境内）



伊和神社の拝殿にとる灯



伊和神社  
北側の参道

編まれてから1300年近くたつ『播磨国風土記』。このとても不思議な本を手に、いろいろな神様たちの舞台をめくっていると、播磨の古代史がおぼろげに見えてくるような気がする。



## 用語解説

### 伊和大神（いわのおおかみ）

宍粟市（しろうし）一宮町の伊和神社の祭神。大己貴神（おこなむちのかみ）、大国主神（おおくにぬしのかみ）、大名持御魂神（おこなもちみたまのかみ）とも呼ばれ、『播磨国風土記』では、葦原志許乎命（あしはらのしこをのみこと）とも記されている。

播磨国の「国造り」をおこなった神とされており、渡来人（神）のアメノヒボコ（天日槍・天日矛とも書く）との土地争いが伝えられている。

風土記には、宍粟郡から飾磨郡の伊和里（いわのさと）へ移り住んだ、伊和君（いわのきみ）という古代豪族の名が見えることから、この伊和氏が祖先を神格化した神と考えられている。

なお、伊和神社の社叢（しゃそう）は、『改訂・兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック2003』の自然景観でBランクに選定されている。

### 播磨国風土記（はりまのくにふどき）

奈良時代に編集された播磨国の地誌。成立は715年以前とされている。原文の冒頭が失われて巻首と明石郡の項目は存在しないが、他の部分はよく保存されており、当時の地名に関する伝承や産物などがわかる。

### オオクニヌシ（おおくにぬし）

記紀神話に登場する神。大国主命（おおくにぬしのみこと）。『日本書紀』ではオオナムチノミコトと同一神とされ、『播磨国風土記』では、葦原志許乎命（あしはらのしこをのみこと）、伊和大神と同一神とみなされているようである。オオクニヌシは、スサノオの子とも六世あるいは七世孫ともされ、出雲神話の祖となっている。

### スクナヒコナノミコト（すくなひこなのみこと）

記紀や風土記に見られる神。『日本書紀』では少彦名命（すくなひこなのみこと）、『古事記』では少名毘古那神（すくなびこなのかみ）。『播磨国風土記』では、オオナムチノミコトとともに国造りをおこなったとされている。道後温泉や玉造温泉などを発見したと伝えられ、温泉開発の神としても祭られる。『古事記』によれば、少彦名命は、天之羅摩船（アメノカガミノフネ：ガガイモのさやでできた船）に乗り、蛾（が）の皮の衣服を着て出雲国にやってきた小さな神とされており、民話「一寸法師」の原型とも言われている。

### 日吉神社（ひよしじんじゃ）

神崎郡神河町比延（ひえ）に所在する神社。祭神は大山咋神（おおやまくいのかみ）、オオナムチノミコト、スクナヒコナノミコト。『播磨国風土記』の、「埴岡里」の伝説に関係がある神社といわれる。（『兵庫県大百科事典』下）

### 初鹿野山（はじかのやま）

神崎郡神河町に所在する山。標高は507.8m。初鹿野の名は、『播磨国風土記』の中の「波自加（はじか）村」に由来する。

## 用語解説

### 応神天皇（おうじんてんのう）

『日本書紀』によれば第15代の天皇。仲哀天皇（ちゅうあいてんのう）の皇子で、母は神功皇后とされる。名は誉田別命（ほむたわけのみこと）。記紀によれば在位は41年で、西暦310年に111歳あるいは130歳で没したとされる。伝説的色彩の強い天皇であるが、『宋書』の東夷伝に見える倭王讃（さん）を、応神天皇にあてる説がある。陵墓は大阪府羽曳野市（はびきのし）に所在する、誉田御廟山古墳（こんだごびょうやまこふん）に比定されている。誉田御廟山古墳は、全国で第2位の、全長425mを測る前方後円墳で、築造は5世紀前半と考えられている。

### アメノヒボコノミコト（あめのひぼこのみこと）

天日槍・天日矛とも書く。またアメノヒボコともいう。

記紀や『播磨国風土記』などに記された伝説上の人物。新羅の王子で、妻の阿加留（流）比売（あかるひめ）を追って日本に来たという。その後、越前、近江、丹波などを経て但馬に定着し、その地を開拓したとされている。出石神社の祭神。

### 加古川（かがわ）

兵庫県の南部を流れる一級河川。延長96km、流域面積1,730平方キロメートルを測る県下最大・最長の河川である。但馬・丹波・播磨の三国が接する丹波市青垣町の粟鹿山（あわがさん、標高962m）付近が源流で、途中小野市、加古川市などを流れ、加古川市と高砂市の境で播磨灘に注ぐ。

加古川の水運は、古代から物流を担う経路であったと考えられ、特に日本海に注ぐ由良川水系へは峠を越えずに到達できることから、「加古川 - 由良川の道」とも呼ばれて、日本海側と瀬戸内側を結ぶ重要なルートとされている。

### 峰相記（みねあいき）

1348年ごろに著された中世前期の播磨地方の地誌。著者は不明である。播磨国峯相山鶏足寺（ぶしょうざんけいそくじ）に参詣した僧侶と、そこに住む老僧の問答形式で著されている。日本の仏教の教義にはじまり、播磨の霊場の縁起、各地の世情や地誌などが記されている。安倍晴明（あべのせいめい）と芦屋道満（あしやどうまん）の逸話、福泊築港、悪党蜂起の記述など、鎌倉時代末の播磨地域を知る上で重要な記録となっている。最古の写本は、太子町斑鳩寺（はんきゅうじ）に伝わる1511年の年記をもつもの。

### たつの市（たつのし）

兵庫県の播磨地域西部に位置する市。市域は、南北に流れる揖保川（いぼがわ）に沿って広がり、南は瀬戸内海に面する。平成19年11月現在の人口は、約82,000人。風土が生み出した手延素麺（てのべそうめん）や醤油醸造、皮革産業、かばん産業といった伝統的な地場産業で知られる。市街の中心には、龍野城がある。

### 安師里（あなしのさと）

『播磨国風土記』に記された里の一つ。現在の姫路市安富町の安志付近に比定される。里名の起源は安師比売神（あなしひめのかみ：安志姫とも表記する）による。『播磨国風土記』によれば、安師比売が伊和大神の求婚を断ったことに怒った伊和大神が、林田川の源流をせき止めて流れを変えてしまったため、水量が少なくなったという。

## 用語解説

ホアカリノミコト（ほあかりのみこと）

『播磨国風土記』によれば、オオナムチノミコトの子であるが、記紀ではアメノオシホミミとヨロヅハタトヨアキツシヒメとの子とされている。『播磨国風土記』によると、あまりにも乱暴な子であったため、オオナムチが船に乗せて出航した際、立ち寄った場所に置き去りにしようとした。これがホアカリノミコトを怒らせ、海が荒れ狂ったため船は難破して、オオナムチは非常な難渋をしたという。

日女道丘（ひめぢをか）

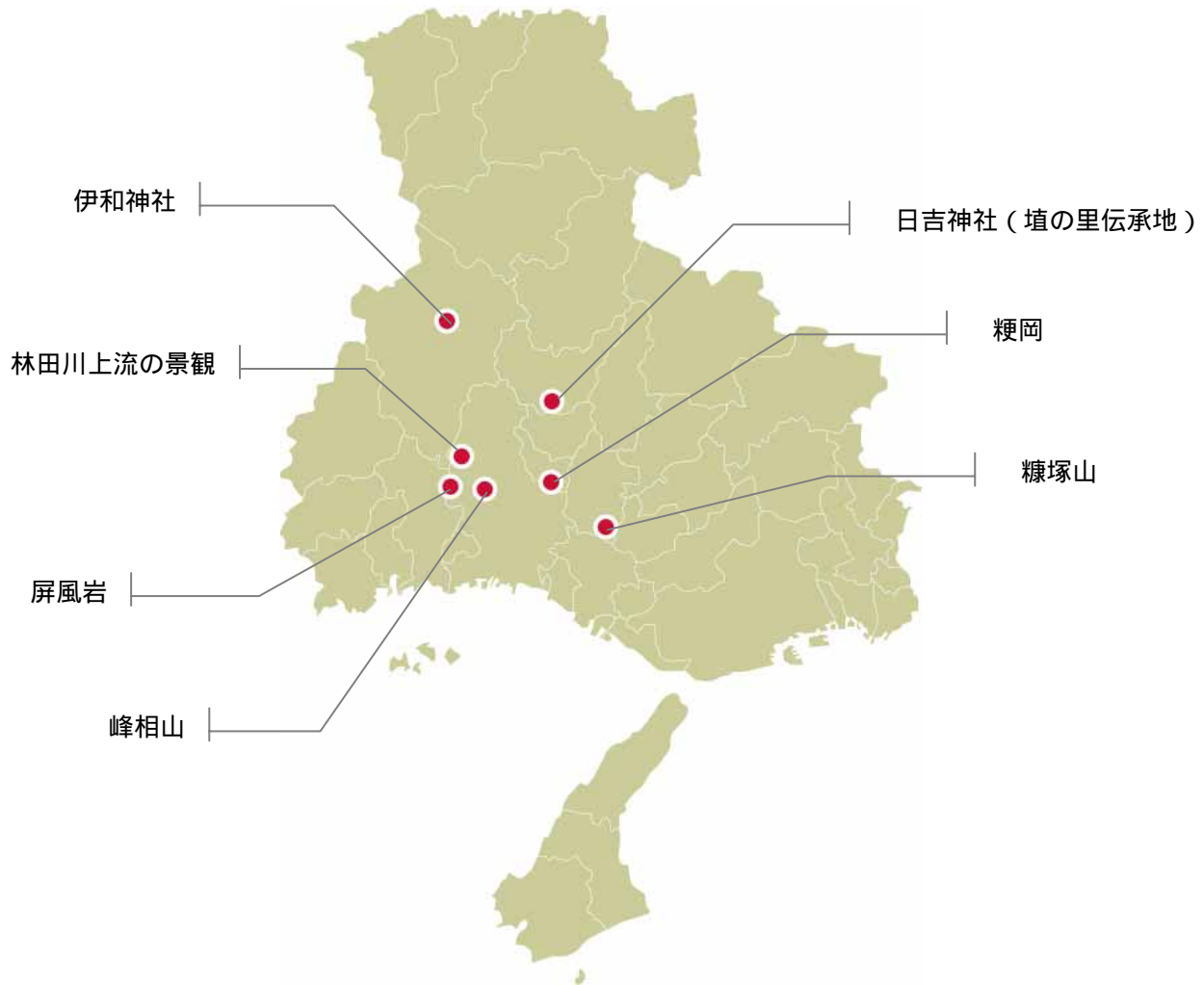
『播磨国風土記』に記された丘の名。現在の姫山に比定されている。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話中播篇	1972	郷土の民話中播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
歴史・文化	日本古典文学大系2 風土記	1958	秋元吉郎 校訂	岩波書店
	日本古典文学大系67 日本書紀 上	1967	坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注	岩波書店
	兵庫のふるさと散歩3 西播編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
	日本思想体系1 古事記	1982	青木和夫・石母田正・佐伯有清 校訂	岩波書店
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	風土記の考古学2	1994	榎本誠一編	同成社



## 所在地リスト



伊和神社	宍粟市一宮町須行名（すぎょうめ）
日吉神社（埴の里伝承地）	神崎郡神河町比延245
林田川上流の景観	姫路市安富町塩野（植塩橋付近）
屏風岩	たつの市神岡大住寺字大源寺249-6
峰相山	姫路市石倉
稷岡	姫路市船津町2705
糠塚山	加西市網引町・小野市西脇町

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日

ひょうご

—神と仏—

伝説紀行

## 高座石の椀貸し 感謝がつなく神様と里

伝説

高座石の椀貸し

感謝がつなく神様と里

紀行

ひょうごの椀貸し伝説をめぐる

- ・全国に伝わる椀貸し伝説
- ・丹波の高座石
- ・椀貸し狐と椀貸し淵
- ・白滝さんと鬼面様
- ・借膳岩
- ・椀貸し伝説と木地師
- ・水と岩の精霊

関連情報

用語解説

参考書籍

所在地リスト

## 高座石の椀貸し 感謝がつなく神様と里

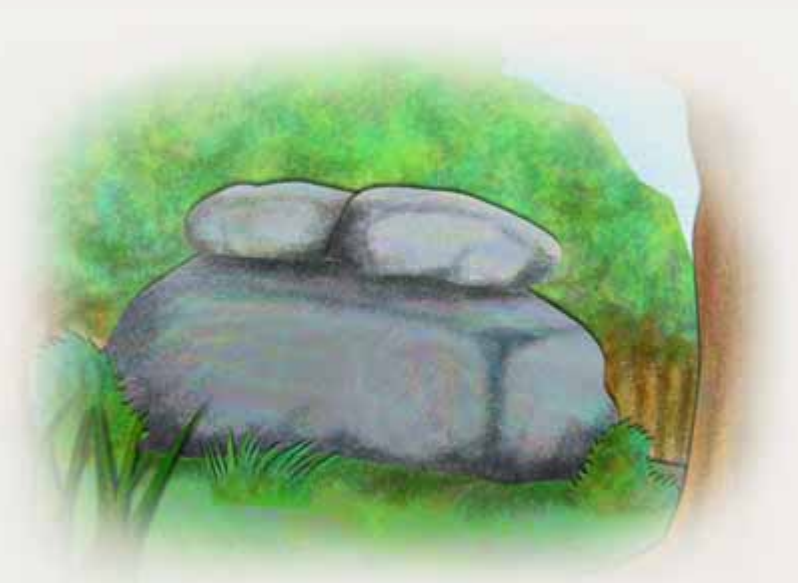
丹波（たんば）の清住（きよずみ）の里に、達身寺（たっしんじ）というお寺があって、そのおくの山の中に高座石（こうざいし）というたいへん大きな岩があります。この岩にはふしぎな伝説が伝わっています。

むかしむかし、清住の里の人たちは、何かのお祝いやおそう式をするのに、たくさんのお椀（わん）が入り用なとき、いつも高座石にお願いしてお椀を借りていました。そのころは、どこの村の暮らしもそれほど豊かではありませんでしたので、どの家にも余分なお椀などなかったからです。

お椀を借りたいとき、里の人たちは高座石の上に、大根やおいもや、そのほかいろいろなものをお供えして、大きな声でお願いするのです。

「およめさんをもらうので、お祝いをします。どうぞ、浅いお椀を二十と、深いお椀を二十お貸し下さい。お願いします」

すると次の日には、高座石の上に立派なお椀が、ちゃんとそろえて置いてあるのです。



「立派なお椀やなあ」

「ありがたいことや」

里の人たちは、いつもそう言うてはお椀をほめたたえ、山の神様に感謝するのです。



使い終わったお椀は、きれいに洗って、また高座石の上に返しにゆきます。

「おかげさまで助かりました。どうもありがとうございました」

そうお礼を言って、石の上に置いておきます。すると、お椀はいつの間にか消えてなくなるのです。こうして、里の人たちは高座石とお椀を、長い間大切にしていました。



ところがあるとき、心根のよくない男が、貸してもらったお椀を一つ返さなかったのです。

「こんなにたくさんあるのだから、一つくらい返さなくてもだいじょうぶだろう。おれが自分で使うのにもらっておこう」

よくばりな男は、そう思ったのです。

それからというもの、里の人たちがいくらお供えをして、お願いをしても、お椀を貸してもらえなくなりました。お椀を返さなかった悪い心に、山の神様がおこったのでしょう。今でも、こけむした高座石だけが、山の中にぼつんと残っています。

## 紀行「ひょうごの椀貸し伝説をめぐる」

### 全国に伝わる椀貸し伝説

「椀貸し」の話は、子供のころ、何かの本で読んだ記憶があった。昔話の一つとして、頭の隅っこに残っていたのである。だから、『ひょうご伝説紀行』であれこれと調べるうちに、兵庫県に「椀貸し」伝説があること、それどころか全国各地に同じような伝説があることを知って、懐かしく思うと同時にとても新鮮な驚きを感じた。

「ある所でお願いすれば、お椀を貸してもらうことができた。使った後はきれいに洗って返す。ところがある時、悪い人が借りたお椀の一つを返さなかったため、2度と貸してくれなくなった」というのが、このお話の筋書きである。兵庫県に残る椀貸し伝説も、細かい部分はともかく、すべて同じパターンを踏襲している。

伝説のページの「高座石の椀貸し」は、その中でも、お話として比較的好くまとまっていたので取り上げることにした。このお話は、丹波市の氷上町に伝わっている。伝承地は、旧氷上町西部にある山中である。

### 丹波の高座石



コスモス畑

氷上町の中心部から、加古川支流の葛野川（かどのがわ）を西へたどる。町並みを抜け、たおやかな里山を眺めながら道をゆくと、中野の集落あたりで北側に広い谷が見え、この奥に清住の村がある。

この静かな山あいの村にある達身寺は、丹波（たんば）を代表する名刹（めいさつ）の一つである。僕たちが訪ねた時には、寺の前に広がる水田一面にコスモスが咲き、多くの観光客でにぎわっていた。華やかなコスモスとは対照的に、落ち着いたたたずまいの山門をくぐって境内に入ると、手入れが行き届いた庭にも秋の色は濃く、わらびきの本堂がとてもゆかしく感じられる。



彼岸花と達身寺



達身寺（看板）



背後の山から



蓮がたくさん干してあった



達身寺の仏たち



痛々しく傷ついた仏様も

達身寺は、丹波の正倉院とも呼ばれている。奈良時代（8世紀）に行基（ぎょうき）が開いたとされ、丹波でもっとも古いお寺の一つであるともいわれている。かつては背後の山々に伽藍（がらん）が広がっていたのだが、明智光秀の丹波攻めで焼け落ちたという。

本堂に上がらせていただき、奥へ進むと、古くから伝えられた多くの仏像たち いくつかは、苦難の時代をその身に刻みつけたかのように傷んでいる が安置されている。さらに宝物殿へと進むと、国指定重要文化財の仏像12体と県指定の仏像11体を拝観することができる。荘厳な、あるいは峻厳な仏像群は、かつて山上にあったという堂坊に祭られていたものであろうか。昔日の達身寺の繁栄をしのばせてくれる。



本尊阿弥陀如来坐像



薬師如来坐像



十一面観音坐像



達身寺の西方、民家の間から、細い道を谷奥へとたどると、葛野川から分かれた清住谷川（きよすみたにがわ）に沿って、林道の登り坂へ導かれる。スギやヒノキが植林された山腹をしばらく登ると、やがて右前方の杉林の中に、巨大な岩が見えてくる。「高座石」という立札もあるから、見落とすことはないだろう。



山道の右手に  
岩が見える

巨大な岩である。ツタが絡みつき、岩の上にはシダやササが育っている。どれほど前から、この場所にあったのだろうか。ずいぶん昔に、近くの山腹から崩れ落ちてきたのであろう。到底登ることはできないけれど、岩の上はわりあい面積もあって平らな感じなので、伝説のとおりそこにお供え物を置くことはできそうだ。もちろん今は、岩の周囲に、「お供え物」の痕跡などを見つけることはできないが。

単なる岩なのだが、そう思って見るせいか存在感がある。伝説を語った人たちは、清住谷川と村とを見下ろすこの岩の前で、何かのお祭りをしたのだろうか。



杉木立の中の巨岩



岩は上下に  
割れている



高座石と人

## 椀貸し狐と椀貸し淵



対岸から見た稲荷社  
(手前は円山川)

但馬南部の朝来市（あさごし）の旧生野町には、「椀貸し狐」の話が伝わっている。場所は、新井集落の南のはずれにある崎山稲荷神社である。伝説では、ここのお稲荷さんがお椀を貸してくれたそうだ。神社は、西から延びてきた山塊が、円山川に向かって大きく張り出した先端にある。草木が茂って、はっきりとは見えないが本殿の背後には大きな岩盤があるようだ。眼前の円山川は、滔々（とうとう）とした下流の流れとは異なり、透明な水がさわやかな音をたてている。



崎山稲荷神社  
(鳥居)



崎山稲荷神社  
(本殿)

ここから南へ峠を越えると、播磨国、神崎郡神河町（かんざきぐんかみかわちょう）であるが、この町の南東にある越知谷にも、椀貸し伝説が残っている。県道8号加美山崎線を東へ、越知川に沿って上流へさかのぼると、越知谷小学校の500mほど手前で渡る橋のあたりが「椀貸し淵」である。深い碧色の水をたたえた清流に、大小の岩が顔を出している。その前にある小さなお稲荷さんが、お椀を貸してくれるというのだ。

このあたりは越知ヶ峰（おちがみね）の名水で知られているようで、椀貸し淵の傍には切り立った岩壁と、有料の給水施設がある。



深い淵



清らかな水が流れる



稲荷社の鳥居



深い谷を流れる川



## 白滝さんと鬼面様



白滝さん



対岸から

さらに西へ目を転ずると、揖保川（いぼがわ）上流には2か所の椀貸し伝説が残っている。宍粟市（しろうし）一宮町の「白滝さん」と、同山崎町の「鬼面様」である。

白滝さんは、宍粟市の北端に近い一宮町倉床（くらとこ）にある。一宮町の安積（あづみ）から県道6号八鹿山崎線をたどり、上岸田から揖保川支流の倉床川に沿って上流へとさかのぼる。その途中にかかる「浜廻橋」を渡った所で車を止め、そこから、川の左岸に沿って続く細い道を行くと、ほどなく小さいけれど新しいお堂が見える。その横に流れ落ちるのが「白滝さん」と呼ばれる小さな滝である。伝説では、ここのお不動様をお願いすると、とても立派なお皿（ここではお椀ではない）を貸してもらえたという。

白滝さんの場所を教えていただいた地元の田中豊彦氏によれば、今、杉林になっているお不動様の裏山は、昔はすべて雑木林だったという。「スギを植林してから、水が汚れてしまった」と嘆息しておられた。普段は大した水量もない流れだが、以前、大雨で出水した時には、滝の前に祭られていた石仏のうち二つが流されてしまったという。「一つは掘り出せたが、あとの一つはまだこのあたりに埋まるとるやろ」とのことであった。さらに田中氏は、「このあたりの岩は『白滝岩』といって石灰岩を含み、そのおかげでよい水がわく」とも語ってくれた。



杉木立に囲まれて



白滝さんと石仏たち



白滝さん（石碑）

倉床川は今もなお清流を保っている。そこへ流れ落ちる白滝とお不動様は、ずっと村と人々を守り続けてきたのだろう。



鬼面様からの眺望



崩れ落ちそうな巨岩

もう一方の「鬼面様」は、山崎町の中心部から西へ抜けた所にある。県道53号山崎南光線を西へとたどり、市場集落の中ほどから北へ農道を進むと、揖保川（いぼがわ）支流の菅野川を渡った山すそに、古びた鳥居が建っているのが見える。ここが鬼面様の入り口である。鳥居をくぐり、鹿除けの金網を通り抜けると、石ころの多い谷筋を登る坂道である。息を切らせながら登ってゆくと、やがて道は右手（西）に屈折して、今度は尾根へとさらに急斜度で登る。前方がようやく明るく見え始めた所に、またひとつ、今にも倒れそうな古い木の鳥居があって、そこが鬼面様の前である。集落から見上げてほとんどわからない場所であるが、鬼面様の前からは集落がよく見える。



遠景  
（鬼面様は山の中腹にある）

山腹に露頭した巨大な岩の下に、鬼面様の小さな祠（ほこら）がある。上方の岩があまりに巨大なので、押しつぶされてしまいそうな感覚を覚えるが、よく見てみると、岩にはいくつか深い亀裂が走っているので、本当に崩れてしまうかもしれない。よくこんな場所で、神様のお祭りをする気になったと思うけれど、巨岩や巨樹など、人智を超えた巨大な自然物を崇め、祭ることは、昔の人たちにとってはむしろごく当たり前のことだったに違いない。



鬼面大明神



巨岩の下の祠



鬼面様（鳥居）

## 借膳岩

さらに西、佐用郡佐用町の宗行（むねゆき）にも、「借膳岩（しゃくぜんいわ）」がある。やはり巨大な岩なのだが、昭和51年に刊行された『播磨伝説風土記（はりまでんせつふどき）』（読売新聞姫路支局）によれば、この近くに「借膳谷」という地名も残っているという。



夜明け



借膳岩（石碑）



借膳岩からのながめ



岩の上の祠

旧佐用町中心部から少し北、国道373号線から100mほど西に入った水田の間に、借膳岩はある。岩の西側には標高300mほどの山が迫り、そのふもとを智頭急行（ちづきゅうこう）が走っている。岩から東には眺望が開けている。少し離れて佐用川が流れ、北寄りには国史跡の利神城（りかんじょう）跡も見える。借膳岩の周辺は、ほ場整備がおこなわれるのに合わせて整備されたようで、昭和51年当時の写真と比べてみると、現在の方が岩がずいぶん巨大に見える。そしてかつての写真にはなかった小さな祠が、岩の上に祭られている。



借膳岩（全景）

## 椀貸し伝説と木地師

民俗学の大家柳田国男は、全国に分布する椀貸し伝説について、山間部を移動しつつ木製品の生産に従事した「木地師」と関係するものとしている。確かに、丹波から始まって南但馬、北播磨、西播磨へと、兵庫県椀貸し伝説も、中央の山地に沿うように分布している。

都市も交通も未発達だった昔、各地の深い山中で木椀などを作っていた木地師たちについての伝承が、その源にあったのかもしれない。しかし、この伝説がどの地域でもほとんど同じ内容で語られているということは、どこかで生まれた伝説が、人々の口から口へと伝えられたと考えた方がいいのではないだろうか。

## 水と岩の精霊

今回の伝説紀行で、兵庫県の椀貸し伝説に、いくつか大きな共通点があることがわかった。どの場所にも巨大な岩か、岩盤がある。そして「鬼面様」を除くと、どの場所も清冽な川の流りに臨んでいるのだ。あえて言うならば、鬼面様もすぐ脇の谷筋には細い流れがある。

澄んだ水と、巨岩や岩壁。この二つに宿る神様や精霊を、人々は、太古の昔からごく自然に崇め祭ってきたことだろう。椀貸しの伝説は、そうした人々の素直な思いと重なって、長く生き続けてきたのだと思えてならない。

## 用語解説

### 加古川（かこがわ）

兵庫県の南部を流れる一級河川。延長96km、流域面積1,730平方キロメートルを測る県下最大・最長の河川である。但馬・丹波・播磨の三国が接する丹波市青垣町の粟鹿山（あわがさん、標高962m）付近が源流で、途中小野市、加古川市などを流れ、加古川市と高砂市の境で播磨灘に注ぐ。

加古川の水運は、古代から物流を担う経路であったと考えられ、特に日本海に注ぐ由良川水系へは峠を越えずに到達できることから、「加古川 - 由良川の道」とも呼ばれて、日本海側と瀬戸内側を結ぶ重要なルートとされている。

### 里山（さとやま）

人里に接する位置にある山で、森林を中心とした生態系を、人が継続的に管理・利用している場所。兵庫県下では、薪炭林（しんたんりん）として利用される、クヌギ・コナラなどの雑木類を中心とした雑木林であることが多い。多様な動植物が生育するため、生態系としての価値は高いが、近年は利用度が低下して放置され、荒廃する例が増加している。

### 達身寺（たっしんじ）

丹波市氷上町清住（きよずみ）に所在する曹洞宗の寺院。十九山（じゅうくさん）と号する。開基は行基（ぎょうき）、あるいは法道仙人（ほうどうせんじん）とも伝え、元は天台または真言系の宗派であったと推測されている。平安時代から鎌倉時代には、丹波一円に勢力を張ったとされているが、天正年間（1573～92）に兵火にあい、タルミ堂を残して全山を焼失した。その後は荒廃したが、江戸時代の元禄年間（1688～1704）に当地に疫病が流行した際、占いによって、村人が溪谷に流出していた仏像を集めて、現在の位置に本堂が建立された。平安時代の弘仁・貞観期（9世紀）から鎌倉時代初期にかけての優れた仏像が多数残されており、「丹波の正倉院」と呼ばれる。また、鎌倉時代の仏師快慶（かいけい）も、達身寺と深いかわりがあったとする説がある。

### 正倉院（しょうそういん）

古代には、寺院や官の主倉庫を正倉と呼び、正倉院とはその一角を指す言葉であったが、現存するのは奈良県の東大寺に付属する正倉院のみであるため、正倉院といえばこれを指す。現在、東大寺正倉院は宮内庁が管轄しているが、その中でも特に歴史的に重要なのは、校倉造（あぜくらづくり）の宝庫で、奈良時代以来の遺品がおさめられている。

### 行基（ぎょうき）

奈良時代の僧（668～749）。河内国（かわちのくに）出身。父は百済系の渡来人であった。はじめ官大寺で修行したが、後に民間布教をおこなったため律令政府の弾圧を受ける。ため池や水路などのかんがい施設を整備しながら説教をおこない、広く民衆の支持を集めた。東大寺の大仏造営にも協力し、745年には大僧正となった。墓は奈良県生駒市の竹林寺にあり、1235年に金銅製の骨蔵器が発掘されたが、現在はその断片が残されるのみである。

### 伽藍・伽藍配置（がらん・がらんはいち）

伽藍とは寺院の建物のこと。伽藍配置とは、寺院における堂塔の配置で、時代や宗派により、一定の様式がある。



## 用語解説

### 円山川（まるやまがわ）

兵庫県北部を流れて日本海に注ぐ但馬最大の河川。朝来市円山から豊岡市津居山（ついやま）に及ぶ延長は67.3km、流域面積は1,327平方キロメートル。流域には平野が発達し、農業生産の基盤となっている。河川傾斜が緩やかで水量も多いため、水上交通に利用され、鉄道が普及するまでは重要な交通路となっていた。

### 揖保川（いぼがわ）

兵庫県の西播磨地域を流れる河川。兵庫県最高峰である氷ノ山（ひょうのせん：1,510m）の南麓に発し、宍粟市（しろうし）、たつの市を経て瀬戸内海に注ぐ。全長は69.7km、流域面積は770平方キロメートル。流域の開発は古く、『播磨国風土記』にも多くの記述が見られる。

### 利神城（りかんじょう）

佐用町平福（ひらふく）にある山城。14世紀中頃に、赤松氏の一族である別所氏が築城した。嘉吉の乱（かきつのもん：1441年）の後、一時山名氏が入ったが、赤松氏の再興とともに、再び別所氏が入った。1577年に、山中鹿之助に攻められて落城し、宇喜多氏の支配下となったが、関ヶ原の戦い後、播磨国を与えられた池田輝政が、甥の池田由之に佐用郡を支配させた。標高373mの山頂に、本丸、鶴の丸、二の丸、三の丸、大坂丸などの郭群を設けて威容を誇ったが、一国一城令により取り壊された。石垣、馬場、井戸などが残り、近世初頭の山城の姿をよくとどめる。

### 柳田国男（やなぎたくにお）

民俗学者（1875～1962）。兵庫県神崎郡福崎町（当時は田原村）に生まれる。東京大学卒業後農商務省に入り、後には貴族院書記官長となったが1919年に退官。朝日新聞社に入る。同社の論説委員などを経て1932年に退社。以後は民俗学の研究に没頭する。1935年に民間伝承の会（後の日本民俗学会）、1947年に民俗学研究所を創設し、日本民俗学の発展に努めた。100余の編著を残している。福崎町辻川に記念館があり、生家が保存されている。

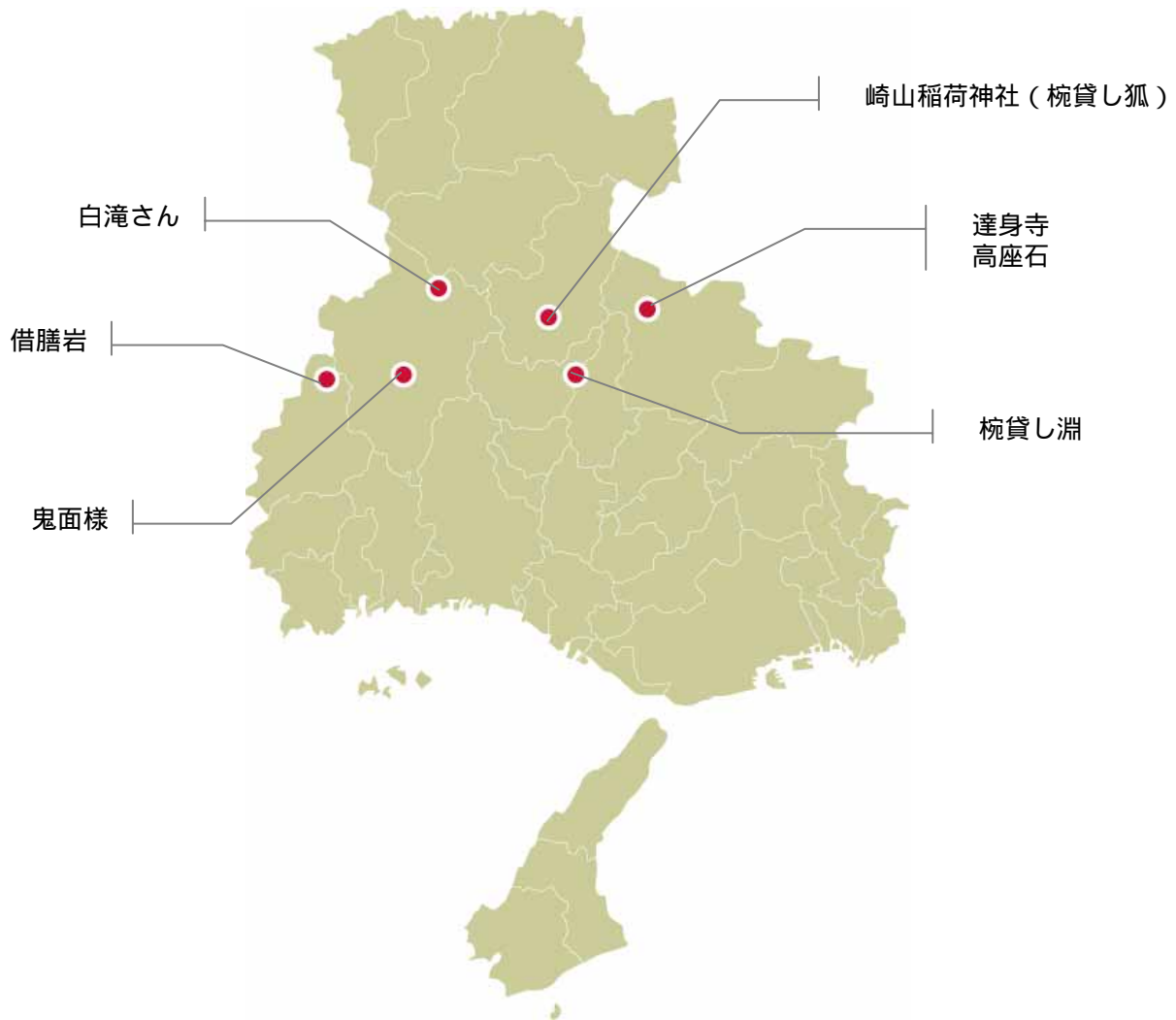
### 木地師（きじし）

木地屋ともいう。ろくろを用いて、椀、盆など、日用の器物を作る工人あるいはその集団。原料を求めるため、山中で漂泊生活を送っていたとされる。このため定住民からは軽べつされがちであったというが、庶民工芸史上、木地師が果たした役割は大きい。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話西播編	1972	郷土の民話西播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	郷土の民話丹有編	1972	郷土の民話丹有地区編集委員会	(財)兵庫県学校厚生会
	播磨伝説風土記	1976	読売新聞姫路支局編	読売新聞姫路支局
	兵庫の伝説	1980	兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
	日本伝説大系 第8巻	1988	黄地百合子・酒向伸行・田中久夫・福田晃	みずうみ書房
	丹波のむかしばなし第三集	2000	「丹波のむかしばなし」編集委員会	(財)丹波の森協会
歴史・文化	しそうの逸話	2006	(財)しそう森林王国協会	(財)しそう森林王国協会
	兵庫のふるさと散歩5.丹波編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター

## 所在地リスト



達身寺	丹波市氷上町清住259
高座石	丹波市氷上町清住
白滝さん	宍粟市一宮町倉床
鬼面様	宍粟市山崎町市場
借膳岩	佐用郡佐用町宗行
崎山稲荷神社 (椀貸し狐)	朝来市羽瀨字崎山2
椀貸し淵	神崎郡神河町越知48-17

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏  
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館  
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日

ひょうご

—神と伝—

伝説紀行

## 男神と女神の山造り

よく似た山はどちらが高い

伝説

男神と女神の山造り  
感謝がつなく神様と里

紀行

神の坐す山と神出の里

- ・たおやかな神様の山
- ・雌岡山と古代の信仰
- ・裸石さんと姫石さん
- ・雄岡山
- ・印南野と土器作り
- ・北条時頼と最明寺

関連情報

用語解説  
参考書籍  
所在地リスト



## 男神と女神の山造り よく似た山はどちらが高い

神戸市西区に雄岡山（おっこさん）と雌岡山（めっこさん）という、美しい山があります。高さも形も、とてもよく似た二つの山は、古くから「神様の山」として人々に大切にされてきました。二つの山は遠くからもよく見えて、道行く人々の目印にもなります。

こんなによく似た二つの山が、どうやってできたのでしょうか。それにはこんなお話が伝わっています。



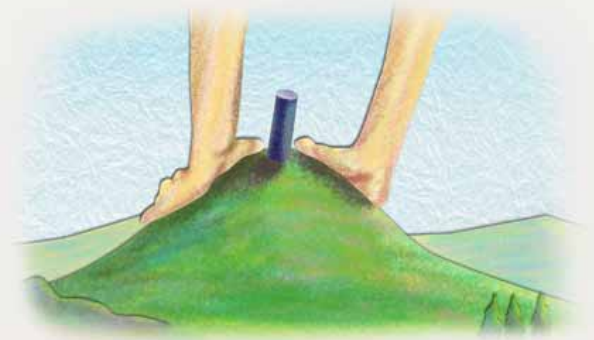
はるかな昔、このあたりに男の神様と女の神様がいました。毎日、何ごともなく静かに過ごしていましたが、どうにもたいくつでなりません。ある日、男神はこんなことを思いつきました。

「二人で山をつくって、高さ比べをしてみないか」

「それはおもしろそうね」

二人はさっそく、山のしんになる大きな鉄の棒を用意しました。大地に鉄棒をつき立てて、そのまわりに土を盛り上げるのです。

二人の神様は、鉄棒のまわりにせっせと土を盛り上げてゆきました。盛り上げるたびに、美しい山の形ができあがってきます。二人とも、同じように土を盛り上げてゆくので、なかなか勝負はつきそうにありませんでした。



その時です。「ボキッ」というものすごい音がひびきました。男神の山の心棒が、まん中からおれてしまったのです。大きな鉄の棒はごろごろと転がり、地ひびきをたててふもとに落ちました。これではもう、土を盛り上げるできません。

「勝負は私の勝ちね」

女神はにっこりしながらそう言うと、最後まで土を盛り上げて、山をつくりおわりました。雌岡山の方が高く大きいのは、こんなわけがあったのです。

男神がおれた鉄の棒を拾い上げてみると、山のふもとには、大きな穴があいてしまっていました。やがて、そこに水がたまって大きな池になったので、人々は「金棒池」と呼ぶようになったということです。



やがて雌岡山には、天から大己貴神（おおなむちのかみ）が下ってきて、ここで百八十一柱の神々を生み出した。そういうわけで、このあたりの土地は「神出（かんで）」とよばれているのです。

男神と女神の山造り よく似た山はどちらが高い

おわり

## 紀行「神の坐す山と神出の里」

### たおやかな神様の山



雌岡山（左）と雄岡山（右）

第2神明道路から国道175号線を北上すると、ほどなく道の周囲に田園風景が広がってくる。ずいぶん開発が進んだとはいえ、まだあちこちに残る緑豊かな里山は、東播磨（ひがしはりま）の原風景だろう。やがて道は、その丘陵地帯へと登り、目の前に円錐形の美しい山容が見え始める。それが雌岡山（めっこさん）である。

老の口の交差点で国道とわかれ、東へ道をたどると、1kmばかり進んだところで、左手に神出神社入り口の鳥居が現れる。ここからが、雌岡山を登る道である。

雌岡山には登山道が多い。東西南北いろいろな方向から、5~6本の道が山頂へと続いており、どの道もよく整備されているが車で登れる道は一本だけ。山腹を巻くようにつけられた車道を登ると、間もなく山頂下の駐車場に到着する。入り口の鳥居から1kmちょっと。ふもとから歩いて20分ほどであろうか。

### 雌岡山と古代の信仰

雌岡山山頂には、神出神社がある。南を向いて建つ社殿の前には、神社の縁起を記した石碑がたてられていて、祭神は、スサノオノミコト、クシナダヒメノミコトと、オオナムチノミコトと記されている。伝説では、この山に天降ったのはオオナムチノミコトということになっているが、石碑ではスサノオノミコトとクシナダヒメノミコトが天降って、オオナムチノミコトをうんだとされている。伝説の世界では、こうした食い違いも珍しいことではない。



神出神社（鳥居）



霧がかかる頂上

この山に登る人は多い。雌岡山にも雄岡山（おっこさん）にも「毎日登山会」があって、登る人たちはみな顔見知り。お互いに「今日は遅いやないか」などとあいさつを交わしながら行き交う。神社前の広場には、いくつかのベンチが置かれて、人々はそこで、景色を眺めながらひとときを過ごしてゆくのである。

晴れた日、ここからの眺めは素晴らしい。裏六甲の山並みから淡路島、播磨灘（はりまなだ）と、180度の眺望が開けている。西神（せいしん）ニュータウンの近代的な町並みが、雑木林の緑で縁取られ、その手前には、明石川に沿って水田が広がる。そして相方の雄岡山はというと、現在は、木々の間から山頂付近が見えるのみである。



神出神社（石碑）



神出神社（看板）



霧にかすむ本殿



取材で訪れた日は細かな冷たい雨が降っていたので、残念ながら風景は楽しめなかったが、その代わりに、ふもとから立ち上る霧が次々と山頂を覆っては消え、時に社殿を隠すほどに立ちこめ、幻想的なようすを見ることができた。



## 裸石さんと姫石さん



裸石神社（石碑）

山頂から少し下った場所に、「裸石（らいせき）神社・姫石（ひめいし）神社」の標柱が立っていて、そのわきから階段が、杉木立の中を下る。日中でも薄暗い階段をたどると、間もなく右手に裸石神社がある。本殿の中に祭られているのは、巨大な男性のシンボルである。ひとつは折れた鳥居から作られたそうであり、小さなものを含めて3体を、薄暗い本殿の格子越しに見ることができる。その脇には、やはり石で作られた女性のシンボルも置かれている。



森の中に霧がかかる



裸石神社（境内）



裸石神社（ご神体）

石のシンボルの周囲には、おびただしい数のアワビの貝殻が置かれている。ほとんど堆積していると言いたいほどの量である。この神社に参拝する折には、アワビの貝殻を奉納してゆくということで、その数は、信仰の長さとその間に訪れた参拝者の数を物語っているのだろう。かつては、この山にたくさんのカタクリが自生していて、村の娘たちは春になると、花摘みに行くと言っては裸石神社にお参りしたそうである。

裸石神社から少し離れて姫石神社がある。山腹に露頭した巨大な岩を、女性に見立てたのであろうが、こちらには覆屋もなく、ただ、こけむした岩が太古からの信仰を思わせる。縄文時代に見られる石棒にも、男性の象徴を模したものがあるが、自然の岩を男女に見立てた素朴な信仰は非常に古い起源を持っているから、ここの巨岩もまた、神社という形式ができるよりも古くから信仰されていたのかもしれない。

木立を抜けて車道に戻り、少し下った所には御旅所がある。その一角に、「にい塚」という標柱と、柵に囲まれた塚がある。塚の中心には、大きな石がいくつも崩れたように露出していて、これが横穴式石室をもつ古墳だとわかる。6世紀ごろに造られたものであろう。この地域の里長が、それとも雌岡山にゆかりの深い人物の墓であろうか。



姫石神社（ご神体）



三裂した巨岩

## 雄岡山

雌岡山の写真を撮り終え、車を走らせて雄岡山へ向かった。雌岡山山頂から雄岡山の麓まで、5分とはかからないが、そこからは雌岡山と違い車で登る道はない。西側の山すそに車を止め、雑木林の中のにびる細い道をたどって山頂へ向かうことになる。雌岡山ほど道は整備されておらず、赤土がむき出しになった滑りやすい道を、息を切らせながら10分ほど登ると、雑木林の向こうに青空が開ける。そこが雄岡山の頂上である。

雄岡山の山頂は、雌岡山に比べてずいぶん狭い。凝灰岩の板石で組んだ小さな稻荷社が立つ山頂からは南側に眺望が開けており、明石大橋まで眺めることができるが、雌岡山の方向はまったく見えない。

この山の南側山腹では水晶が採れるそうで、「子供のころ採りに行った」という話を聞いたことがあるが、今は東西の登山道しかないそうである。



雄岡山（山頂の祠）

国土地理院の地図を開いてみると、雌岡山は249m、雄岡山は241.2mとなっていて、雌岡山の方が7.8m高く山体も大きい。大きくて高い方の山を、「雌」にしたということは、昔の人たちにとっては、女神の方が立派で信頼に足るものだったからだろうか。男の僕としては少々悔しくもあるけれど、確かに古代には、女性は豊饒（ほうじょう）の象徴でもあったし、邪馬台国の卑弥呼の例を引くまでもなく、国を統べ、祭祀（さいし）をつかさどる存在だったし、現代社会でも全然別の意味で、男より女の方が生き生きしている人が多いようだから、このところは素直に白旗を掲げるしかない。



雄岡山（山頂の祠）



お稲荷様



## 印南野と土器作り

雌岡山・雄岡山の周囲は、今でこそ一面に水田が広がっているが、東播磨の広大な台地が水田となったのは、そう古いことではない。「印南野（いなみの）」と呼ばれるこの地域は、『枕草子』にも、

「野は嵯峨野、さらなり。印南野。交野……」

と記されているが、文字通り、開墾の手が届いていない「野」だったのだろう。ここでは何よりも水の確保が大変な作業で、特に江戸時代にはたくさんの溜池が造られたそうであるが、今ではそれに加えて東播用水が広い台地を潤している。

さて、清少納言が『枕草子』を著してから100年ほど後の平安時代末、神出の周辺が一大工業地帯となったことをご存じだろうか。この地で生産されたのは、須恵器（すえき）と呼ばれる土器、そして瓦である。中でも須恵器の鉢は、神出と、少し遅れて明石市（あかし）の魚住付近に営まれた窯で、鎌倉時代にかけて大量に生産され、関東から九州に至る広い範囲に流通していた。「東播系中世須恵器」とも呼ばれる須恵器の鉢は、各地で料理に使われたことだろう。瓦の方は、平安京の寺院からの注文だったようで、京都の鳥羽離宮や、東寺、尊勝寺などの屋根を飾っていたことが、発掘調査で確かめられている。



神出窯跡群の発掘調査



窯の内部



窯の内部



神出窯跡群から出土した須恵器



丘陵のあちこちから、土器を焼く煙が立ち上る夕焼け。かつての雌岡山からは、そんな風景がながめられたことだろう。

本ページ6枚の写真は兵庫県立考古博物館提供



## 北条時頼と最明寺



最明寺（全景）



最明寺（境内）

雌岡山の南西には、法道仙人が開いたとされる寺院の一つ、雄岡山最明寺がある（雌岡山のふもとなのだが）。最明寺境内にある「北条時頼噛み割りの梅の木」は、鎌倉幕府の執権だった北条時頼が、出家して各地をまわった時、この地に立ち寄って、法道仙人の遺言と法華経を石箱に入れて地中に埋め、その上に自分が噛み割った梅の実の半分を植えたものだといわれている。また最明寺郷土館には、2000点を超える土鈴が展示されているそうである。ボタンやムクゲの花も有名なお寺なので、その季節に、ぜひもう一度訪ねてみたい。



北条時頼かみわりの梅



十三重石塔



宝篋印塔



仏様が並ぶ

蛇足かもしれないが、豊かな森を残す雌岡山・雄岡山には、今もキツネやタヌキがいるようだ。季節ごとに鳥の種類も多い。その美しさから「春の女神」と称えられるギフチョウは、ふもとにある神出学園の生徒たちや、神戸市の神出自然教育園など、多くの人の努力で生き残っている。豊かな里山が、開発によって消えゆく現代、雌岡山・雄岡山の自然が、人々の素朴な信仰とともに未来へ受け継がれることを願わずにはいけない。

古代の信仰、立ち上る土器作りの煙、そして近代的なニュータウンを眺めながら、山造りをした神様たちは何を思っているだろうか。



## 用語解説

### 雌岡山・雄岡山（めっこさん・おっこさん）

神戸市西区に所在する山。雌岡山は標高249m、雄岡山は標高241mを測る。古代から神奈備（かなび：神が鎮座する山）として信仰されたようで、雌岡山頂上には、神出神社が祭られている。優美な山容から、一帯は『改訂・兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック2003』の自然景観でCランクにあげられている。

### 神出神社（かんでじんじゃ）

神戸市西区神出町の雌岡山山頂に所在する神社。スサノオノミコトと妻のクシナダヒメ、およびオオナムチノミコトを祭神とする。後に、前2神の孫にあたるオオクニヌシノミコトから八百余の神々が生まれたことが、「神出」の由来とされる。雌岡山は牛頭天王を祭っているため、「天王山」（てんのはん）とも呼ばれる。山頂からは、六甲山・淡路島方面から小豆島までを望むことができる。

### スサノオノミコト・クシナダヒメノミコト（すさのおのみこと・くしなだひめのみこと）

記紀の神話に登場する神。古事記では建速須佐之男命（たけはやすさのおのみこと）と呼ぶ。イザナギノミコトの3子の末。イザナギから海を統治するよう命ぜられるがそれを拒否する。一時、姉のアマテラスオオミカミが治める高天原に滞在したが、後に出雲国に至り、怪蛇ヤマタノオロチを退治。クシナダヒメと結婚したとされる。出雲神話の祖となる大国主命（おおくにぬしのみこと：『日本書紀』ではオオナムチノミコトとする）は、スサノオの子とも六世あるいは七世孫ともされている。

### オオナムチノミコト（おおなむちのみこと）

記紀や風土記に見られる神。国造り、国土経営などの神とされるほか、農業神、商業神、医療神としても信仰される。大穴牟遲神・大己貴命・大穴持命・大汝命など、さまざまに表記される。『播磨国風土記』では、葦原色許乎神（あしはらのしこをのみこと）、伊和大神と同一神とみなされているようである。また記紀では、大国主（おおくにぬし）と同一神として扱われる。こうした神名の多重性は、本来、各地域で伝承された別個の神を、記紀編集などの過程で統一しようとしたため生じたものである。

### 裸石神社・姫石神社（らいせきじんじゃ・ひめいしじんじゃ）

神戸市西区神出町の雌岡山中腹に所在する神社。縁結び、安産の神として信仰される。裸石神社は、彦石と呼ばれる男性の象徴を祭り、姫石神社は女性を象徴する三裂した巨岩を祭る。現在は裸石神社のみ社殿が設けられているが、本来社殿はなかった。彦石にまたがって体をゆすると願いがかなうという伝承があるといい、巨岩を性の象徴として、子孫繁栄や豊饒を祈る古い信仰の系譜をひくものと思われる。裸石神社には、アワビの貝殻を供えて祈願するという風習があり、彦石の周辺は貝殻で埋まっている。

### カタクリ（かたくり）

ユリ科カタクリ属に属する多年草。学名はErythronium japonicum。雑木林の林床に群生し、早春に地上部を展開させて薄紫色の花をつける。夏季には地上部は枯れる。鱗茎（りんけい：球根）から片栗粉がとれる。カタコクリは古名。『万葉集』では堅香子（かたかご）とも呼ばれる。

## 用語解説

### 御旅所（おたびしょ）

神社の祭りで、本宮を出た神輿を迎えて仮に奉安する所。仮宮。

### にい塚（にいづか）

雌岡山西側の中腹にある古墳。大型石材が露出していることから、横穴式石室が埋葬主体と思われる。調査がおこなわれていないため詳細は不明。

### 横穴式石室（よこあなしきせきしつ）

古墳に設けられる埋葬施設のひとつ。竪穴式石室と対比される。石材を積んで構築された石室の一方に、外部と結ばれた通路を設けたもので、通常は棺を納める玄室（げんしつ）と、通路にあたる羨道（せんどう）から構成される。

### 邪馬台国・卑弥呼（やまたいこく・ひみこ）

邪馬台国は、『魏志（ぎし）』の東夷伝倭人の条（一般には魏志倭人伝と呼ばれる）に記載された倭の国の一つで、卑弥呼はその女王。『魏志』によれば、小国が分立して争乱状態にあった倭は、卑弥呼を女王に立てることで安定したという。卑弥呼は数回にわたって魏に遣使し、「親魏倭王（しんぎわのおう）」の称号と金印を与えられた。卑弥呼は3世紀中ごろに没したとされるが、これは古墳時代の初頭にあたる。邪馬台国の所在地は古くから論争的となっており、九州説と大和説が対立していたが、近年、初期の大型古墳が大和地域で発生したことが明らかになり、大和説をとる研究者が多くなっている。

### 印南野（いなみの）

高砂市、加古川市から明石市にかけての平野および台地。加古川、明石川の流域にあたり、沖積平野は豊かな生産力を誇る。陸海ともに西国への要衝であり、記紀や『播磨国風土記』にも、この地域の経営に関する記録・伝承が多い。

### 枕草子・清少納言（まくらのそうし・せいしょうなごん）

枕草子は、平安時代に清少納言により著された随筆集で、全3巻。一条天皇の中宮、定子に仕えていた筆者の随筆で、宮中の日常や行事、筆者の自然観、人生観などからなる。豊かな感受性と透徹した文体で、同時期の『源氏物語』と並び、平安時代女流文学の代表作とされる。筆者の清少納言は清原元輔の娘で、本名、生没年とも不詳。

### 須恵器（すえき）

古墳時代中期に生産が開始された無釉の陶質土器。須恵器の技術は、5世紀代に朝鮮半島からの渡来人によってもたらされ、大阪府南部で生産が開始された。半地下式の登窯（のぼりがま）を用い、1100度前後の還元焰（かんげんえん）で焼成されるため、表面は青灰色を呈する。6世紀以降は、北海道を除く全国で生産されるようになり、平安時代末には陶器へと発展してゆく。

## 用語解説

### 東播系中世須恵器（とうばんけいちゅうせいすえき）

兵庫県の東播磨地方で、平安時代末～室町時代初期に生産された須恵器。三木市、神戸市西区、明石市などに窯跡が集中する。大型の甕（かめ）、片口鉢、碗などを生産していたが、特に生産の後半期には、片口鉢を多量に生産するようになった。東播系の須恵器は、全国各地の遺跡から出土し、東播磨地域が当時の一大窯業地帯であったことを示している。またこの地域の窯で焼かれた瓦は、主に平安京内の寺院で使用され、鳥羽離宮、東寺、尊勝寺（そんしょうじ）などから出土している。15世紀には生産を終えた。

### 鳥羽離宮（とばりきゅう）

白河上皇（1053～1129）が、平安京の南に造営した離宮。

### 東寺（とうじ）

正式名称は金光明四天王教王護国寺（こんこうみょうしてんのうきょうおうごこくじ）。平安京の左京に設けられた寺院で、823年に空海に与えられて、真言宗の根本道場となった。

### 尊勝寺（そんしょうじ）

堀河天皇の発願により、平安京内に建てられた寺院（創建は1102年）。法勝寺（ほっしょうじ）、最勝寺（さいしょうじ）、円勝寺（えんしょうじ）、成勝寺（せいしょうじ）、延勝寺（えんしょうじ）とともに六勝寺（ろくしょうじ・りくしょうじ）と称される。

### 最明寺（さいみょうじ）

神戸市西区神出町に所在する真言宗の寺院。雄岡山（おっこさん）と号する。7世紀に法道仙人が開いたという伝承をもつ。また、鎌倉幕府の5代執権北条時頼（ほうじょうときより：1227～63）が、出家して最明寺入道と名乗り各地をまわった際、この寺に立ち寄って、法道仙人の遺言と法華経を入れた石箱を地中に埋めた後、梅の実を噛み割って、半分をそこに植えたという伝承がある。現在も境内には、何代目かにあたる「時頼かみわりの梅」がある。

### 法道仙人（ほうどうせんじん）

法華山一乗寺（ほっけさんいちじょうじ）を開いたとされる、伝説上の仙人。他にも数多くの、近畿地方の山岳寺院を開いたとされる。法道仙人についての最も古い記録は、兵庫県加東市にある御嶽山（みたけさん）清水寺に伝わる1181年のものである。

伝説によれば、法道仙人は天竺（てんじく＝インド）の靈鷲山（りょうじゆせん）に住む五百侍明仙の一人で、孝徳天皇のころ、紫雲に乗って日本に渡り、法華山一乗寺を開いたという。千手大悲銅像（千手観音）と仏舎利（ぶっしゃり）、宝鉢を持って常に法華経を誦（よう）し、また、その鉢を里へ飛ばしては供物を受けたので、空鉢仙人とも呼ばれたとされる。室町時代初期に著された『峰相記（みねあいき）』には、播磨において法道仙人が開いた寺として、20か寺があげられている。



## 用語解説

北条時頼（ほうじょうときより）

鎌倉幕府の第5代執権（1227～63）。幕府に引付衆（ひきつけしゅう）を置いて、裁判の迅速化と公正化をはかるなど幕府政治の改革をおこなったほか、有力豪族であった三浦氏を滅ぼして北条氏独裁体制を確立した。民政にも尽力したとされ、このため、諸国巡回の伝説がある。

ギフチョウ（ぎふちょう）

アゲハチョウ科に属するチョウ。年に一度、4月に現れ、その美しさから「春の女神」と称えられる。播磨地域では、幼虫はミヤコアオイ・ヒメカンアオイなどを食べて育つ。食草の関係から、播磨地域では、里山の雑木林が主な生息地となっていたが、開発による生息地の破壊と、雑木林の放置による荒廃で減少しつつある。環境省絶滅危惧（きぐ）II類、『改訂・兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック2003』Bランク。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	神戸の伝説散歩(兵庫ふるさと散歩11)	1983	田辺真人	神戸新聞出版センター
	今はむかし伝説紀行	2004	ビジュアルブックス編集委員会	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化	日本古典文学大系19 枕草子	1958	池田亀鑑・岸上愼二・秋山 虔 校注	岩波書店
	日本古典文学大系67 日本書紀 上	1967	坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注	岩波書店
	兵庫ふるさと散歩2 路傍の神仏たち	1979	神戸新聞社	神戸新聞出版センター
	日本思想体系1 古事記	1982	青木和夫・石母田正・佐伯有清 校訂	岩波書店
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	新修神戸市史	1989	新修神戸市史編集委員会	神戸市教育委員会
	兵庫県史考古資料編	1992	兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
	兵庫県遺跡地図(第1分冊・第2分冊)	2004	兵庫県教育委員会	兵庫県教育委員会
その他	原色日本植物図鑑木本編	1979	北村史郎・村田源	保育社

## 所在地リスト



最明寺  
雌岡山神出神社  
裸石神社  
姫石神社  
雄岡山

最明寺	神戸市西区神出町東828
雌岡山神出神社	神戸市西区神出町東1180
裸石神社	神戸市西区神出町東1180
姫石神社	神戸市西区神出町東1180
雄岡山	神戸市西区神出町東

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日

ひょうご

—神と仏—

伝説紀行

## 北野の文殊

### 文殊さまの知恵比べ

伝説

北野の文殊

文殊さまの知恵比べ

紀行

市川の流りに沿って

- ・市川の流りに沿って
- ・人々に愛される文殊様
- ・七種山と金剛城寺

関連情報

用語解説

参考書籍

所在地リスト



## 北野の文殊

### 文殊さまの知恵比べ

文殊（もんじゅ）様と言えば、知恵（ちえ）のすぐれた仏様です。あちこちのお寺で祭られていて、たくさんの人たちが、文殊様に「どうぞ知恵をお授けください」とお願いします。その文殊様同士が知恵比べをしたら、どうなるのでしょうか。

昔、播磨（はりま）にある北野の村に、文殊様がいらっしゃいました。その文殊様が、ある日、天橋立（あまのはしだて）を見物しがてら、切戸（きれど）の文殊様を訪ねようと思い立ちました。さっそく旅支度をして出かけ、天橋立をながめた後で切戸へとやって来ました。

「北野の文殊やないか。よう来たのう。どうじゃ、切戸はええとこやろう」

切戸の文殊様は、にこにこしながらむかえてくれました。

「ほんまやのう。景色もええが、ここのお寺もお参りの人がぎょうさんあって、たいしたもんやなあ」

お参りの人が数えるほどしかない北野の文殊様は、感心してそう言いました。



二人でお酒を飲みながら話していると、切戸の文殊様は、そのうちにこんなふうにくちを言い始めました。

「そやけどなあ、毎日毎日拝まれて、たのみ事ばかり聞かされたら、ほんまにかなわんもんやで」

「あほなことを。こないにお参りしてもろうて、そんなこと言うとなら、ばちが当たるで」

北野の文殊様はそう言いましたが、内心、うらやましくてたまりません。どうにかして、切戸の文殊様と入れかわりたいものだと考えました。一方の切戸の文殊様は、こんなふうに思いました。

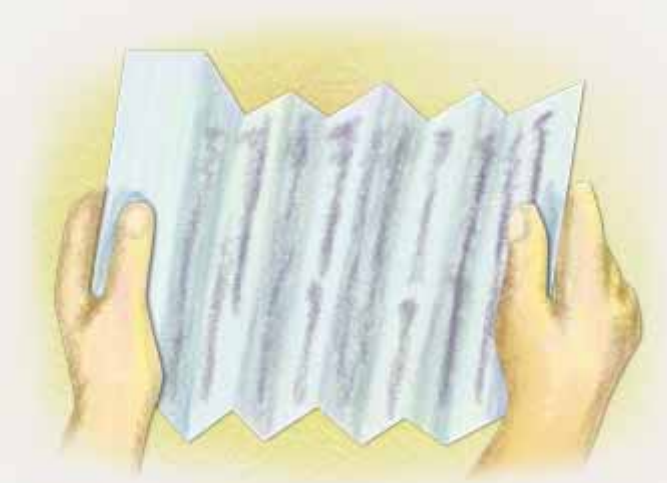
「あないなこと言うて、切戸をほめとったけど、あの北野の文殊は知恵の働くことで有名なやつや。いっぺん、北野がどないな具合か確かめたらう」

切戸の文殊様は、北野の文殊様が帰る後をそっとついて、北野までやって来ました。お寺の外で、北野の文殊様がおよめさんに土産話をしているのを、そっと立ち聞きしてみますと、

「切戸ちゅうても、たいしたことあらへんなあ。景色だけはええけど、あないにお参りが少なかったらあかん。北野とは比べもんにならへんわ。よそへ行ってみたら、自分とこのええのがわかるなあ」などと話しているのが聞こえます。

「ほれみてみい。これやから油断でけへん。切戸ではあないなこと言うったのは、うそやったんやな。やっぱり、北野の方がようもうかってるんや」

切戸の文殊様はぶつぶつ言いながら帰りましたが、「何とかして北野の文殊と入れかわることはできないか」と、そればかり考えていました。



しばらくたって、北野の文殊様から手紙が届きました。切戸ではお世話になったから、お返しに北野へもきてほしいと言うのです。ただ、正月の二十五日が、お参りが一番少ない、ひまな日だから、その日に来てほしいと書いてありました。

正月の二十五日、約束どおり切戸の文殊様は、北野の文殊様の所へやってきました。

「北野の文殊よ、なかなかええ景色やないか」

「景色言うても山しかあらへんがな」

北野の文殊様の手紙には、たしか今日はお参りが一番少なくて、ひまだと書いてありました。ところが、お参りの人を見ていると、次から次へひっきりなしです。

「お参りも多いやないか」

「いやいや、ほんまに不景気なもんやで」

切戸の文殊様がほめても、北野の文殊様はちっともじまんしません。切戸の文殊様は、それが余計に気になりました。北野の文殊様が、自分の所をちっともじまんしないのは、北野がよほどいいところだからにちがいない。そんなふうに思いました。

そこで切戸の文殊様は、じょうだんめかして、「どうや、いっぺん入れかわってくれへんか」と言ってみました。

「いやいや、こんなところでも住めば都や」

北野の文殊様はそう答えましたが、顔はにこにこしています。切戸の文殊様は、ますます北野が良い所のように思えてきました。そこでどうしても無理にたのんで、とうとう入れかわってもらったことになったのです。

ところが入れかわった次の日、ひとりのお参りもありません。それどころか、何日経っても、お参りの人はやって来ません。

「こらいったい、どないしたんやろう」

そこで切戸の文殊様は、近所に出かけて行って、おひやくしょうさんにたずねてみました。するとおひやくしょうさんが言うのです。



「お参りがあるのは、一年でも正月の二十五日だけですわ。他の日にお参りする人なんかありまへんがな」  
そのうえ、北野の文殊様にはおよめさんもないというのです。北野の文殊様は、切戸の文殊様が立ち聞きしているのを知っていて、一人で話していたのでした。

「しもた、北野の文殊にいっばいくわされたんや。」

切戸の文殊様はくやしがりましたが、もう間に合いません。

それからというもの、子供たちに

切戸の文殊はあほ文殊

北野の文殊は知恵文殊

と歌われるようになったそうです。

北野の文殊 文殊さまの知恵比べ

おわり



## 紀行「市川の流りに沿って」

### 市川の流りに沿って

姫路市の東を流れる市川は、播磨（はりま）最北端の神河町に源をもつ。あとひとつ山を越えれば、但馬国（たじまのくに）に入って円山川（まるやまがわ）水系に至るため、両水系をつなぐ道は古くから重要な交通路であったし、現在も、河口には姫路港がある。その市川の中流あたり、ちょうど市川が中国山地にさしかかる場所が、今回の伝説の舞台である。

### 人々に愛される文殊様



神積寺（看板）



神積寺（本堂）



本堂の正面



宝篋印塔

文殊様のお話で有名な妙徳山神積寺（じんしゃくじ）は、市川から1kmほど東の、山のふもとにある。「田原の文殊さん」と親しまれる神積寺は、天台宗の寺院として10世紀の末ごろに創建され、「播磨天台六山」の一つとして繁栄したが、後に全山を焼失し、現在のお堂は天正年間に再建されたものだという。森に囲まれた、いくつか簡素なお堂や大きな宝篋印塔（ほうきょういんとう）が建つ境内の中央に、薬師如来と文殊菩薩がお祭りされるお堂があった。

実は、伝説の主人公である文殊様は、神積寺の本尊ではない。本尊としてお祭りされているのは薬師如来で、こちらは国の重要文化財に指定されている。

さてこの物語であるが、どういうわけで、はるかに遠い切戸の文殊と播磨の文殊が知恵比べをするなどという話ができただろうというのが、第一の疑問であった。調べてみてひとつわかったことがある。神積寺の文殊様は、現在は「田原の文殊」として親しまれているが、お話の中では「北野の文殊」として登場する。実は、天橋立（あまのはしだて）に近い京都府の宮津にも、「北野の文殊」のお話が伝わっていて、これも同様に「文殊様の交換」話だそうだ。

同型のお話が、人から人へと語り継がれて、いつの間にかその土地なりに変化するというのはよくあることなのだが、このお話もそのひとつではないだろうか。

神積寺には、文殊様の伝説のほかに、もう一つ興味深いものが伝わっている。それは毎年成人式の日におこなわれる鬼追いである。鬼追いは追儼式（ついなしき）とも言い、元来は年越しの行事であった。鬼追いというと「悪い鬼を追い払う」ように思われるが、現在の鬼追いでは、「良い鬼が悪霊を払う」という姿が普通になっているようだ。鬼追いを直接取材することはできなかったが、現在神積寺を管理している悟真院（ごしんいん）のご厚意で、その様子を撮影した写真などを拝見することができた。

地元の人でにぎわう鬼追いには、人々が仏様に寄せる信仰が映し出されている。



文殊菩薩



薬師如来  
（本尊）



鬼追い

上記3枚の写真は悟真院提供



悟真院

## 七種山と金剛城寺



金剛城寺（参道）



金剛城寺（門）



境内の仏様

神積寺から北西へ5kmほどの場所には、七種山金剛城寺がある。聖徳太子の命によって建立されたという金剛城寺は、元は七種山（なぐさやま）中腹の七種滝付近にあったそうであるが、明治初期に現在の場所へ移された。現在の建物の中では、山門だけが七種山にあったものだという。



金剛城寺（本堂）



金剛城寺（庭園）



七種山（遠景）

その風格のある山門を入ると、よく手入れされて、お堂と調和した庭が印象的である。正面には広大な本堂と阿弥陀堂が並び、本堂背後の山腹には護摩堂が位置している。山と庭園が季節ごとに美しく彩られ、お堂のたたずまいと調和して、しっとり落ち着いた雰囲気をかもし出す。もう一度、ゆっくり訪ねたいお寺である。



七種滝（看板）



谷筋の道を登る



七種山（近景）

金剛城寺から、さらに北西へ3kmほど行ったところにあるのが、標高683mの七種山で、七種滝はその中腹付近にある。この渓谷にはいくつもの滝が連なっているが、落差72mという雄滝（七種滝）は、兵庫県でも有数の豪快な瀑布（ばくふ）と聞いていた。

ところが残念なことに、取材で訪ねた折は長く雨がなかったせいか滝の水はすっかり枯れており、ただ巨大な岩壁だけが屹立（きつりつ）している状況であった。いつか、雨の多い季節に再訪したいと思う。

この七種滝の渓谷には、「七種の川人（せんにん）」という伝説がある。かつて日照りに苦しみ、種籾（たねもみ）さえなくなったとき、ある村人がここで川人に会って不思議な袋をもらったという。その袋には7種類の種子が入っており、いくら取り出してもなくならなかったという。滝の水が戻ったなら、そんな川人がいたという幽玄郷の雰囲気、今でも感じるができるのではないだろうか。

もう一度市川筋に戻って少し上流へとさかのぼると、神河町越知谷（かみかわちょうおちだに）の奥には、「ひょうごの椀貸し伝説を巡る」で紹介した、椀貸し淵（わんかしづち）がある。少し下流の姫路市船津町には、オオナムチノミコトの伝説を伝える粳岡（ぬかおか）があり、その東にはアメノヒボコノミコトが軍勢を集めたという八千種野（やちぐさの）がある。



水のない雄滝



雄滝をのぞく



重なる山並み



椀貸し淵の稲荷社



椀貸し淵の水面



粳岡の遠景

播磨から但馬へ、あるいはその逆へ。時の流れを静かに見てきたであろう市川の流域には、まだ知られていない伝説が眠っているのかもしれない。



## 用語解説

### 市川（いちかわ）

兵庫県の播磨地域中央部を流れて瀬戸内海に注ぐ河川。青倉山（標高811m）付近に源流をもち、延長は75.8km、流域面積は596平方キロメートル。神河町の越知川は最大の支流である。市川に沿う経路は、山陰道と山陽道を結ぶ街道（但馬道）として利用されてきた。

### 円山川（まるやまがわ）

兵庫県北部を流れて日本海に注ぐ但馬最大の河川。朝来市円山から豊岡市津居山（ついやま）に及ぶ延長は67.3km、流域面積は1,327平方キロメートル。流域には平野が発達し、農業生産の基盤となっている。河川傾斜が緩やかで水量も多いため、水上交通に利用され、鉄道が普及するまでは重要な交通路となっていた。

### 神積寺（じんしゃくじ）

神崎郡福崎町に所在する天台宗の寺院。妙徳山（みょうとくさん）と号する。正暦（しょうりゃく）2（991）年、慶芳上人（けいほうしょうにん）が文殊菩薩のお告げにより創建したと伝えられる。平安時代後期には隆盛し、播磨六ヶ山（播磨天台六山）の一つに数えられた。延慶（えんきょう）2（1309）年、火災のため焼失し、天正15（1588）年に再建された。本尊の薬師如来座像は重要文化財であり、境内の石造板碑（いたび）、石造五重塔などは県指定文化財となっている。創建の故事から、「田原の文殊さん」として親しまれている。

### 天台宗（てんだいしゅう）

隋（ずい）の天台智者大師により開かれた仏教の宗派。法華経を根本経典とする。平安時代前期に最澄（さいちょう）が入唐してこれを学び、帰国後、比叡山延暦寺を開いて教えを広めた。後にはしだいに密教化した。鎌倉時代には、天台宗より多くの新宗派が出た。

### 播磨天台六山（はりまてんだいろうくざん）

兵庫県播磨地域における主要な天台宗寺院。播磨六ヶ山ともいう。円教寺（えんぎょうじ）、八葉寺（はちようじ）、随願寺（ずいがんじ）、一乗寺（いちじょうじ）、普光寺（ふこうじ）、神積寺（じんしゃくじ）の6寺院。

### 宝篋印塔（ほうきょういんとう）

本来は「宝篋印陀羅尼経（ほうきょういんだらにきょう）」を納めるための塔。日本では平安時代末ごろから作られるようになり、鎌倉時代中ごろからはその役割が、墓碑や供養塔に変化していった。多くの場合石塔である。

### 薬師如来（やくしにょらい）

東方淨瑠璃世界（とうほうじょうりせかい）の仏。修行者の時に12の願を立てて成仏したとされ、衆生（しゅじょう）の病気を治し、安楽を得させる仏とされている。仏教の伝来以後、治病の仏として広く信仰された。薬壺（つぼ）を持つ像が多い。



## 用語解説

### 文殊菩薩（もんじゅぼさつ）

仏教における菩薩の一つ。文殊師利菩薩（もんじゅしゅりぼさつ）の略。普賢菩薩（ふげんぼさつ）とともに、釈迦如来の脇侍をつとめる（釈迦三尊像など）。知恵の菩薩として信仰されており、「三人寄れば文殊の智恵」などのことわざでよく知られる。

### 切戸（きれど）

京都府宮津市天橋立文殊に所在する小字（こあざ）。同地には「切戸の文殊」として知られる天橋山智恩寺（てんきょうざんちおんじ）がある。智恩寺は、奈良県桜井市の安倍文殊院、山形県高畠町の亀岡文殊堂とともに、日本三文殊のひとつとされる。

### 鬼追い・追儺式（おにおい・ついなしき）

鬼会（おにえ）、追儺会（ついなえ）、鬼遣（おにやらい）ともいう。追儺は本来、疫病をもたらす鬼を払う年越しの行事であったが、仏教における新年の行事である修正会（しゅしょうえ：その年の平安と豊穰を祈願する行事）と結びついて各地に広まった。現在では、鬼追いの鬼は儺（疫鬼）を払い疫病を除くものとされている。式では、鬼に仮装した人が松明、鉾、剣などを持って、さまざまな所作をおこなう。なお節分の豆まきも、追儺式が起源とされている。

### 金剛城寺（こんごうじょうじ）

神崎郡福崎町に所在する真言宗の寺院。七種山（なぐささん）と号する。元の名称は作門寺。7世紀前半、高麗の僧恵灌（えかん）の創建と伝えられ、また法道仙人を導師としたという。8世紀に焼失後再建され、勅命により金剛城寺と称して行基を迎えたという。後に廃寺となったが、17世紀に復興されて作門寺と称した。本来は七種山山中にあったが、明治初年に現在地へ移った。縁起によれば、滋岡（滋丘とも書く）川人（しげおかのかわひと）が、当地の干ばつに際して、人々に鉢から七種の種を分け与えて救ったが、その種は尽きることがなかったといい（「七種の川人」伝説）、これが山号の由来となっている。

### 七種山・七種滝（なぐさやま・なぐさのたき）

七種山は神崎郡福崎町に所在する山で、標高は683m。峻険な頂上と中腹にある七種滝が著名。七種滝は合計48の滝からなり、兵庫県の観光百選にも選ばれる。うち最大の雄滝（七種滝）は落差72mを測り、県下屈指の規模を誇る。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	兵庫の民話	1960	宮崎修二郎・徳山静子	未来社
	日本の伝説43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎・足立巻一	角川書店
歴史・文化	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	兵庫のふるさと散歩3 西播編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
その他	妙徳山神積寺(参拝者用資料)	不詳	妙徳山神積寺	妙徳山神積寺

## 所在地リスト



七種滝	神崎郡福崎町高岡字七種
七種山	神崎郡福崎町高岡字七種
金剛城寺	神崎郡福崎町田口236
神積寺	神崎郡福崎町東田原1905

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日

ひょうご

—神と仏—

伝説紀行

海の神様と山の神様

かみ島はどちらのもの？

右手のない阿弥陀様

海の底で見守る手

伝説

海の神様と山の神様

かみ島はどちらのもの？

右手のない阿弥陀様

海の底で見守る手

紀行

播磨灘をめぐる神仏

- ・ 東播磨の名山
- ・ 時光寺の阿弥陀様
- ・ 家島の大神

関連情報

用語解説

参考書籍

所在地リスト



## 海の神様と山の神様 かみ島はどちらのもの？

むかし、播磨灘（はりまなだ）にうかぶ家島（いえしま）の大神と、志方（しかた）にある高御位山（たかみくらやま）の神様が、けんかになりました。けんかの原因は、家島と高砂（たかさご）の間にうかんでいる、かみ島という小さな島です。

「かみ島は、家島のものだ」

「いいや、かみ島は志方村のものだ」

高御位山のふもとに住んでいる阿弥陀様（あみださま）は、「神様どうしのけんかだよ。仏の私が出ることもなからう」と、しらんぷりをしていましたが、二人の神様のけんかは、いつまでたってもおさまる気配がありません。とうとうしびれをきらした阿弥陀様は、神様たちの仲立ちをすることにしました。

かみ島には、一人の女神が住んでおりましたから、阿弥陀様はまず、この女神に会いにゆくことにしました。女神に会って、どちらの神様が好きかとたずねると、女神は家島の大神の方が好きだといいます。

そこで阿弥陀様は、高御位山の神様の所へ行って、こういうことだからとわけを話し、かみ島を家島の大神にゆずるように言いました。

ところが、高御位山の神様は納得できません。夜のうちにこっそりかみ島をつなでしげると、力いっぱい引っ張りはじめたのです。これを見ていた家島の大神はびっくりしました。

「これではかみ島を取られてしまうぞ」



そこで大神は、家島一の力持ちであった孫兵卫（まごべえ）に大きないかりを持たせて、かみ島を引きとめるように言いました。孫兵卫がかみ島についてみると、島の根っこがはずれて、かみ島はじわじわと高御位山の方へ引きよせられています。

「これはいかん」

孫兵卫は、大いかりのつなを、かみ島にぐるぐると巻き付けると、いかりを海の中へ投げこみました。すると、動いていた島が、ぱったりと動かなくなったのです。



高御位山の神様は、急に島が動かなくなったので、いっそう力をこめてつなを引っ張りました。うんうんと力いっぱい引っ張りましたが、かみ島はびくともしません。そこで、足をふんばって体中の力をこめたたん、つなはとちゅうでぶつりと切れてしまいました。高御位山の神様は勢いあまってひっくり返り、ごろごろと雷（かみなり）のような音をたてながら、山のてっぺんから落っこちてしまいました。

今も、かみ島の南側にある、大いかりとよばれる難所は、こんなわけのできたのだということです。

## 右手のない阿弥陀様 海の底で見守る手

今から800年ほど昔のことです。印南郡（いなみぐん）の阿弥陀村（あみだむら）の村はずれを歩いていた、猟師（りょうし）の善四郎（ぜんしろう）が、あれ果てた寺のそばを通りかかりますと、大きな松の木の前に、なにかが転がっているのを見つけました。

近づいてみると、それは阿弥陀様（あみださま）の像でした。よく見ると、その右手のつけ根には、鉄の矢が突きささってました。

「仏様に矢を射（い）るとは、なんとばちあたりなことを」

せめて我が家でお祭りしようと、善四郎は阿弥陀様を背負って帰ることにしました。



ところが御着（ごちゃく）のあたりまで来たときです。背中の阿弥陀様が急に重くなって、一步も動けなくなりました。どうしたことかと思っていると、

「善四よ、善四。ここでよいから、おろしておくれ」

なんと背中の阿弥陀様がそうおっしゃるのです。善四郎がびっくりしていると、阿弥陀様はなおもおっしゃいました。

「私を、この橋の上から、川へ投げこんでおくれ」

善四郎はまたびっくりしました。



「とんでもない。そのようなおそれ多いことはできません」  
善四郎がそう言っても、阿弥陀様はどうしても川へ投げこむようにとおっしゃいます。とうとう善四郎は、阿弥陀様をかかえ上げ、川の流れに向かって投げこみました。

「ああおいたわしい。申しわけないことをしてしまった」

善四郎は手を合わせて、何度も阿弥陀様を拝みました。ところがしばらくすると、とつぜん大つぶの雨が降り始めて、川の水がどんどん増え、阿弥陀様はごうごうと流れる水にまかれて、川下へと流されていったのでした。



それから三年がたちました。

ある夜、善四郎の夢に、あの阿弥陀様が現れておっしゃいました。

「善四郎よ、私はあのあと播磨灘（はりまなだ）へ出て、海の底から海で働く衆生（しゅじょう）を守っておった。だが来年からは、地上の衆生を救わねばならぬ。ご苦労だが、曾根村（そねむら）に行ってくれぬか。その日笠山（ひがさやま）にある黒岩で座禅（ざぜん）している僧（そう）がおるから、高台から見て光っている海の底を探るように伝えてくれ」

翌日、善四郎が言われたとおり日笠山へ来てみると、岩の上で一人の僧が座禅を組んでいます。そこでさっそく阿弥陀様の夢の話をしめすと、僧はたいへん喜びました。僧の名は時光（じこう）といました。

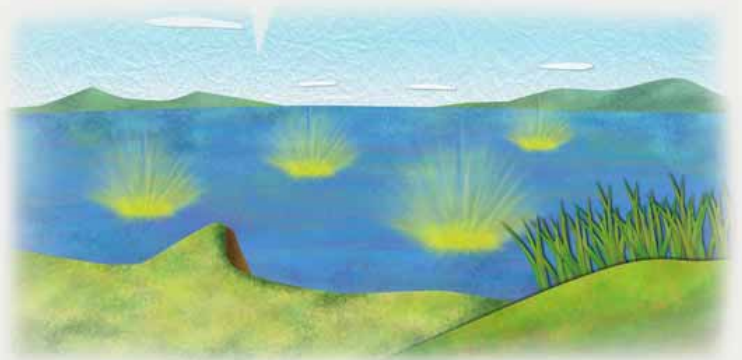
时光はさっそく、家島の東にあるミノ島の高台に登り、二十一日間座禅を組みました。座禅が終わったその日、広い海のあちこちから、金色の光が立ち上るのが見えました。そこで、漁師を集めて光っている海底にあみを下ろしてみると、ばらばらになった仏様の体や手足などが次々にかかってきたのです。

それをつなぎあわせると、あの阿弥陀様の姿がみごとにできあがりました。

ところが阿弥陀様の右手だけがありません。どうしたのだろうとさわざ始めた人々に向かって、时光は静かに言いました。

「これでよい。阿弥陀様の右手は、これから先も海の底にあって、海で働く衆生をまもってくださるのだ」

こうして、右手のない阿弥陀様は、日笠山のふもとでお祭りされることになりました。そういうわけで、高砂にある時光寺（じこうじ）の阿弥陀様は、今も右手がないということです。



右手のない阿弥陀様 　海の底で見守る手  
おわり

## 紀行「播磨灘をめぐる神仏」

### 東播磨の名山



高御位山

播磨灘（はりまなだ）を見晴らす高御位山（たかみくらやま）は、山好きの人にはなじみが深いかもしれない。標高はわずか304mしかないが、南北の登山道は岩場が露出したかなり急峻な斜面で、登るのにはけっこう骨が折れる。東西はやや緩やかであるが、代わりに長い縦走路があって、全行程を歩こうと思うと、健脚の人でも5～6時間はかかるだろう。

JRの山陽本線ならば、曽根駅の少し東側あたりで北側をみると、正面にながめられるのがこの山である。

高御位山の南麓は、高砂市（たかさごし）阿弥陀町という。「右手のない阿弥陀様」の話の中で、時光上人が海から引き揚げた阿弥陀様をお祭りするために寺を創建し、それがこの地に移転されたことが地名のおこりだそうである。

国道2号線の阿弥陀交差点から、北へ1kmほど上った山ろくが、最短距離の登山道の登り口である。上るほどに岩肌が露出してくる急な登山道は、重い機材を抱えた取材の時にはとりわけ大変であった。中腹を過ぎたあたりからは、高砂市の市街地から播磨灘への眺望が開けてくる。雄大なながめで、さほど標高もないこの山がなぜ人気があるのかわかる。南西に目を転じると、尾根になかば隠された家島群島が見え、その向こうには四国の島影がかすんでいる。



播磨灘（家島方面）を望む

### 時光寺の阿弥陀様



門前の宝篋印塔

阿弥陀の交差点から県道395号線を南へ下ると、道はすぐにJR山陽本線の線路を越える。坂を下りきって間もなくの角を右（西）へ折れると、正面が時光寺である。



時光寺（門）



時光寺（本堂）



本堂の内部



時光寺（看板）



時光寺（門）

播州（ばんしゅう）の善光寺とも称される時光寺は、1249年に時光上人が海中から阿弥陀如来像を引き揚げ、これを本尊として創建したことに始まるという。播州善光寺という俗称にも、ひとつの伝説があるそうだ。昔、兵庫に住む老いた行者が、毎年信州の善光寺へ参詣（さんけい）しているのを見た善光寺の阿弥陀如来が、その労苦をあわれみ、「時光寺の阿弥陀は善光寺の分身であり、三度参詣すれば、善光寺へ一度参詣するのと同じである」と教えたのが始まりだという。

お寺のご厚意により、拝見することができたご本尊の阿弥陀様は、確かに右手のひじのあたりから先が無いようだった。



本尊（阿弥陀如来立像）



網堂

この阿弥陀様を引き揚げた網を納めたのが、同じ高砂市内の伊保東（いほひがし）にある網堂である。網堂は、伊保小学校北東の集落の中ほどにある。村の中の細い道を行かばならず、少し見つけにくいのが、新幹線沿いにあるスーパーマーケットを目印に、その東側の道を南に入ればよい。

古い家や築地塀が続く道を行くと、村の中にぽつんと、思ったより大きなお堂が目につく。なんの飾りもない質素なお堂であるが、今もきちんと掃除され、お祭りされている。

この阿弥陀様が、もう一つの伝説でも活躍しているということは、伝説ができたのが時光寺建立以後だったのか、あるいは建立以後に脚色されたためだろうか。どうもお話そのものは古そうに思えるので、僕としては後者の意見を採用したいのだが。

高御位山の神様が、家島の神様と上島をめぐって争ったという伝説は、なかなかユーモラスなお話である。高御位山の神様には、もう一つ古い伝説が『播磨国風土記』にあって、海の中にある牛島という島の神様との争いがその内容になっている。このお話では高御位山の神様が勝ったことになっているが、いずれにせよ、高御位山の神様が相当古くから人々に知られていたことは間違いなさだろう。



網堂（内部）

## 家島の大神



一方の家島の大神も、古くから祭られる神であり、その点では引けをとらない。家島本島の北東端にある家島神社からは、少し遠くはなるものの、高御位山の頂上を見ることができる。

姫路港から船に30分ほど揺られると、家島に到着する。船が島へ近づいて湾に入りかけるころ、進行方向左手の半島の先に、石造りの鳥居を見ることができる。これが家島神社である。島最大の港は真浦港であるが、神社は湾の東にある宮港からが近い。

家島神社は、家島群島最大の島である家島の北東端、天神鼻（てんじんはな）の山頂にある。島の北東部には平地がほとんどなく、港から、海岸に沿った細い道の行き着くところが家島神社である。ここにお祭りされているのは、オオナムチノミコト、スクナヒコナノミコトという国土経営でおなじみの神様たちであるが、天満大神もともにお祭りされている。

菅原道真が大宰府に流される途中で立ち寄ったという伝説もあるようで、本来は天津神が祭られていたものから、次第に天神へと転じたものなのだろう。



家島神社  
（遠景 海上から）



海上から見た鳥居



家島神社（鳥居）



家島神社（境内）



家島神社（本殿）



家島神社（看板）

瀬戸内に浮かぶ小島であるにもかかわらず、背後をうっそうとした原生林に覆われた家島神社は、古代の謎を今も秘めている。この島こそがオノコロ島だという説があるのも、うなずける。そう思いながら短い家島滞在を終えた。



## 用語解説

### 播磨灘（はりまなだ）

兵庫県の播磨地域に面する、瀬戸内海東部の海域。東を淡路島、西を小豆島（しょうどしま）、南を四国によって画されている。面積は約2,500平方キロメートル。近畿、中国、四国、九州を結ぶ重要な航路がある。

### 高御位山（たかみくらやま）

高砂市と加古川市の境界にある山。標高は304m。低山ではあるが、山頂から山腹にかけて岩盤が露頭する急斜面が続く。頂上からの展望がよく登山者も多い。また、高砂市北西部の鹿島神社からは、百間岩、鷹の巣山、鹿島山、高御位山と続く縦走路がある。

### 時光上人（じこうしょうにん）

鎌倉時代の僧（？～1276）。俗姓は源経家（みなもとのつねいえ）。浄土宗の証空上人（しょうくうしょうにん）の弟子となり、時光坊と称した。高砂市伊保崎（いぼさき）の心光寺（しんこうじ：現在の綱堂）での修行中、五色の雲に乗って現れた高僧のお告げによって、播磨灘各所で綱を引いたところ、阿弥陀如来像の手足や体が引き揚げられたという。時光寺は、この如来像を祭るため建てられたもの。

### 阿弥陀如来（あみだによらい）

阿弥陀仏と同じ。大乘仏教の浄土教の中心をなす仏。修行者であったとき衆生（しゅじょう）救済の願をたて、成仏して後は西方の極楽浄土で教化しているとされる。自力で成仏できない人も、念仏を唱えれば阿弥陀仏の力で救われ、極楽に往生すると説く。平安時代に信仰が高まり、浄土宗・浄土真宗の本尊となっている。

### 家島群島（いえしまぐんとう）

家島群島は播磨灘北西部に位置し、大小40余の島からなる。家島の地名は、『播磨国風土記』にも見える。島名は「えじま」と言いならわされていたが、昭和3（1928）年に町制が施行された際には、「いえしまちょう」と定められた。平成18（2006）年に姫路市に合併された。

### 時光寺（じこうじ）

高砂市時光寺町に所在する浄土宗の寺院。遍照山（へんしょうざん）と号する。また、播磨の善光寺と称される。縁起によれば、時光上人が播磨灘の海中より引き揚げた、阿弥陀如来像を祭るため、1249年に堂宇を建てたのが始まりという。その後の争乱で幾度か焼失したが、1613年に現在の本堂が再建された。境内の石造宝篋印塔（ほうきょういんと）は県指定文化財。

### 善光寺（ぜんこうじ）

長野県長野市に所在する無宗派の寺院。尼寺であり、浄土・天台両宗の管理に属する。定額山（じょうがくさん）と号する。7世紀初めの創建とされるが、詳細は不詳。本尊は、欽明天皇の時代に、百済の聖明王から献じられたという阿弥陀三尊であるが、絶対の秘仏であり、善光寺住職さえ見ることはできないという。本堂は昭和28（1953）年国宝に指定されている。

## 用語解説

### 網堂（あみどう）

高砂市伊保東（いほひがし）に所在する堂。時光寺の本尊である、阿弥陀如来像を引き揚げた網が祭られたという。

### 播磨国風土記（はりまのくにふどき）

奈良時代に編集された播磨国の地誌。成立は715年以前とされている。原文の冒頭が失われて巻首と明石郡の項目は存在しないが、他の部分はよく保存されており、当時の地名に関する伝承や産物などがわかる。

### 家島神社（いえしまじんじゃ）

姫路市家島町宮（みや）に所在する式内社（しきないしゃ）。祭神はオオナムチノミコト、スクナヒコナノミコトと天満大神（てんまんおおかみ）。創立年代は不詳であるが、840年には官社に列せられている。初めは天神（あまつかみ）を祭っていたが、後にオオナムチノミコトとスクナヒコナノミコトが合祀（ごうし）された。天満大神（菅原道真）を祭神とするのは、天神を天満大神と誤って伝えたためという。

### オオナムチノミコト（おおなむちのみこと）

記紀や風土記に見られる神。国造り、国土経営などの神とされるほか、農業神、商業神、医療神としても信仰される。大穴牟遲神・大己貴命・大穴持命・大汝命など、さまざまに表記される。『播磨国風土記』では、葦原色許乎神（あしはらのしこをのみこと）、伊和大神と同一神とみなされているようである。また記紀では、大国主神（おおくにぬしのかみ）と同一神として扱われる。こうした神名の多重性は、本来、各地域で伝承された別個の神を、記紀編集などの過程で統一しようとしたため生じたものであろう。

### スクナヒコナノミコト（すくなひこなのみこと）

記紀や風土記に見られる神。『日本書紀』では少彦名命（スクナヒコナノミコト）、『古事記』では少名毘古那神（スクナヒコナノカミ）。『播磨国風土記』では、オオナムチノミコトとともに国造りをおこなったとされている。道後温泉や玉造温泉などを発見したと伝えられ、温泉開発の神としても祭られる。『古事記』によれば、少彦名命は、天之羅摩船（アメノカガミノフネ：ガガイモのさやでできた船）に乗り、蛾（が）の皮の衣服を着て出雲国にやってきた小さな神とされており、民話「一寸法師」の原型とも言われている。

### 天満大神（てんまんおおかみ）

菅原道真を神としたもの。天満宮の祭神。

### 菅原道真（すがわらのみちざね）

平安時代前期の公卿（くぎょう）、学者（845～903）。菅公（かんこう）と称された。幼少より詩歌に才能を発揮し、33歳で文章博士（もんじょうはかせ：律令政府の官僚養成機関であった大学寮に置かれた教授職）に任じられた。宇多、醍醐両天皇の信任が厚く、当時の「家の格」を超えて昇進し、従二位右大臣にまで任ぜられた。しかし、道真への権力集中を恐れた藤原氏や、中・下級貴族の反発も強くなり、左大臣藤原時平が「齊世親王を立てて皇位を奪おうとしている」と天皇に讒言（ざんげん）したことで、大宰権帥（だざいのごんのそち）に左遷され、同地で没した。

## 用語解説

### 大宰府（だざいふ）

中世以降太宰府とも表記するが、歴史用語としては「大」の字を用いる。

7世紀後半に、九州の筑前国（ちくぜんのくに）に設置された地方行政機関。外交と防衛を主任務とすると共に、西海道9国（筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向、薩摩、大隅）と三島（壱岐、対馬、種子島）の行政・司法を所管した。与えられた権限の大きさから、「遠の朝廷（とおのみかど）」とも呼ばれる。

### 天津神（あまつかみ）

記紀神話で、神の国である高天原（たかまがはら）にいた神。高天原から日本国土へ降ってきた神、およびその子孫の神も天津神と呼ばれる。これに対し、元から地上にいた神を国津神（くにつかみ）と呼ぶ。

### オノコロ島（おのころじま）

「自凝島」と表記する。記紀の神話では、日本で最初にできた島とされる。その内容は、伊弉諾尊（いざなぎのみこと）・伊弉冉尊（いざなみのみこと）の二神が、天浮橋（あまのうきはし）に立ち、天沼矛（あまのぬぼこ）で海をかき回して引き上げたとき、矛の先からしたたる潮が固まってできたというものである。空想上の島であるのか、現実の島のいずれかに擬せられていたのかは不明であるが、現在、兵庫県の淡路島、沼島をはじめ数か所をオノコロ島にあてる考えがある。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話中播編	1972	郷土の民話中播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	兵庫県むかしむかし第一集	1974	兵庫県老人会連合会	兵庫県老人会連合会
	兵庫の伝説	1980	兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
	日本伝説大系第8巻	1988	黄地百合子・酒向伸行・田中久夫・福田晃	みずうみ書房
	今はむかし伝説紀行	2004	ビジュアルブックス編集委員会	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化	日本古典文学大系2 風土記(播磨国風土記)	1958	秋元吉郎 校訂	岩波書店
	家島群島 家島群島総合学術調査報告書	1962	家島群島総合学術調査団編	神戸新聞社
	日本古典文学大系67 日本書紀 上	1967	坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注	岩波書店
	日本思想体系1 古事記	1982	青木和夫・石母田正・佐伯有清 校訂	岩波書店
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
その他	播州善光寺 時光寺(参拝者資料)	不詳	時光寺	時光寺



## 所在地リスト



高御位山	高砂市阿弥陀町阿弥陀・加古川市志方町成井
家島神社	姫路市家島町宮991
時光寺	高砂市時光寺町12-18
網堂	高砂市伊保東1丁目11

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏  
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館  
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第2刷 2009年4月1日

ひょうご

—神と仏—

伝説紀行

## 橋の地蔵様

うつぶせになったその訳は

伝説

橋の地蔵様

うつぶせになったその訳は

紀行

橋の地蔵さんを訪ねる

- ・橋の地蔵さんを訪ねて
- ・あごなし地蔵さんと泣き石
- ・金鐘城
- ・国宝浄土寺とその前身

関連情報

用語解説

参考書籍

所在地リスト

## 橋の地蔵様

### うつぶせになったその訳は

小野の高田町には、「橋の地蔵様」という小さなお地蔵さまがお祭りされています。一年中、お供えの花が絶えないこのお地蔵様は、たいへん靈驗（れいけん）あらたかだということで、近所の人たちはもちろんですが、遠くからもお参りの人がやってきます。

けれども今立っているお地蔵さまは、目印のために新しく置かれたお地蔵様なのです。本当の橋のお地蔵様は、その後ろ側のみぞの上にうつぶせになり、まるで橋のようになっていますから、そのお顔はみぞに入ってからぞきこまないと見えないのです。

お地蔵様が橋になったのには、こんな訳がありました。

ずっと昔は、このお地蔵様もみぞのそばにまっすぐ立っていらっやいました。そのころ、お地蔵様のそばに、ひとりぼっちで住んでいるおばあさんがありました。

おばあさんは村でも一番の働き者で、毎朝仕事をはじめる前、お地蔵様にお花やお供え物をもってお参りするのでした。ほかにはだれも、お参りする人がありません。家を出て、田んぼのわきを通り、細いみぞをこえて、おばあさんは毎日お地蔵さまにお参りしていました。



「お地蔵様、ひとりきりでおさびしいでしょう。私もひとりなんですよ。どうぞ仲良くしてください」

おばあさんはそう言って、お地蔵様をきれいにそうじしてはおいのりするのでした。お地蔵さまは、ひとりぼっちのおばあさんの話し相手でもあったのです。





そんなある朝、おばあさんは急にこしが痛くなってしまいました。すぐに良くなるだろうと思っていたのですが、だんだんひどくなって、歩くのも大変です。ご飯を作ることもせいっぱいというありさまでした。毎朝の楽しみだったのに、お地蔵様と話することもできません。

何日か過ぎて、ようやく少しばかり痛みがおさまると、おばあさんは久しぶりにお地蔵様にお参りすることにしました。つえをついて二、三歩歩いては休み、休みしながら、おばあさんはやっとのことでお地蔵様の所へやってきました。

何日か来ない間に、お地蔵様のまわりは草ぼうぼうになっています。

「まあまあ、こんなに草がのびてしまって。さぞやうっとうしかったことでしょう」

おばあさんはこしが痛いのがまんして、お地蔵様のまわりの草をぬきはじめました。何本かぬくたびに、こしをさすって休まないと痛くてたまりません。それでもおばあさんは、少しずつ草をぬいてゆきました。

「毎日お参りできたら、こんなに草がのびることもなかったのに、許してくださいね」

ようやく草をぬきおわって、気がつくと、もうお日様が山の下にかくれそうになっていました。

「おやおや、もう日が暮れる。足元がまっ暗になる前に帰らないと。お地蔵様、また明日来ますからね」

おばあさんはそう言うと、つえを手にして立ち上がりました。ところがこしが痛くて、足が前に出ません。来るときはよいしょとまたいだみぞを、どうしてもこえることができないのです。

「あいたたた。こしが痛くて足が動かんわ。どうしたらよかろうか」

おばあさんがつぶやくと、お地蔵様がとつぜん、「おばあさん、私が橋になってあげましょう」と言って、みぞの上にばたんとうつぶせになったのです。

「さあさあ、どうぞわたってください」

おばあさんはおどろきました。

「めっそうもない。お地蔵様の背中をふむなんて、そんなもったいないことをしたら、ばちがあたります」

おばあさんがそう言うと、お地蔵様は、

「私も、長い間立ってばかりいたから、こしが痛くなっていたのです。どうぞわたるついでに、私のこしをふんでください」といいます。そう言われても、おばあさんはなかなか、お地蔵様の橋をわたる決心がつきませんでした。

けれどもお地蔵様は、「早くふんでください」と何度もせかします。とうとうおばあさんも、お地蔵様をふんでわたることにしました。

「ああ、もったいない、もったいない」おばあさんはぞうりをぬぐと、おそろおそろ、できるだけそっとお地蔵様の背中をふんでわたりました。



「ありがとうございました、お地蔵様。さぞや痛かったでしょう。本当にもったいないことをしました」

おばあさんはそう言いながら、お地蔵様のこしのあたりを両手でそとなでました。するとどうでしょう。あんなに痛かったこしが、すうっと楽になったのです。それだけではなく、元気だったころと同じようにこしがしゃんとして、どんどん歩けます。

「ああ、ありがたい」

次の日からおばあさんは、また元気に働いて、お地蔵様にもお参りできるようになりました。

この話は、村中の人たちに伝わりました。それほどご利益（ごりやく）のあるお地蔵様ならば、と、たくさんの人たちがお参りに来るようになりました。やがてそのうわさが伝わると、遠くの村からもお参りの人が訪れるようになりました。

それからもおばあさんは、元気で長生きして、幸せな一生を送りました。そして、おばあさんが亡くなった後にも、お地蔵様にお参りする人が絶えることはありませんでした。

今では、お地蔵様のみぞもコンクリート造りに変わりましたが、お地蔵さまはやっぱり、橋のままでいらっしやいます。

## 紀行「橋の地蔵さんを訪ねる」

### 橋の地蔵さんを訪ねて



コンクリートの  
水路



新しいお地蔵様

橋の地蔵さんは、小野市北西部の「青野ヶ原」に近い、加古川の左岸の高田町にある。雄岡山・雌岡山（おっこさん・めっこさん）からさらに国道175号線を北上して、小野市へ向かうと、三木市大村の交差点から道幅の広い新道になるが、ここからは旧国道に道をかえることになる。さらに神戸電鉄の小野駅前から、県道を北上すると高田町に到る。

県道が通っていた台地から加古川に向かって坂道を下ると、青々とした田が広がり、その中に高田の集落がある。道の先には加古川の堤防が見え、その対岸が南北にのびた広大な青野ヶ原台地である。

しばし橋の地蔵さんを探して車を走らせたが、いっこうに見つけれない。確かに田んぼのわきにあるはずなのだが、目にとまらないのである。探しあぐねたころ、作業をしている村の人に会ったので「橋の地蔵さんはどこですか」と尋ねたところ、「橋の地蔵さんかいな。あこのな、家が見えとるやろ。あの筋のちょっと入ったとこや」と教えてくれた。教えられたとおりに道をたどると、広い車道からちょっと入った所に、「橋の地蔵」の物語を刻んだ、背の低い石碑が建てられていた。

石碑の左には、最近作られたらしい小さな地蔵が置かれ、右側には古い一石五輪塔（いっせきごりんとう）のかげらが置かれている。そして、ほ場整備でコンクリート造りになってしまった水路の上に、お地蔵さんの橋がかかっていた。

橋の地蔵さんは、板石に刻まれた小さなお地蔵さんである。橋になるときにうつぶせになったということで、今もうつぶせのまま、コンクリート水路にかかっている。もっとも今ではお地蔵さんを踏んで渡る必要はない。お地蔵さんの前には、少ししおれかけた花束が供えられ、その間に置かれたお茶碗にはおさい銭が入れられていた。隣の新しいお地蔵さんのひざにも、おさい銭が置かれている。今でもお参りする人が絶えないということがわかる。

お地蔵様の顔を拝見しようと水路に入ってみたが、狭すぎてお地蔵さんが見える所まで顔をつっこめない。仕方なく、カメラを持った腕をいっぱい伸ばして、「このあたりか」というところでシャッターを切ってみた。

写ったのは、立ち姿のお地蔵さんと、そのわきに座る小さなお地蔵さんであった。が、まっすぐに写っていない。腕を伸ばしたり少し縮めたり、手首を曲げてみたりと、散々苦労して、やっと何枚か「こんなもんかな」という写真が撮れた。撮り終わって立ち上がると、水路の中でかがんで、不自然な姿勢をしていたせいか腰の筋肉が引きつっている。こんな時こそ橋の地蔵さんの御利益にすがらねばと、伝説の通りお地蔵さんの背中を両手でなでてみたのは言うまでもない。

青々と稲が育つ田の上を、ツバメが急旋回しながら飛び交っている。少し歩いてみたら、池の堤にカワラナデシコがピンクの花を咲かせていた。のどかな風景。コンクリートの水路はちょっと味気ないけれど、お地蔵さんを大切にしてきた村の人たちの気持ちは、伝説とともに、今も間違いなく受け継がれている。

橋の地蔵さんの周辺には、ほかにも伝説スポットがいくつかあるし、歴史を伝える文化財も多い。小野市では市内の地区ごとに、こうした場所をとりまとめてわかりやすく編集したパンフレットを作っているから、これを見ながら歩くのも楽しいだろう。



橋の地蔵さん



橋の地蔵（石碑）



水路にかかる  
お地蔵様



水路の底から



## あごなし地蔵さんと泣き石



街道の脇に立つ

橋の地蔵さんの北方、小野市と加東市（かとうし）との市境近くには、「あごなし地蔵さん」がある。橋の地蔵さんから西へ向かって加古川（かこがわ）を越え、県道349号市場滝野線を北へ3kmほど車を走らせる。復井町の交差点の一つ北で右折して、JRの線路を渡り、さらに村の中の細い道を左折して200mばかり進んだやぶの前である。元はどこにあったものかわからないそうであるが、「世の中に出て人々を助けたい」とおっしゃったことから、現在ある場所に移されたという。道路から一段下がったところに小さな祠（ほこら）があって、橋の地蔵さんと同じように花束や果物やおさい銭が供えられていた。



祠と石碑

お地蔵様の顔を見ようと、地面に顔を近づけて祠をのぞいてみたが、小さなお地蔵様は赤い前掛けをいくつもされていて、本当にあごが無いのかどうかわからなかった。

あごなし地蔵さんの南約2.5km、河合西町の丘の上には「泣き石」がある。自然石の表面に梵字（ぼんじ）と絵が刻まれた碑なのだが、表面の風化が進んで刻線は今ひとつはっきりしない。昔、この石を別の場所に運んだところ、「元の場所に帰りた」と泣いたので、あわてて返したという話が伝えられている。



あごなし地蔵（石碑）



あごなし地蔵様



泣き石からの展望



泣き石（石碑）

お地蔵様といい泣き石といい、石には不思議な魂があって、人を助けたり脅かしたりするものだと、昔の人は心から信じていたのだろう。



泣き石



刻まれた梵字

## 金鐘城



城跡全景

さらに南へ車を走らせると、昭和町の夢の森公園に、金鐘城（かなつるべじょう）がある。青野ヶ原台地の先端に位置する、中世に築かれた山城であるが、同じ範囲の中で弥生時代の高地性集落跡も見つかっており、現在は史跡公園として整備されている。



金鐘城（看板）



尾根の先の櫓

土塁や柵（さく）、堀跡、郭の中の建物跡などがわかりやすく復元されている。また台地の先端には物見櫓（ものみやぐら）が復元されていて、中世地方城館のありかたがよくわかる城跡である。

ここからの眺望はすばらしく、小野市南部から播磨（はりま）・丹波（たんば）国境の山塊まで見渡すことができる。



復元された櫓

## 国宝浄土寺とその前身

橋の地蔵さんから東へ5kmほどの浄谷町には、国宝「阿弥陀三尊立像」を本尊とする浄土寺がある。浄土寺は真言宗の寺院で、鎌倉時代初めごろに、重源（ちょうげん）により創建されたものである。もともこの付近は、東大寺領の「大部荘（おおべのしょう）」という荘園であった。重源は、平安時代末に焼失した東大寺大仏殿を再興するために、西日本各地に7か所の別所を設けたとされるが、そのうちの 하나가浄土寺だとのことである。浄土寺の門を入ると、境内の中央には蓮の花が咲く池がある。池をはさんで東側のお堂が薬師堂、西側が浄土堂であるが、もちろんこの配置は西方浄土に坐す阿弥陀如来と、東方浄瑠璃世界（じょうりせかい）の薬師如来の位置をあらわしているのだろう。



浄土堂



浄土堂



薬師堂



浄谷八幡神社拝殿



広渡廃寺（全景）



復元模型



復元画



展示室

大仏様（だいぶつよう）建築の浄土堂は、浄土寺創建当時の建築で、本尊の快慶作の阿弥陀三尊像は特に著名である。阿弥陀様が祭られているお堂の西には幅広い格子窓があって、夏の夕暮れには赤い夕日が射し込むようになっている。夕日が射すと、朱に塗られた本堂の中は赤い光で満ちて、金色の阿弥陀様を包み込み、真の極楽浄土にいるかのような荘厳な雰囲気醸し出すそうである。

この浄土寺の前身とされるのが広渡廃寺（こうどはいじ）である。国指定史跡の広渡廃寺は、浄土寺と橋の地蔵さんの中ほどにあって、現在は史跡公園として整備され、資料館も併設されている。

奈良の薬師寺に似た伽藍配置（がらんはいち）をもつ広渡廃寺は、7世紀に造営された後、平安時代まで続くが、平安時代の末には衰微して荒れ果てていた。その仏像の一部が、浄土寺に移されたということである。

公園では、各建物跡がわかりやすく整備されていて、礎石の配置や回廊の姿がよくわかる。また資料館には、ここからの出土品が多数展示されているから、ぜひ一度訪ねてみてほしい。

加古川の中流域は、古くから開けた場所である。いつのころからか村ごとに祭られたお地蔵様は、どれほど世の中が有為転変を経ても、いつも暮らしのそばにいて人々をなぐさめたり、力づけたりしてくれてきた。これからもきっとそうであるに違いない。



## 用語解説

### 小野市（おのし）

兵庫県中央部に所在する市。加古川中流域に位置し、1954年に市制を施行する。2007年11月現在の人口は約50,500人。江戸時代に一柳氏（ひとつやなぎし）が、小野に陣屋を移し、その城下町が建設された（小野藩）。古くから、そろばんと家庭用刃物に代表される伝統工業に特徴があり、複合地場産業都市として発展を遂げてきた。

### 青野ヶ原（あおのがはら）

播州平野の中央部に広がる台地。東は加古川に面する。小野市、加東市、加西市にまたがり、東西3km、南北10km、標高は80～90mを測る。

台地上からは後期旧石器が出土するほか、古墳も分布しているが、酸性土壌である上、水利に恵まれなかったため開発が進まなかった。明治24（1891）年に陸軍演習地となり、太平洋戦争終結後はアメリカ軍に接收されたが、昭和32（1957）年からは自衛隊演習場となった。近年、台地周辺には播磨中央公園、工業団地などが造営され、変貌しつつある。

### 加古川（かこがわ）

兵庫県の南部を流れる一級河川。延長96km、流域面積1,730平方キロメートルを測る県下最大・最長の河川である。但馬・丹波・播磨の三国が接する丹波市青垣町の粟鹿山（あわがさん、標高962m）付近が源流で、途中小野市、加古川市などを流れ、加古川市と高砂市の境で播磨灘に注ぐ。

加古川の水運は、古代から物流を担う経路であったと考えられ、特に日本海に注ぐ由良川水系へは峠を越えずに到達できることから、「加古川 - 由良川の道」とも呼ばれて、日本海側と瀬戸内側を結ぶ重要なルートとされている。

### 雌岡山・雄岡山（めっこさん・おっこさん）

神戸市西区に所在する山。雌岡山は標高249m、雄岡山は標高241mを測る。古代から神奈備（かなび：神が鎮座する山）として信仰されたようで、雌岡山頂上には、神出神社が祭られている。優美な山容から、一帯は『改訂・兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック2003』の自然景観でCランクにあげられている。

### 五輪塔（ごりんとう）

墓、または故人を供養するために建てられた塔の一種。多くは石製。下から順に、基礎、塔身、笠、請花（うけばな）、宝珠の5段に積み、それぞれが、地、水、火、風、空をあらわす。密教に由来し、平安時代中ごろから造られるようになった。一石五輪塔は、これを一個の石材に刻んだもの。

### 金鐘城（かなつるべじょう）

小野市昭和町に所在する中世の城跡。青野ヶ原台地の先端に位置する山城で、平成4年から6年にわたる調査で、全容が明らかにされた。城の構造としては、主郭と西の郭からなり、その間に幅約20m、深さ約9mの堀切が設けられている。主郭は土塁に囲まれ、その内側に4棟の建物跡が検出された。城主は、赤松氏の家臣中村氏とされ、後には別所氏が保有した。発掘調査では、壺（つぼ）、播鉢（すりばち）、茶碗などの陶磁器、石臼、土錘などの漁労具、刀、小刀の鞘などの武具類、瓦、釘、硯、水滴、銅銭などが出土した。

このほかに山城の範囲内で、弥生時代の竪穴式住居が6棟検出され、加古川を見下ろす高地性集落が存在したことが確認されている。



## 用語解説

### 浄土寺（じょうどじ）

小野市浄谷（きよたに）町に所在する真言宗の寺院。極楽山（ごくらくさん）と号する。東大寺の播磨別所として、重源（ちょうげん）が建久年間（1190～98）に開いた。

この地域には、古くから東大寺の荘園（大部荘：おおべのしょう）が営まれていたが、重源は、東大寺大仏復興のために、長く荒廃していた同荘園を東大寺別所として経営することとなった。

境内は、中央の池（放生池）を中心に、西に浄土堂、東に薬師堂を配する。

西の浄土堂は、重源が1194年に建立したもので、当時の中国（宋）の建築様式を取り入れた大仏様（だいぶつよう）と呼ばれる様式で建てられており、鎌倉時代以降の寺院建築に大きな影響を与えた。大仏様の建築は、ほかに東大寺南大門、同開山堂などが残されているのみで、本尊の阿弥陀三尊像とともに国宝に指定されている。

浄土堂は夏の間、阿弥陀三尊の背後から夕日が射しこむように設計されており、夕暮れ時に朱色に染まる堂内は荘厳そのものである。

ほかに1517年に再建された薬師堂、重源坐像、境内の八幡神社本殿・拝殿、絹本著色仏涅槃図（けんぼんちゃくしよくぶつねはんず）ほかの重要文化財、県指定文化財など多数を保有し、播磨を代表する古刹といえる。

### 真言宗（しんごんしゅう）

仏教の一派。インドに起こり、平安時代前期に、空海によって日本へもたらされた。空海は、高野山に金剛峯寺を開いて、真言宗の道場としたほか、823年には京都に教王護国寺（きょうおうごくじ：現在の東寺）を受け、これらの寺院が同宗の中心となった。

### 重源（ちょうげん）

鎌倉時代初期の、浄土宗の僧。醍醐寺（だいごじ）で真言を学んだ後、法然について浄土宗を学んだ。3度にわたって宋へ入り学んだほか、土木建築の技術を習得した。戦乱で荒廃した東大寺再建のために、造東大寺大勧進職（ぞうとうだいじだいかんじんしき）に任ぜられ、諸国をまわって勧進（かんじん：寄付を募ること）に努めるとともに、民衆の教化・救済などの社会事業を推進した。

### 東大寺（とうだいじ）

奈良市に所在する華厳宗（けごんしゅう）の寺院。聖武天皇の発願により745年に建立されたもので、本尊は盧舎那仏（るしゃなぶつ）。平安時代にかけて、23か国に92か所の荘園を領有して勢力を誇ったが、1180年に平重衡（たいらのしげひら）の焼き討ちにあって、堂塔の大部分を焼失した。その後、重源（ちょうげん）が中心となって復興されるも、1567年には三好氏一族と松永久秀の戦火により再び焼失。大仏殿は1692年に至ってようやく復興された。

創建以来の建築として、三月堂、正倉院（いずれも国宝）が、鎌倉時代の建築として南大門、鐘楼（いずれも国宝）などが残るほか、奈良～平安時代の仏像、古文書など、日本史上重要な資料が多数残され、その多くが国宝、重要文化財に指定されている。

## 用語解説

### 大部荘（おおべのしょう）

播磨国に設けられた東大寺の荘園。現在の小野市付近にあたる。12世紀中ごろに成立したが、その後国衙（こくが：律令制下において国単位で設けられた政庁）との間で所属が争われたため、放置されて荒廃した。12世紀末になって、東大寺の復興に従事することになった重源の尽力により、東大寺領として確定した。

### 西方浄土（さいほうじょうど）

仏教において、この世の西方、十万億の仏土を隔てたところに存在する、阿弥陀仏の浄土。極楽浄土。

### 阿弥陀如来（あみだによらい）

阿弥陀仏と同じ。大乘仏教の浄土教の中心をなす仏。修行者であったとき衆生（しゅじょう）救済の願を立て、成仏して後は西方の極楽浄土で教化しているとされる。自力で成仏できない人も、念仏を唱えれば阿弥陀仏の力で救われ、極楽に往生すると説く。平安時代に信仰が高まり、浄土宗・浄土真宗の本尊となっている。

### 東方浄瑠璃世界（とうほうじょうりせかい）

阿弥陀如来（あみだによらい）の浄土が西方にあるのに対し、東方に存在するという薬師如来（やくしによらい）の浄土。地は瑠璃（るり）からなり、建物・用具などがすべて七宝造りで、無数の菩薩（ぼさつ）が住んでいるという。

### 薬師如来（やくしによらい）

東方浄瑠璃世界（とうほうじょうりせかい）の仏。修行者の時に12の願を立てて成仏したとされ、衆生（しゅじょう）の病気を治し、安楽を得させる仏とされている。仏教の伝来以後、治病の仏として広く信仰された。薬壺（つぼ）を持つ像が多い。

### 大仏様（だいぶつよう）

天竺様（てんじくよう）ともいう。鎌倉時代に、東大寺大仏殿再建に採用された、中国（宋）の建築様式。構造上、大型木造建築に適する様式である。

### 快慶（かいけい）

鎌倉時代の仏師。生没年不詳。運慶の弟子とされ、流麗な作風で知られている。東大寺を再興した重源（ちょうげん）の知遇を得て、浄土寺阿弥陀三尊像、東大寺の阿弥陀如来像、同南大門金剛力士像、同僧形八幡神像などのほか、多数の阿弥陀如来像を残している。

## 用語解説

### 広渡廃寺（こうどはいじ）

小野市広渡町に所在する古代寺院跡。昭和48～50（1973～75）年と、平成5～7（1993～95）年に発掘調査が実施され、伽藍配置と規模が明らかになった。伽藍配置は、金堂と中門の間に東西両塔を配し、金堂の背後に講堂をおき、これらを回廊で取り囲むという薬師寺式を踏襲しており、寺域は、東西約100m、南北約150mにわたる。

出土遺物等から、創建年代は奈良時代中ごろ、廃絶年代は平安時代後期と考えられている。なお、小野市の浄土寺に伝わる『浄土寺縁起』では、荒廃したままとなっていた広渡寺の本尊を、浄土寺薬師堂の本尊として移して安置したと記されている。

### 伽藍・伽藍配置（がらん・がらんはいち）

伽藍とは寺院の建物のこと。伽藍配置とは、寺院における堂塔の配置で、時代や宗派により、一定の様式がある。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	兵庫の伝説	1980	兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
	小野ふるさと伝え語り	1998	小野の歴史を知る会	小野市文化連盟
	今はむかし伝説紀行	2004	ビジュアルブックス編集委員会	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化	兵庫県むかしむかし第一集	1974	兵庫県老人会連合会	兵庫県老人会連合会
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	風土記の考古学2	1994	檀本誠一編	同成社
	小野市史第一巻 本編	2001	小野市史編纂専門委員会	小野市
	おのふるさとマップ1 かわいを歩く…	2005	小野市教育委員会	小野市教育委員会
	おのふるさとマップ3 おおべを歩く…	2005	小野市教育委員会	小野市教育委員会
その他	国宝浄土寺(見学者用パンフレット)	不詳	小野市観光協会	小野市観光協会
	夢の森公園 金鐘城遺跡広場(見学者用パンフレット)	不詳	小野市教育委員会	小野市教育委員会



## 所在地リスト



橋の地蔵	小野市高田町
広渡廃寺	小野市広渡町竹ノ本ほか
金鐘城	小野市昭和町441-6ほか
泣き石	小野市河合西町
あごなし地蔵	小野市復井町1656
浄土寺	小野市浄谷町2094

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏  
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館  
 〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日

ひょうご

—神と伝—

伝説紀行

# イザナギとイザナミの国造り

## 高天原、地上の世界、黄泉の国

伝説

イザナギとイザナミの国造り  
高天原、地上の世界、黄泉の国

紀行

古事記とオノコロ島伝説をめぐる

- ・オノコロ島はどこに
- ・淡路島が沼島か
- ・蛭子命が流れ着いた場所
- ・もうひとつの候補地
- ・『古事記』の歌の謎

関連情報

用語解説  
参考書籍  
所在地リスト

## イザナギとイザナミの国造り

### 高天原、地上の世界、黄泉の国

はるかな昔のことです。天上に、神様たちが住んでいる、高天原（たかまがはら）というところがありました。あるとき、神様たちが高天原から見下ろしてみますと、下界はまだ生まれたばかりで、ぜんぜん固まっていません。海の上を、何かどろどろ、ふわふわとした、くらげのようなものがただよっているというありさまでした。

「このままではいけない」

そう話し合った高天原のえらい神様たちは、イザナギノミコト、イザナミノミコトという二人の神様に、天沼矛（あめのぬぼこ）という大きな槍（やり）をあたえ、下界をしっかりと固めて、国造りをするようにと命じました。そこで二人は、高天原から地上へとつながる天浮橋（あめのうきはし）の上に立って、槍の先で、どろどろとした下界をかきまぜました。



「こおろ、こおろ、こおろ」

かきまぜるたびに、大きな音がひびいてきます。二人が天沼矛をすうっと引き上げると、槍の先からぼたぼたと落ちたしずくは、みるみるうちに固まってひとつの島ができあがりました。ひとりで固まってできあがったので、この島のことを「おのころ島」といいます。

イザナギとイザナミは、さっそくおのころ島へとおりてゆきました。



二人の神様は、おのころ島の上にはりっぱな御殿（ごてん）を建てて、そこで結婚（けっこん）の儀式（ぎしき）をしました。こうして、最初に生まれたのが淡路島（あわじしま）で、その後、四国や、九州や、本州や、そのほかのたくさんの島々が生まれました。

島ができあがると、妻のイザナミは、それぞれの島を治める神様を生みました。それに続いて、石や土の神様、家の神様、風の神様、川や海の神様、山の神様と、たくさんの神様が生まれてきましたが、火の神様を生んだとき、イザナミは大やけどをしてしまいました。



大やけどに苦しみながら、イザナミはなおも、粘土（ねんど）の神様や、水の神様、鉾山（こうざん）の神様などを生みました。無理を重ねたイザナミの体は、みるみるうちに弱ってゆきます。イザナギはけんめいに看病（かんびょう）をしましたが、そのかいもなく、イザナミはとうとう亡くなってしまいました。

「愛（あい）するおまえの命を、一人の子の命とひきかえにしてしまった」

イザナギは、イザナミのなきがらにとりすがって、ぼろぼろとなみだを流して泣きました。そしてイザナミを、出雲（いずも）の国と伯耆（ほうき）の国の境にある比婆山（ひばやま）にほうむりました。イザナギは、妻に大やけどをおわせた火の神のことを、どうしても許すことができず、とうとう、剣で切り殺してしまいました。

イザナミが亡くなってからしばらくの間、イザナギは一人で悲しんでいましたが、どうしてもがまんすることができなくなりました。そこで、死者の国まで妻をむかえに行こうと思いたちました。死者の国は、黄泉（よみ）の国といって、深い地の底にあるのです。

イザナギは、地の底へと続く長い暗い道を下りて行きました。ようやく黄泉の国に着くと、イザナギはとびらの前に立ち、イザナミに、自分といっしょに地上へ帰ってくれるよう、優しく呼びかけました。

「ああ、愛する妻よ、私とおまえの国造りは、まだ終わっていないのだよ。どうかいっしょに帰っておくれ」ところが中からは、イザナミの悲しそうな声が帰ってきました。

「どうしてもっと早く来てくれなかったの。私は、もう黄泉の国の食べ物を食べてしまいました。ですから、地上へはもどれないのです。けれども愛するあなたのためですから、地上へ帰ってもよいかどうか、黄泉の国の神様にたずねてみましょう。それまで、私の姿を決してのぞかないでくださいね」

そう言われて、イザナギはじっと待っていましたが、いつまでたっても妻からは返事がありません。とうとう待ちくたびれたイザナギは、小さな火をともし、妻を探すために黄泉の国へと入っていったのです。

黄泉の国は、どこまでも真っ暗なやみが続いています。うす暗い灯りをもって、目をこらしていたイザナギは、思わず「あっ」とさけんで立ちつくしました。何とそこには、くさりかけてうじ虫がいっぱいたかっている、イザナミの体が横たわっていたのです。おまけにその体には、おそろしい雷神（らいじん）たちがとりついています。

「あれほどのぞかないでと言ったのに、あなたは私にはじをかかせましたね」

自分のみにくい姿をのぞかれてしまったイザナミは、かみの毛を逆立ててすさまじくおこりました。

「イザナギをつかまえて、殺しておしまい」

イザナミがそう命令するや、黄泉醜女（よもつしこめ）という悪霊（あくりょう）たちが、イザナギをつかまえようと、あちらからもこちらからもわき出るように現れました。



イザナギは地上へ続く黄泉平坂（よもつひらさか）に向かって、必死ににげました。イザナミと黄泉醜女たちは、すさまじい勢いでせまってきます。イザナギはけんめいに走りながら、かみに結んでいたかざりを放り投げました。するとかみかざりからはたちまち野ブドウの木が育って、たくさんの実がなりました。それを見た黄泉醜女たちは立ち止まって、実を食べ始めましたので、そのすきに、イザナギはどんどん走りました。けれどもしばらくすると、また悪霊たちが追いついてきます。イザナギは、こんどはかみにさしていたくしを放り投げました。すると、そこからはたけのこが次々に生え、黄泉醜女たちはまた立ち止まって、食べ始めました。

こうしてけんめいににげるイザナギの行く手に、ようやく地上の世界が見えてきました。しかし黄泉醜女たちは群れをなして追いついてきます。イザナギは片手に持った剣を後手にふり回して防ぎながら、ようやく坂のふもとまでたどり着くと、そこに生えていた桃（もも）の木になっていた実を三つもぎとって、黄泉醜女たちに投げつけました。すると、桃の実がもっている不思議な霊力（れいりょく）におそれをなした黄泉醜女たちは、みんなにげ散ってしまいました。

けれどもイザナミは、まだ恐ろしい顔でせまってきます。ついにイザナギは、黄泉平坂に、千人がかりでないと動かさないような大岩を引っ張ってきて、それで黄泉の国と地上の世界の間をふさいでしまったのです。

追いかけてきたイザナミは、岩の向こうから大声でさげびました。

「これからは、あなたの国の人を、一日に千人ずつ殺しますからね」

「それならば、地上では一日に千五百人ずつ子供が生まれるようにするよ」

イザナギは答えました。

こうして二人は別れ別れになり、地上の世界と黄泉の国とは、永久に行き来できない石のとびらでふさがれてしまったのです。けれどそれからというもの、亡くなる人よりも生まれる人の方が多くなり、地上の人は次第に増えるようになったのだそうです。



イザナギとイザナミの国造り 高天原、地上の世界、黄泉の国  
おわり



## 紀行「古事記とオノコロ島伝説をめぐる」

### オノコロ島はどこに

日本神話の中で、オノコロ島は特別な島である。神様が日本の島々を作ったとき、最初にできた島だからである。そもそもオノコロ島というのは、数多い列島の中でどの島なのか。それともあくまでも空想上の島で、現実には存在しないのか。古くからいくつもの説が出されてきた。

兵庫県の淡路島には、自凝島神社（おのころじまじんじゃ）がある。それだけではなく、淡路島の南西に浮かぶ沼島にも自凝神社（おのころじんじゃ）があって、そのどちらにもオノコロ島の発祥地だとする考えがある。それだけではない。播磨灘（はりまなだ）を隔てた家島こそがオノコロ島だという説も、実は根強く存在する。

いずれが正しいかを判定するのは、到底僕の手には負えない仕事だけれど、「日本発祥の地」を探す旅はそれだけで十分魅力的で、何だか解けない謎を追う探偵のような気分させてくれるのだ。

### 淡路島か沼島か



榎列自凝島神社  
（鳥居）



榎列自凝島神社  
（拝殿）



榎列自凝島神社  
（看板）



せきれい石



榎列自凝島神社  
（拝殿）



たくさんの  
願い事

淡路島は、島をあげて「淡路＝オノコロ島説」を主張している。その舞台のひとつが自凝島神社だろう。南あわじ市榎列（えなみ）の自凝島神社は、国道28号線の円行寺（えんぎょうじ）から北西へ、三原川に沿って1.5kmほど行った所にある。

巨大な鳥居をくぐり、階段を登ると、思ったよりも質素な社殿が建っている。ここにお祭りされているのは、もちろんイザナギノミコト・イザナミノミコトである。神社の周辺には、「天浮橋（あめのうきはし）」や「芦原国（あしはらのくに）」など、国産みの物語にちなむ場所がお祭りされている。

現在は、周囲はかなり市街地化しているが、かつてはどうだったのだろう。



浮橋の石



天浮橋



浮橋の石

淡路島には伊弉諾神宮（いざなぎじんぐう）もある。淡路市一宮町多賀にあるこの神社は延喜式内社（えんぎしきないしゃ）で、やはりイザナギノミコト・イザナミノミコトがお祭りされている。本殿の下には、イザナギノミコトが葬られた古墳があるとも伝えられていて、オノコロ島であると同時に、神様の永眠の地でもあるそうだ。深い森は、いかにもその地にふさわしく思える。



伊弉諾神宮（参道）



伊弉諾神宮（門）



伊弉諾神宮（拝殿）



淡路名所図絵

さて、「オノコロ神社」は、実はもう一つある。淡路本島の南西に浮かぶ、沼島（ぬしま）にある自凝神社である。南あわじ市灘の土生（はぶ）にある港から、連絡船に15分ほどゆられると、沼島港に着く。そこから港に沿って南へ歩き、細い山道を、息を切らしながら10分ほど登った尾根の上に、自凝神社がある。沼島は空から見ると、ちょうど勾玉（まがたま）のような形をしているが、自凝神社はその一方の先端にあると思ってもらえばよい。

小さな神社である。特別な飾りも、目立つ鳥居もなく、ただ質素な社殿が雑木林に囲まれてひっそりと建っている。社殿の背後へ続く道を歩くと、淡路島の南部から四国までのすばらしい展望が開ける。

沼島の港から、家の間を抜ける細い道を行くと、やがて島の中ほどの丘を越えて、島の東側の海岸に出る。ちょうどその海岸にあるのが上立神岩（かみたてがみいわ）である。巨大な岩石が崩落してできた荒磯の先の海中に、天を裂くような三角形の先端を見せながら屹立（きつりつ）する巨岩である。高さが15mあるという岩は、イザナギとイザナミがオノコロ島に降り立ち、巨大な柱の周囲をまわって婚姻をおこなったという、「天の御柱」だともいわれている。



断崖の先に立つ岩



屹立する巨岩



本殿までの長い階段



イザナギとイザナミ

もちろん、長い自然の営みでできた巨岩の柱なのだろうが、そこに砕ける波頭を見ていると、あまりの雄大さに、神威を感じてしまうのも確かである。



上立神岩（看板）

沼島自凝神社（石碑）



## 蛭子命が流れ着いた場所

淡路島の北端、岩屋港の傍には、岩楠神社（いわくすじんじゃ）がある。この神社にはイザナギノミコトとイザナミノミコト、そして二人の間に最初に生まれた、蛭子命（ひるこのみこと）が祭られている。蛭子命は、体がうまくできあがっていなかったために、葦舟にのせられて流されてしまったという神様である。港に向かって建つ鳥居をくぐると、まず戎神社（えびすじんじゃ）の社殿が目に入るが、岩楠神社は、実はその裏にある。

戎神社の背後には、高さ十数メートルの岩壁があり、そこに洞窟が二つ開いている。その一つに岩楠神社がお祭りされているのだ。地元では、ここがイザナギノミコトの墓所だと伝えられているそうだ。洞窟の入り口に設けられた格子の隙間からうかがうと、暗闇の中に石造りの小さな祠（ほこら）がぼんやりと見えて、まるでその先に黄泉の世界が続いているような感覚にとらわれてしまう。

これだけ、伝説にゆかりの場所がそろると、淡路島＝オノコロ島説が信憑性を帯びてくるように思うのだが、実は、兵庫県にはもう一つ、オノコロ島を主張する場所があるのだ。



岩楠神社（看板）



戎神社の鳥居



岩楠神社



洞窟に祭られる



洞窟の奥の祠



## もうひとつの候補地

淡路島から播磨灘（はりまなだ）を隔てて、およそ30km西にある、家島がそれだ。家島という名のいわれは、神武天皇が日向から大和へと攻め上るとき、家島に船を泊め、「まるで家にいるように静かだ」と言ったことに始まるという。天皇はここで天津神（あまつかみ）を祭り、武運を祈ったそうである。後には、神功皇后が三韓（新羅・百済・高句麗）へ出発するとき、ここで天神を祭ったとも伝えられている。



家島神社  
（遠景 海上から）



海上から見た鳥居



家島神社（本殿）



家島神社（境内）

神武天皇や神功皇后の話を、歴史的事実として取り扱うことはできないが、このような伝承が生まれるほど、この地が古くから崇敬の対象であったことは間違いないだろう。

播磨灘に浮かぶ家島は、確かにオノコロ島に相応しい島の一つだと思える。

オノコロ島は、淡路島、またはその一部か。それとも北淡路の海辺に浮かぶ絵島か、あるいは沼島か。「自凝島」が淡路島だとすると、神話の中で自凝島の後に「淡路島を産んだ」と書かれている点をどう考えるのか。やはり家島が自凝島なのか。



家島神社（看板）



家島神社  
（鳥居）

## 『古事記』の歌の謎

古事記の中に、仁徳天皇が詠んだという歌がある。

『ここに天皇、その黒日賣（くろひめ）を恋ひたまひて、大后（おほきさき）を欺きて曰らさく、「淡道島を見むと欲（おも）ふ。」とのりたまひて、幸行（い）でましし時、淡道島（あはじしま）に坐（いま）して、遙（はろばろ）に望（みさ）けて歌ひたまひて曰く、おし照るや 難波の崎よ 出で立ちて 我が国見れば 淡嶋（あはしま） 淤能暮呂嶋（おのころしま） 檳榔（あぢまさ）の 島も見ゆ 放（さけ）つ島見ゆとうたひたまひき』

天皇がクロヒメに浮気心を起こしたことはともかく、「淡路島に坐して」歌ったという点は注目に値する。「オノコロ島が見える」と歌われているからには、「オノコロ島」は、淡路島から見える島だったということになるからだ。

最後の「さけつ島」は、はるかに離れた島、あるいはぼつんと離れた島というほどの意味だろうが、おのころ島の前に登場する「淡島」は、現在の何島にあたるのだろうか。また檳榔（あぢまさ）はヤシ科の植物で、現在はピロウと呼ばれているそうであるが、これはかなり暖地性の植物で、現在の大阪湾周辺には生育場所がないようだ。

国産み神話では、蛭子神の次に生まれたのが淡島であり、これも満足な子ではなかったため、イザナギ、イザナミ両神の子として数えないとされているが、もしかすると歌にでてくるのは、この淡島なのだろうか。そうすると、仁徳天皇の歌に出てくる島のうち、淡島や檳榔島は、現実には存在しない＝見えない島だったかもしれないとも思えてくる。だとすると、この歌で「見ゆ」と詠まれた「オノコロ島」も、本当は見えなかったのではないか、見えたのははるか彼方の「さけつ島」だけで、他の島々は、天皇の心の中だけで見えた島だったかもしれない。

オノコロ島は、はるかな祖先たちが自分たちの故郷を心に思い描いた、伝説の中だけに生きる島だったのだろうか、それとも・・・。



## 用語解説

### オノコロ島（おのころじま）

「自凝島」と表記する。記紀の神話では、日本で最初にできた島とされる。その内容は、伊弉諾尊（いざなぎのみこと）・伊弉冉尊（いざなみのみこと）の二神が、天浮橋（あまのうきはし）に立ち、天沼矛（あまのぬぼこ）で海をかき回して引き上げたとき、矛の先からしたたる潮が固まってできたというものである。空想上の島であるのか、現実の島のいずれかに擬せられていたのかは不明であるが、現在、兵庫県の淡路島、沼島をはじめ数か所をオノコロ島にあてる考えがある。

### 淡路島（あわじしま）

瀬戸内海東部に位置し、大阪湾と播磨灘を画する、瀬戸内海最大（日本列島第11位）の島。面積は596平方キロメートルで、兵庫県土の7.1%を占める。島北端と本州の間は明石海峡、島南端と四国の間は鳴門海峡。島の北半部では、南北にのびる山地が島を東西に分け、南部にも島内最高峰の諭鶴羽山（ゆづるはさん：標高608m）を中心とした山地があって、平野は、両地域の間を流れる三原川（みはらがわ）流域に広がっている。

島内の行政区画は、北部の淡路市、中部の洲本市、南部の南あわじ市からなり、3市を合計した人口は、2007年現在で約153,600人となっている。

### 沼島（ぬしま）

淡路島の南海上にある、東西1.8km、南北2.5kmの島。行政区画上は南あわじ市に属する。沼島の名称は、紀貫之の『土佐日記』（成立は10世紀前半）にも見えるという。

### 家島（いえしま）

家島群島は播磨灘北西部に位置し、大小40余の島からなる。家島の地名は、『播磨国風土記』にも見える。島名は「えじま」と言いならわされていたが、昭和3（1928）年に町制が施行された際には、「いえしまちょう」と定められた。平成18（2006）年に姫路市に合併された。

### イザナギノミコト・イザナミノミコト（いざなぎのみこと・いざなみのみこと）

記紀神話で、日本の国土を産んだとされる男女の神。イザナミノミコトが、火の神を産んだ際に火傷を負って亡くなり、イザナギノミコトがそれを追って黄泉国（よみのくに）を訪ねるという物語は著名である。黄泉国から戻ったイザナギノミコトが、楔（みそぎ）をした際に生まれたのが、アマテラスオオミカミ、ツクヨミノミコト、スサノオノミコトで、その後の記紀神話の重要な位置を占める。

### 式内社（しきないしゃ）

『延喜式』の「神名帳」に掲載されている神社。全国で2,861か所。

### 上立神岩（かみたてがみいわ）

沼島東岸にある、高さ15mの巨岩（\*）。先端が鋭く尖っており、国産み神話に登場する「天の御柱」にあてる伝説がある。（\*上立神岩の高さについては、兵庫県大百科事典上に従った）

## 用語解説

### 天の御柱（あめのみはしら）

国産み伝説に登場する柱。天に届くほどの柱を意味するとされる。イザナギとイザナミが婚姻する際、左右からこの柱を廻り、両者が出会った所で声をかけ合ったという。

### 蛭子命（ひるこのみこと）

日本神話に登場する神。蛭子神、水蛭神と同じ。イザナギとイザナミの間に最初に生まれた子であったが、婚姻の際、イザナミが先に声をかけたのが原因で、満足のゆく子にならなかったため、葦舟に乗せて流されてしまったと伝える。蛭子命と2番目に生まれたアワシマは、2神の子には数えないとされている。後に蛭子神は、恵比寿（戎：えびす）と同一視され、信仰の対象となった。

### 播磨灘（はりまなだ）

兵庫県の播磨地域に面する、瀬戸内海東部の海域。東を淡路島、西を小豆島（しょうどしま）、南を四国によって画かれている。面積は約2,500平方キロメートル。近畿、中国、四国、九州を結ぶ重要な航路がある。

### 神武天皇（じんむてんのう）

記紀に登場する初代の天皇。和風諡号（しごう：死後に贈られる名）は、神日本磐余彦命（かむやまといわれひこのみこと）。記紀によれば、日向（ひゅうが：現在の宮崎県地方）から軍勢を率いて東征し、大和を征服。紀元前660年に橿原宮（かしはらのみや：奈良県橿原市）で即位して初代天皇となったという。初めて国を統治した天皇という意味で、ハツクニシラススメラミコトとも呼ばれる。

ただし天皇に関する記紀の記述のうち、特に初代神武天皇から第9代開化天皇までの記事は、合理性を欠く部分が多い上、系譜はあるものの旧辞（きゅうじ：記紀編纂の基礎となった史書。現存しない）に記されていたはずの事跡も記載がなく、生存の年代観も実際の歴史と整合しない。このためこれらの天皇は、朝廷の権威と支配を正当化するために付け加えられたものであり、いずれも実在ではないと考えられる。

### 天津神（あまつかみ）

記紀神話で、神の国である高天原（たかまがはら）にいた神。高天原から日本国土へ降ってきた神、およびその子孫の神も天津神と呼ばれる。これに対し、元から地上にいた神を国津神（くにつかみ）と呼ぶ。

### 神功皇后（じんぐうこうごう）

『日本書紀』によれば、第14代仲哀天皇（ちゅうあいてんのう）の皇后。名を息長足姫尊（おきながたらしひめのみこと）という。仲哀天皇の死後、これに代わって朝鮮へ出兵して、新羅を討ち、百済・高句麗を帰服させたとされるが、これは日本を大国として位置づけるための架空の説話である。

### 古事記（こじき）

奈良時代に成立した歴史書。全3巻からなる。天武天皇（てんむてんのう）の命により、稗田阿礼（ひえだのあれ）が記憶していた歴史を、太安万侶（おおのやすまろ）が採録したという。天皇家の系譜を明らかにするという、政治的目的をもって編集されたもので、歴史書としては、日本に現存する最古のものである。

## 用語解説

仁徳天皇（にんとくてんのう）

第16代の天皇。『日本書紀』によれば290～399年の人物であるが、歴史上は5世紀前半の大王であったとされている。「倭の五王」として、中国の史書『宋書』、『南史』に記載された讚（さん）または珍（ちん）、『梁書（りょうしよ）』に記載された、賛（さん）または彌（み）に比定する見解がある。難波（現在の大阪市）に都を置いたとされ、陵墓は堺市の百舌鳥古墳群（もずこふんぐん）にある大仙（大山）古墳とされている。

檳榔（あじまさ）

現代語ではピロウと呼ばれる。学名はLivistona chinensis。ヤシ科の常緑高木。ピンロウと混同されることがあるが別種である。東アジアの亜熱帯に分布し、日本列島での北限は福岡県沖ノ島である。

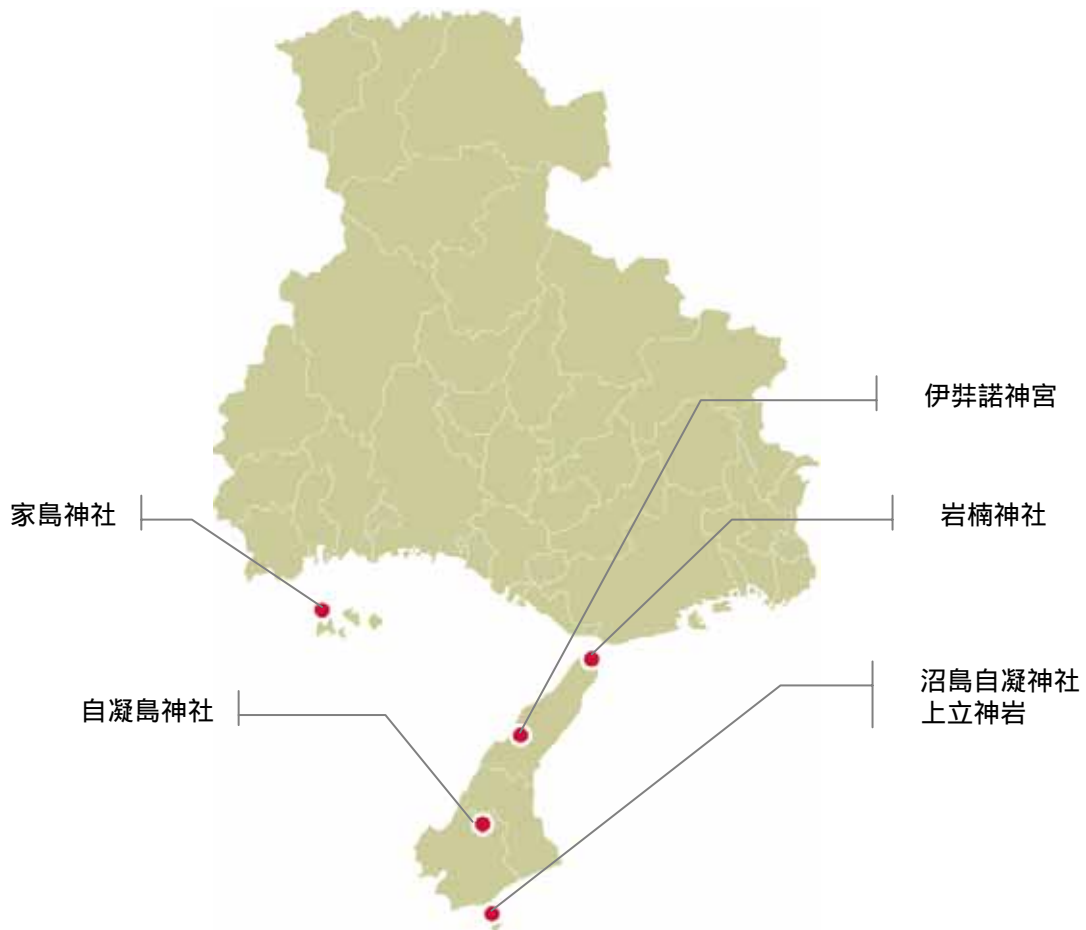
古代には神聖視された植物で、現在でも、大嘗祭（だいじょうさい：天皇が即位した後初めておこなう、その年の収穫に感謝する祭祀（さいし））においては、天皇が禊（みそぎ：身を清めるための儀式）をする百子帳（ひやくしちよう：祭祀をおこなうための小屋）の屋根材として用いられている。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	古事記物語	1988	高野正巳	ポプラ社
	少年少女古典文学館第一巻 古事記	1993	橋本治	講談社
歴史・文化	家島群島 家島群島総合学術調査報告書	1962	家島群島総合学術調査団編	神戸新聞社
	日本古典文学大系67 日本書紀 上	1967	坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注	岩波書店
	日本思想体系1 古事記	1982	青木和夫・石母田正・佐伯有清 校訂	岩波書店
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	扇 - 性と古代信仰 -	1984	吉野裕子	人文書院
その他	原色日本植物図鑑木本編	1979	北村史郎・村田源	保育社



## 所在地リスト



家島神社	姫路市家島町宮991
岩楠神社	淡路市岩屋925
伊弉諾神宮	淡路市多賀740
自凝島神社	南あわじ市榎列下幡多415
沼島自凝神社	南あわじ市沼島73
上立神岩	南あわじ市沼島

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏  
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館  
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日

ひょうご

—神と仏—

伝説紀行

大猪と狩人忠太  
ほら穴にかがやく本当の姿

松帆神社の曲がり松  
神様たちの待ちぼうけ

春日の鹿と八幡の牛  
室津と生穂の村ざかい

伝説

大猪と狩人忠太

ほら穴に輝く本当の姿

松帆神社の曲がり松

神様たちの待ちぼうけ

春日の鹿と八幡の牛

室津と生穂の村ざかい

紀行

暮らしとともに・淡路の神様、仏様

・松帆神社の曲がり松

・生穂賀茂神社と室津八幡神社

・信仰を集めた先山

・歴史を伝える社寺と恋の森

関連情報

用語解説

参考書籍

所在地リスト

歴史博物館ネットミュージアム

ひょうご歴史ステーション

## 大猪と狩人忠太

### ほら穴にかがやく本当の姿

今から千年以上も前の、延喜（えんぎ）元年のことです。播磨国（はりまのくに）に、かりうどの忠太（ちゅうた）という男が住んでいました。たいそうな弓の名人で、毎日のように山へ入っては、たくさんのえものをもって暮らしておりました。

ある日のことです。いつものように、忠太がえものを肩から下げて山を下りてくると、仲間のかりうどに出会いました。

「おい忠太、おまえ、上野の山おくに大猪（おおいのしし）が出るちゅう話を聞いたか」

「いいや、そんな話は知らん。大体、どれくらい大きいんや」

「うわさで聞いたんやけど、身のたけが三十尺もあって、山みたいに大きいそうや。なんでも背中にはササがびっしりはえとるらしい。あんまりおそろしいて、近寄ることもできへんのや」

その大猪の名は、「いざさ王」というのでした。いざさ王は里へ下りてきては田畑をあらし回るので、上野の人たちは困り果てているということです。それを聞いて、忠太は大喜びしました。近ごろますます上達し、ねらったえものはにがさない弓のうで前を、その怪物（かいぶつ）相手にためしてみたかったです。忠太はさっそく、上野の里へ出かけてゆきました。

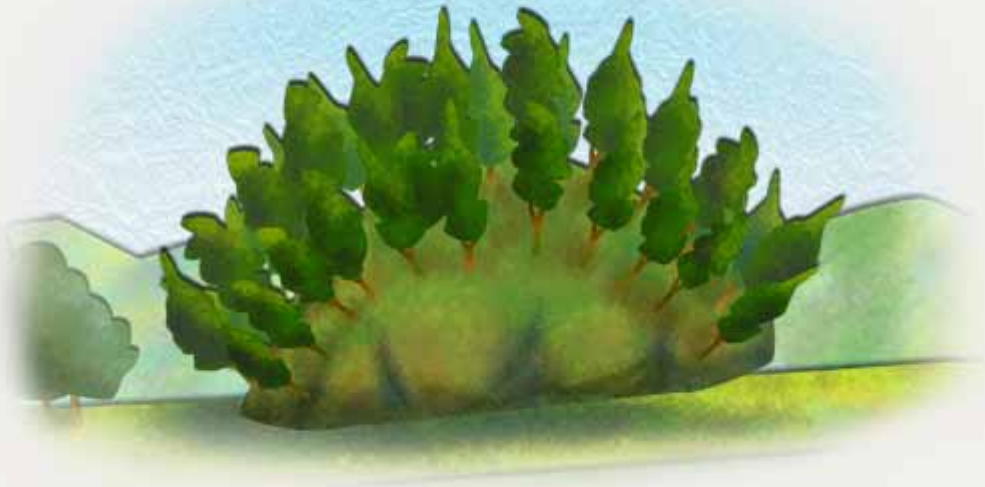
山おくへと分け入って待ちかまえていると、やがてはるか遠くから、ごおーっという山鳴りのような音がひびいてきました。これこそいざさ王にちがいありません。忠太は矢をつがえて待ち構えました。

しかし現れたいざさ王を見て、さすがの忠太もきもをつぶしました。背中に生えた木やササがごうごうとゆれて、まるで山全体が動いているみたいです。けれども忠太が必死の思いで放った矢は、大猪の胸にぐさりにつきさりました。

ところがいざさ王はびくともしません。そのまま南へ南へと、ものすごい勢いで走ってゆきます。「にがすものか」と、忠太もけんめいに後を追いかけてきました。







やがて海へ出ると、いざさ王はそのまま海に飛びこんで泳ぎはじめました。そして播磨灘（はりまなだ）を横切り、鹿ノ瀬（しかのせ）もこえて、とうとう淡路島（あわじしま）まで泳ぎ着いてしまいました。忠太も船に乗って、いざさ王の後を追います。

いざさ王はそのまま走り続けて、とうとう先山（せんざん）の頂上にまでたどりつき、そこでふっとかき消すように見えなくなってしまいました。

忠太もその後を追って、山の頂上にやってきました。見ると、矢がささった傷口からこぼれたらしい血のあとがあります。血のあとは、山頂近くにある大きな杉の木の、根元に開いたほら穴まで続いていました。

「ははあ、あの中にかくれたな」

忠太はもう一度矢をつがえると、足音をしのばせながらほら穴へと近づいてゆきました。ところが、暗いはずのほら穴の中が、明るくかがやいています。おまけに、手の力がぬけてしまって、どうやっても弓を引きしぼることができません。一体どうしたことだとおどろいているうちに、忠太は、何かに引きよせられるようにほら穴の中へと入ってゆきました。

「あっ」

忠太は思わず、手にしていた弓矢を投げ出すと、その場にひれふしてしまいました。ほら穴のおくには、千手観音（せんじゅかんのん）様の像が立っていて、その胸元に、忠太の矢が深々とつきささっているではありませんか。忠太は真っ青になり、ぶるぶるふるえだしました。人々を救ってくださる観音様を、よりによって弓で射るとは、何ということでしょう。

「ああ、これは日ごろ鳥やけものの命をうばっている私に、殺生（せっしょう）はいけないことだと、観音様が身をもって教えてくださったのだ。何とおそれ多いことだろう」



忠太は、これまでたくさんの鳥やけものの命をうばったことを、心から悪かったと思いました。そこでさっそく出家し、名前も寂忍（じゃくにん）と改めました。そしてこの観音様をお祭りすることにしました。

忠太の話は、都の醍醐天皇（だいごてんのう）にまで聞こえました。このありがたい話を聞いた天皇は、さっそく、先山の頂上に大きな寺を建てて、千手観音様を祭るように命じました。これが、先山千光寺の始まりだということです。

さて、播磨に残された忠太の家族は、いつまでたっても帰ってこない忠太をさがして、淡路島までやってきました。しかし忠太は、家族に会おうともしなかったそうです。先山の近くまで来ながら、会えないことを悲しんだ忠太の子供は、そこにあった石の上に上って先山の方に向かい、父の名をよび続けました。やがてその石が二つに割れてしまったので、今でも、その土地は、「二つ石」と呼ばれているということです。

大猪と狩人忠太 ほら穴にかがやく本当の姿

おわり

## 松帆神社の曲がり松 神様たちの待ちぼうけ

古くから、十月のことを「神無月（かなづき）」と呼んでいます。なぜかという、日本中の神社にいる神様が、この月だけはそろって出雲国（いずものくに）にある出雲大社（いずもたいしゃ）に集まって、一年のことを話し合われるため、どこの神社でも神様がいなくなってしまうからです。日本中から神様が集まる出雲国では、「神無月」といわずに「神在月（かみありづき）」と呼んでいるそうです。



「ああ、また出雲へ出かける神無月になったなあ」

ある年のこと、淡路島（あわじしま）にある松帆神社（まつほじんじゃ）の八幡様（はちまんさま）は、うれしそうにつぶやきました。神無月には、島中の八幡様が集まって、いっしょに出雲まで出かけることになっていました。松帆神社の八幡様は、いつもは見られない景色を見たり、あちこちの神様と話ができるので、この旅をとても楽しみにしていたのです。

やがて出発の日がやってきました。淡路のあちこちから集まってきた八幡様たちは、二人、三人と連れだって浦（うら）の港へ集まってきました。岩屋の八幡様は、みんながそろったかどうか見回していましたが、松帆の八幡様が見えないようです。

「おやおや、松帆の八幡様はまだおこしではないようです。私が行って呼んでみましょう」

そう言ってかけだしていった岩屋の八幡様のあとを、ほかの八幡様たちもぞろぞろとついてゆきました。



「松帆の八幡様、もうみんなそろっておりますよ。そろそろお出まし下さい」

呼びかけられて、松帆の八幡様は顔を出しました。

「おやみなさま、もうお集まりでしたか。私もさっそく準備しますから、しばらくお待ち下さい」

松帆の八幡様はそう言って、おくへ入って行きました。ところがお社の中からは何かことごと、がたがたと音がするのですが、松帆の八幡様はなかなか出てきません。ほかの八幡様たちはだんだんと待ちくたびれてきました。

「やれやれ、まだだいぶんかかりそうだな」

「しばらくこしかけて休んでいよう」

八幡様たちは、境内にある松の木の枝にこしを下ろして休みました。あんまり長い間、こしを下ろしていたものですから、枝はじわじわと曲がりはじめ、とうとう地面をはうように曲がってしまいました。

それで、松帆神社の松の木は、「曲がり松」と呼ばれるようになったのだそうです。



松帆神社の曲がり松 神様たちの待ちぼうけ  
おわり

## 春日の鹿と八幡の牛 室津と生穂の村ざかい

むかしむかし、淡路島（あわじしま）の室津（むろつ）の村と、となりの生穂（いくほ）の村は、境がはっきりしていませんでした。村と村との境がはっきりしていないと、何かと不便なことや争いごとがおこったりします。室津にいらっしゃった八幡様（はちまんさま）は、どうにかして村境をはっきりさせたいと考えました。

「室津の村ができるだけ広い方がいいなあ」

八幡様は、生穂の春日大明神（かすがだいみょうじん）と相談して、村境を決めるのがよかろうと思い立ちました。

そこである日、八幡様は生穂の春日大明神を訪ねて、こんなふうにご相談しました。

「同じ日の同じ時刻に室津と生穂から出発して、出会ったところを村境にするというのはどうでしょう」

「それはよい考えですね」

「春日大明神は鹿（しか）に乗って、私は牛に乗ってでかけるということで、いかがでしょう」

「そうしましょう」

その翌日、ちょうどお日様が頭の真上にやって来たとき、二人の神様はそれぞれに出発しました。春日大明神が乗った鹿は、身軽に、どんどん走って行きます。急な山道もぴょんぴょんと飛ぶようです。一方の室津の八幡様が乗った牛は、なんともゆっくりと歩いて行きました。坂道にさしかかると、ますますゆっくりです。

とうとう大坪（おおつぼ）の坂を登り切らないうちに、春日大明神と出会ってしまいました。



「しまった、これでは室津の村が何ともせまくなってしまおう」  
そう思った室津の八幡様は、春日大明神にたのみこみしました。  
「たいへんもうしわけないのですが、もう一回やり直しにしてくれませんか」  
「やり直しですか。構いませんよ。今度はどうしましょうか」

春日大明神が、そう言ってくれましたので、室津の八幡様はこんなふうに言いました。

「今度は、室津から矢を放って、それがつきささったところを村境ということにしてくれませんか」  
そういうわけで、また別の日。今度は室津から矢を射ることになりました。今度こそと考えた室津の八幡様は、ものすごく大きな弓と矢を探し出しました。やってきた春日大明神もびっくりするほど大きな弓です。

その弓に矢をつがえて、室津の八幡様はぐうっとひきしぼりました。顔を真っ赤にしなが、うんうんと弓を引きしぼった八幡様は、「えいっ」とばかりに矢を放ちました。矢はぐんぐんと飛んでいって、大坪の坂をこえ、三笠松（みかさまつ）のある釈迦堂（しゃかどう）にぐさっとつきささりました。前よりもずっと広がったので、室津の八幡様は大満足です。

「無理なお願いを聞いてくださって、ありがとうございました。そのお礼に、これからは、室津にあるものでも、春日大明神様がお望みのものは差し上げるようにいたします」

そういうわけで、毎年六月のお祭りには、生穂の人が大勢室津のはまにやってきて、潮浴びをしたり、その後で木の枝をとってたきぎを作ったり、はまにある石を生穂に持って帰ったりするようになったということです。



春日の鹿と八幡の牛 室津と生穂の村ざかい  
おわり



## 紀行「暮らしとともに・淡路の神様、仏様」

いつも村にいる神様や仏様は、人々のそばにいて困ったときは助けてくれ、時には身をもって人々を教え導いてくれるものだ。時にはあわてて大失敗をすることもあっても、だれからも親しまれ、敬われる存在だ。今回、淡路島から取り上げた物語も、そんな神様・仏様の物語であった。

### 松帆神社と曲がり松



鳥居から門を見る

宮司（ぐうじ）さんのお話では、伝説の曲がり松は枯れてしまったという。ついうっかりしてい

て、どこにあったものか聞きそびれてしまったが、境内にはいくつか切り株もあったから、そのひとつが曲がり松だったのだろう。『兵庫県大百科事典』下巻の松帆神社の項を見ると、門前の広場に、地をほうように曲がった松の幹が写った写真が掲載されている。

海が穏やかな日には、門前の松の木に腰かけて、のんびりと景色をながめていたい。そんな気持ちにさせてくれる場所である。松帆神社は、応神（おうじん）・仲哀（ちゅうあい）の両天皇と神功皇后を祭神としており、明治初めごろまでは八幡宮と呼ばれていたという。

明石海峡（あかしかいきょう）にかかる大橋を、わずか数分で渡り終えると淡路島である。そこから国道28号線に降り、東海岸に沿って7kmほど南下したところに松帆神社（まつほじんじゃ）がある。松の若木がまっすぐに伸びる境内には明るい日光が降り注ぎ、潮風が通りすぎてゆく。



松帆神社（境内）



松帆神社（拝殿）



松帆神社（本殿）



松帆神社（看板）



狛犬ではなく亀



亀に耳がある？

### 生穂賀茂神社と室津八幡神社

松帆神社からさらに15kmほど南下すると、生穂の集落である。生穂の交差点で、国道28号線から県道123号津名北淡線に入り、500mほど山側へ入った場所にあるのが賀茂神社である。

高台にある境内からは、村の周辺が広く見渡せる。東には海が開け、西は山地にさえぎられた、淡路の東浦（ひがしうら）らしい、いかにものどかな風景が連なっている。

由緒略記によると、この地域に京都上賀茂神社の荘園が置かれていたことから、賀茂神を祭るようになったという。後にはこれに加えて、白鬚神（しらひげのかみ）、貴船神（きふねのかみ）、伝説にある春日神（かすがのかみ）などを合わせ祭ったため、四社明神とも呼ばれるようになったということなので、伝説で取り上げた春日の神様も、元は別の場所でお祭りされていたのだろう。

賀茂神社の裏山は、雨乞山（あまごやま）と呼ばれ、干ばつの年には頂上で火を焚いて雨乞いをするそうである。こちらの方は、水の神様である貴船神の仕事ということになるだろうか。



生穂賀茂神社（鳥居）



生穂賀茂神社（本殿）



生穂賀茂神社（看板）



願いが叶う石

賀茂神社の前から県道123号線を北西に進むと、やがて淡路島の中央をはしる山地にさしかかる。道幅が狭い所も多い。この山地のために、淡路島の東部と西部は、そう遠いわけではないのに交通は不便である。道も整わない時代であれば、春日の神様を乗せた鹿なら身軽に越えられただろうが、八幡様を乗せた牛では、少々息切れしたかもしれない。



室津八幡神社（本殿）

その室津八幡神社（むろつはちまんじんじゃ）は淡路市室津にある。室津の港から、まっすぐに100mほど続く石畳の参道を入ると、西に向けたまだ新しい社殿が建っている。1995年の震災で大きな被害を受けた後、再建されてまだ日が浅いとのことである。



門をくぐる

八幡神は、本来は「やはたのかみ」と読み、農耕の神、海の神、あるいは鍛冶（かじ）の神とされているようだ。後には応神天皇が祭神とされ、さらには神仏習合の流れの中で「大菩薩」と呼ばれるようになったそうだが、伝説に出てくる八幡様は、土地に根を下ろした、古い神様の姿をとどめているように思える。



室津八幡神社（門）

境内から見ると、鳥居の先には港に並んだ船、その先には瀬戸内海が見渡せる。ことに夕焼けの時間には、とてもきれいな景色が見られる場所である。村境を決めるといふ、どちらかという「利」に関係した話でありながら、とてもユーモラスに、争いごともなく描かれた伝説は、淡路という穏やかな風土に似合ったお話だと、夕日を見ながら思った。



夕暮れの海を望む

## 信仰を集めた先山



先山

先山は、洲本市（すもとし）の北西にある。標高は448m、優美な山容から「淡路富士」とも呼ばれているようで、千光寺はその山頂にある。ふもとからはいくつかの登山道があると思うのだが、伝説紀行の取材では車で登らせてもらった。洲本市下内膳（しもないぜん）の村を抜けると、あとは山を登る道で、さしたる難所もなく頂上直下の茶店近くまで行くことができる。

そこからは徒歩で、けっこう長い階段を登らねばならない。



階段を上る



境内へ



三重塔



鐘楼

深い朱色に塗られた門をくぐると、木立に囲まれた静かなたたずまいの三重塔が目に入る。江戸時代に建てられたものである。その奥の本堂前には、狛犬ではなく石造りの猪が左右を守っているが、これは他では見られない風景ではないだろうか。



狛犬ではなく猪

鎌倉時代の隆盛から、戦乱での荒廃を経て16世紀中ごろ以降に復興した千光寺は、淡路西国三十三箇所第一の札所となり、また六十六部廻国納経（かいこくのうきょう）の霊地としても繁栄したそうである。室町時代に描かれた「千光寺参詣曼荼羅（せんこうじさんけいまんだら）」には、立派な本堂や三重塔のほかにも多数の建物が見られ、寺の繁栄がしのばれる。その曼荼羅の隅には、大きな木の洞に立つ千手観音が描かれている。

千光寺の縁起となった「大猪と狩人忠太」の話は、淡路の人々には深く浸透したお話で、千光寺だけでなく周辺にも、この伝説に関わる地名が残されているという。人々が毎日仰ぎ見る山は、信仰の山であると同時に、身近な土地の歴史を語るためになくてはならない心の故郷だったのではないだろうか。



千光寺からの眺望



千手観音の大提灯



日本真景播磨・垂水名所図帖



淡路名所図絵



## 歴史を伝える社寺と恋の森



広田八幡神社  
(鳥居)



広田八幡神社 (境内)



広田八幡神社 (看板)



淡路名所図絵

千山から3kmほど南の、南あわじ市広田広田には、広田八幡神社と大宮寺がある。源頼朝が平氏追討の戦勝祈願のために、現在の西宮市にある広田神社へ、淡路の広田荘を寄進したことが起源となったという広田神社は、大宮寺とともに『淡路名所図会(あわじめいしよずえ)』にも描かれている。



縄騒動の碑



大宮寺 (本堂)



大宮寺 (看板)

その大宮寺の裏山には、江戸時代、淡路で起きた最大の一揆である「天明の縄騒動」に殉じた人々を供養する塔がある。首謀者とみなされた二人は処刑されたが、今もこの場所では、命日である3月23日に、天明志士大祭が営まれているそうである。背後の山には、淡路島一という広田梅園もあるので、花の季節にはぜひ一度訪ねてみたいと思う。

広田八幡神社と大宮寺から、400mほど南にある恋の森荒神には、伝説としては少し異色の、ロマンチックな物語が伝わっている。



恋の森



仲良く並んだ祠

今でこそ住宅地の一角になってしまっているけれど、かつてこのあたりには森が広がり、そこで仲良く遊んでいた男の子と女の子が、やがてめでたく結ばれて、末永く幸せに暮らしたという伝説から、いつしかこの場所は「恋の森」と呼ばれるようになったという。新婚の夫婦が荒神へお参りすれば末永く幸せに過ごすことができ、もしも夫婦仲が悪くなった時には、この荒神さまの前でむつまじく語り合えば、もとの恋人同士に戻れるとも伝えられている。

伝説や荒神様の起源はわからないようだが、幸せをもたらす「恋の森」として、地元の人々は大切に守り続けている。伝説にあやかりたい人はいませんか。



恋の森神社  
(鳥居)



恋の森神社  
(看板)



## 用語解説

### 松帆神社（まつほじんじゃ）

淡路市久留麻（くるま）に所在する神社。祭神は応神天皇、仲哀天皇、神功皇后。社伝では、楠木正成が湊川の合戦で戦死した際、家臣が正成の守護神である八幡大神を久留麻の地に祭ったのが始まりと伝える。明治14（1881）年に松帆神社と改称した。宝物として、後鳥羽上皇（1180～1239）の時代に皇室刀鍛冶筆頭であった福岡一文字則宗（ふくおかいちもんじのりむね）の「菊一文字」（国指定重要美術品）、伎楽面ほか多数を蔵する。

### 応神天皇（おうじんてんのう）

『日本書紀』によれば第15代の天皇。仲哀天皇（ちゅうあいてんのう）の皇子で、母は神功皇后とされる。名は誉田別命（ほむたわけのみこと）。記紀によれば在位は41年で、西暦310年に111歳あるいは130歳で没したとされる。伝説的色彩の強い天皇であるが、『宋書』の東夷伝に見える倭王讃（さん）を、応神天皇にあてる説がある。陵墓は大阪府羽曳野市（はびきのし）に所在する、誉田御廟山古墳（こんだごびょうやまこふん）に比定されている。誉田御廟山古墳は、全国で第2位の、全長425mを測る前方後円墳で、築造は5世紀前半と考えられている。

### 仲哀天皇（ちゅうあいてんのう）

記紀によれば第14代の天皇で、没年は西暦200年。陵墓は、大阪府藤井寺市の岡ミサンザイ古墳（前方後円墳、全長242m）に比定されている。記紀ではヤマトタケルノミコトの子とされているが、記載された没年と年齢から計算すると、父の死後36年を経て誕生したことになる点、名の「タラシナカツヒコ」に用いられる「タラシ」が、7世紀代に実在した天皇の名にも用いられている点などから、架空の天皇とする説もある。

### 神功皇后（じんぐうこうごう）

『日本書紀』によれば、第14代仲哀天皇（ちゅうあいてんのう）の皇后。名を息長足姫尊（おきながたらしひめのみこと）という。仲哀天皇の死後、これに代わって朝鮮へ出兵して、新羅を討ち、百済・高句麗を帰服させたとされるが、これは日本を大国として位置づけるための架空の説話である。

### 生穂賀茂神社（いくほかもじんじゃ）

淡路市生穂（いくほ）に所在する神社。生穂に京都の上賀茂神社の荘園が置かれていたことから、当地でも賀茂神（かものかみ）が氏神として祭られるようになったとされている。後に、春日神（かすがのかみ：智神）、貴船神（きぶねのかみ：水神）、白鬚神（しらひげのかみ：土神）も祭られるようになったことから、四社明神とも呼ばれて崇敬が厚い。

### 上賀茂神社（かみがもじんじゃ）

京都市北区上賀茂に所在する式内社（しきないしゃ）。正式名称は賀茂別雷神社（かもわけいかずちじんじゃ）。山城国一宮。賀茂御祖神社（下鴨神社）とともに、古代賀茂氏の氏神（賀茂別雷大神）を祭る。葵祭（あおいまつり）は京都三大祭の一つとして有名。桓武天皇（かんむてんのう）が平安京に遷都して以来、都を守る神として祭られてきた。神社としては伊勢神宮に次ぐ地位にある。

## 用語解説

### 荘園（しょうえん）

奈良時代から戦国時代まで存在した、田地を中心とした私有地。所有者は、主として貴族や寺社で、政治的地位を有する者であった。現在、文献で知られる荘園は4,000か所近くあり、東北地方から九州地方まで分布するが、特に近畿地方に集中している。

### 八幡神（はちまんしん）

農耕神または海の神とされている。総本社は大分県宇佐市の宇佐神宮（宇佐八幡宮）であるが、全国に数千の神社があり、稲荷社に次ぐ信仰を集めている。元は宇佐地方一円にいた大神氏（おおみわし）の氏神であったとも考えられているが、現在では、応神天皇、神功皇后、比売神の3神を合わせて八幡神（八幡三神）として祭られている。

### 先山（せんざん）

洲本市北西にある山。標高は448m。その山容から、淡路富士とも称される。山頂には千光寺が建つ。江戸時代の画家、谷文晁（たにぶんちょう）の『名山図譜』にも描かれるなど、古くから知られる山である。シイ、カシなどの暖帯樹林に覆われ、この山系にのみ生息する昆虫も知られている。

### 千光寺（せんこうじ）

洲本市上内膳（かみないぜん）の、先山山頂に所在する真言宗の寺院。先山（せんざん）と号する。本尊は千手観音。寺伝によれば、平安時代延喜元（901）年の開基とされ、縁起として狩人忠太と大猪の伝説が伝えられている。このほか『淡路通記（あわじつうき：17世紀末成立）』には、性空上人（しょうくうしょうにん）、役小角（えんのおづぬ）やイザナギ・イザナミにまつわる伝承が記録されている。境内の鐘楼にある鐘は、弘安6（1283）年の銘をもち、重要文化財に指定されている。

### 札所（ふだしょ）

仏教の霊場で、参詣したしるしに札を受けたり、納めたりするところ。西国三十三箇所、四国八十八箇所など。

### 六十六部廻国納経（ろくじゅうろくぶかいこくのうきょう）

法華経を書写し、全国の66か国の霊場に1部ずつ納経する巡礼行。この巡礼に従事する行者を六十六部行者、廻国聖（かいこくひじり）などと呼ぶ。鎌倉時代末から室町時代にかけて流行した。兵庫県下でも、神戸市北区淡河町（おうごちょう）の勝雄経塚（かつおきょうづか）で、経巻を入れた金銅製の経筒が発掘されている。

### 広田八幡神社（ひろたはちまんじんじゃ）

南あわじ市広田広田に所在する神社。祭神は応神天皇。寿永3（1184）年、平家追討中の源頼朝が摂津の広田社（西宮市）に広田荘を寄進し、戦勝を祈願したことに始まるという。神社は明治32（1899）年に失火で全焼し、現在残っている社殿は4年後に再建されたもの。隣接して広田梅林があり、観光地となっている。

### 大宮寺（だいぐうじ）

南あわじ市広田広田に所在する真言宗の寺院。広林山（こうりんざん）と号する。本尊は阿弥陀如来。開基は不詳であるが、安土桃山時代に中興された。かつては末寺や奥の院も有していたとされ、奥の院跡からは、平安時代末期の瓦が出土している。

## 用語解説

### 源頼朝（みなもとのよりとも）

鎌倉幕府初代将軍（1147～99）。源義朝（よしとも）の三男。平治の乱で敗走する途中捕らえられ、伊豆へ流された。その後、以仁王（もちひとおう）の令旨により挙兵し、一度は敗れたものの関東地方の武士の支持を受け、鎌倉で政権を樹立した。のち、源範頼（のりより）・義経（よしつね）らを大将として、源義仲（よしなか）、平氏一門を討って京都を確保した。平氏滅亡後は、院に接近していた義経を追い、その追捕を理由として諸国に守護・地頭を置いて政権を確固たるものとした。1192年、征夷大将軍に任ぜられた。

### 淡路名所図会（あわじめいしよずえ）

18世紀末～19世紀初めに制作された名所図会。当時の名所旧跡、寺社などが描かれた肉筆本である。編者は不明。淡路の名所を記した書物としては、暁鐘成（あかつきのかねなり）が編纂した『淡路国名所図絵』（1851）が知られているが、本書は内容が全く異なる。当時の景観などを知る上で重要な資料。

### 天明の縄騒動（てんめいのなわそうどう）

天明2（1782）年に起こった淡路島最大の農民蜂起。当時淡路を領していた徳島藩が出した「増米法」と「木綿会所法」によって、農民は生活を圧迫されていた。ここへさらに、洲本の藩庁役人が出した縄を供出させて大坂で販売するための法を出したため、合計12か村の農民が、下内膳村の組頭庄屋であった広右衛門方へ押し寄せて、法の廃止を陳情した。これに対して徳島藩は縄供出の法などを廃止し、藩の責任者を処分したが、一揆（いっき）の首謀者も捕縛され、広田宮村の才蔵と山添村の清左衛門は打ち首となった。この両名の供養碑は、島内に4基が残されており、大宮寺境内には事件の記念碑がある。

### 荒神（こうじん）

「猛々しい神」の意味をもつ言葉であるが、同時に靈験ある神をも指す。また、三宝荒神（さんぼうこうじん：仏教の三宝（仏・法・僧）を守護する神）を指す。三宝荒神は不浄を忌み、火を好むとされることから、近世以降はかまどの神として祭られた。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話淡路篇	1972	郷土の民話淡路地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	兵庫の伝説	1980	兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
	あわじの昔ばなし	1985	濱岡きみ子	神戸新聞出版センター
歴史・文化	兵庫のふるさと散歩6 淡路編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
	日本考古学小辞典	1983	江坂輝彌・芹沢長介・坂詰秀一編	ニューサイエンス社
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	神戸市北区勝雄経塚 - 山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXV -	1997	兵庫県教育委員会	兵庫県教育委員会
	長澤誌 - 今に生きる先人のぬくもり -	2004	濱岡きみ子	長沢町内会
	津名の文化財	2005	津名町	津名町
その他	賀茂神社由緒略記	不詳	生穂賀茂神社	生穂賀茂神社
	自凝島神社由緒略記	不詳	自凝島神社	自凝島神社
	原色日本植物図鑑木本編	1979	北村史郎・村田源	保育社



## 所在地リスト



先山・千光寺	洲本市上内膳2132
広田八幡神社	南あわじ市広田広田1034
恋の森荒神	南あわじ市広田広田300付近
大宮寺	南あわじ市広田898
松帆神社	淡路市久留麻257
室津八幡神社	淡路市室津1860
生穂賀茂神社	淡路市生穂2505

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏  
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館  
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日

ひょうご

—神と仏—

伝説紀行

とびはねた薬師様  
火中の命びろい

追手の神と鐘ヶ坂  
鐘の行方と、鶏とシイの実

伝説

とびはねた薬師様  
火中の命びろい  
追手の神と鐘ヶ坂  
鐘の行方と、鶏とシイの実

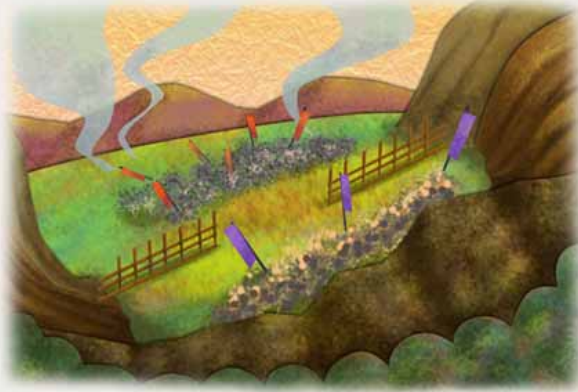
紀行

丹波に残された神仏の記憶  
・豊林寺と櫛岩窓神社  
・街道の面影を残す大山宮  
・鐘ヶ坂から苅野神社へ

関連情報

用語解説  
参考書籍  
所在地リスト

## とびはねた薬師様 火中の命びろい



今から500年ほど前のことです。篠山（ささやま）は、細川氏の領地でした。

ところが、但馬（たじま）の方から山名氏が大ぜいせめてきました。細川方は、じりじりとおわれて、とうとう村雲（むらくも）の笹見（ささみ）の谷においつめられてしまいました。

細川方は、さいごの力をふりしぼって戦いましたが、どうすることもできず、うち死にしてしまいました。近くの徳雲寺（とくうんじ）や清大寺（せいだいじ）、三前寺（さんぜんじ）、多聞寺（たもんじ）や民家までも焼かれてしまいました。どす黒い煙（けむり）が、もうもうと空をおおってうす暗くなりました。

人々は、わずかなにもつをもって、山の中へにげこみました。火は大芋（おくも）の豊林寺（ぶりんじ）の方までもえ広がっていきました。

村人たちは、どうすることもできず、あれよあれよと見るまに、豊林寺の境内にあった十九のたてものが、つぎつぎともえてしまいました。本堂で大切にされてきた観音さんや、阿弥陀さんもみんな灰になってしまいました。

ところが、お薬師さんをおまつりする常住坊（じょうじゅうぼう）の方から、  
「うっ、うっ、ううっ」  
と、苦しそうなうめき声が聞こえてきます。だんだん火が近づいてきたのです。





お薬師さんは、火が近づくと、  
「あちっ、あちっ、ちっちちっ」

と大声をたてられながら、きゅうにぱっととびはねて、お堂の前の池へざぶうんと、おはいりになりました。水しぶきがとびちりました。

お薬師さんは、何事もなかったような顔で、  
「ああ、あつかった。あつかった」  
と、何べんもおっしゃいました。



いく日かたったある日、村人たちは、やけこげて灰になったお寺をながめていましたが、あとかたづけをする気にならず、立ちつくしていました。

と、そのとき、村人の一人が大声で  
「あっ、お薬師さんが、お薬師さんがごぶじでおられる」  
と、さげびました。

その声におどろいた村人たちが、池の中に見たものは、あの常住坊におまつりしてあったお薬師さんだったのです。

「ああ、よかったよかった、ありがたいことや」  
と、お薬師さんのかわらないお姿を見て、みんな心からよろこび合いました。

そのお薬師さんは今も、何事もなかったようなお顔で、豊林寺の薬師堂におまつりされています。そして、私たちを見まもっておられるのです。

<引用元>

『丹波（篠山市・丹波市）のむかしばなし 第六集』より

「とびはねた 薬師さん」

著者：中野卓郎

編集：丹波（篠山市・丹波市）のむかしばなし編集委員会

発行：（財）兵庫丹波の森協会 2006年

とびはねた薬師様 火中の命びろい

おわり

## 追手の神と鐘ヶ坂 鐘の行方と、鶏とシイの実

ずーっと昔のことです。

丹波（たんば）の大山（おおやま）あたりを、鐘（かね）をかかえて走ってゆく神様と、それを追いかけて走ってゆく神様がありました。先に走っている神様は、鐘をぬすんでにげてゆくところで、後の神様は、鐘を取り返そうと追いかけているところでした。



二人の神様はすごい勢いで走っていましたが、そのうちにすっかり日が暮れて、あたりは真っ暗になってしまいました。もう足元も見えないほど真っ暗で、走ることもできません。

追いかけていた神様は、仕方なく、村はずれにすわりこんでしまいました。ところがあまりに走りすぎてつかれていたのか、そのままうとうとねむりこんでしまったのです。

鐘をぬすんだ神様の方は、山をこえて走っていましたが、坂道を下りかけたとちゅうでやっぱり日が暮れてしまい、仕方なくそこでひと休みすることにしました。

鐘をそばに置いて、神様はごろんと横になり、そのままぐうぐうとねむりこんでしまいました。やがて東の山に大きな月が上って、あたりが明るくなると、鐘をぬすんだ神様は目を覚ましました。

「やあ、大きな月がでたなあ」

そう言って見上げたたん、運悪く、そばにあったシイの木からひとつぶの実が落ちてきて、神様の目にあたったのです。痛くて痛くて、とても目を開けていられません。神様はせっかくぬすんだ鐘を置いたまま、坂を下ってにげてゆきました。そんなわけで、今もこの坂を「鐘ヶ坂」と呼んでいます。



一方、追いかけていた神様は、にわたりの声におどろいて目を覚ましました。あたりを見回してみると、もうすっかり夜が明けて、太陽がさんさんと照っています。

「しまった。これではもう遠くまでにげられてしまっただろう」

追っ手の神様は、鐘を取り返すのをあきらめて、その場所に留まることにしました。それが今の、久保谷にある追手神社（おうてじんじゃ）だということです。

一方、鐘を置いたままにげていった神様は、氷上郡の小倉（おぐら）へ降菟野神社（かりのじんじゃ）にお祭りされています。

こんなことがあったので、追手神社の村では、にわたりを飼ってはいけな  
ないといわれ、一方の菟野神社のある村では、にわたりを食べてはいけ  
ないということになったそうです。

そうそう、それから、神様の目に実を落っことしたシイの木には、それ  
からずっとひとつぶの実もならないということです。



追手の神と鐘ヶ坂 鐘の行方と、鶏とシイの実  
おわり



## 紀行「丹波に残された神仏の記憶」

丹波というと、山里の印象が強い。丹波の朝霧や美しい紅葉、ぼたん鍋など、山に関わるものがまず思い浮かぶ。土の香りがするような、ひなびた山里。今回の伝説紀行は、そんな場所を巡ることになった。

### 豊林寺と櫛岩窓神社



櫛岩窓神社  
(鳥居)

杉木立の中の  
社殿

豊林寺(ぶりんじ)は篠山盆地(ささやまぼんち)の北東部、京都府との境界からそう遠くない、篠山市(ささやまし)福井にある。豊林寺へ行くには、まず櫛岩窓神社(くしいわまどじんじゃ)を目標にするといいだろう。篠山の市街地を離れ、盆地の中央を流れる篠山川に沿って国道173号線を北上する。道の両側には水田が開けているが、その先には穏やかな里山が連なっている。やがて進行方向の右手、道のすぐ南側に、スギやヒノキの大木がつくる大きな森が見えてくる。これが櫛岩窓神社である。



櫛岩窓神社(拝殿)



櫛岩窓神社(看板)



豊林寺城と麓の村



平坦な山頂

鳥居をくぐり広い境内を進むと、やがて拝殿に至る。たいていの神社ならば、拝殿のすぐ裏に本殿があるのだが、塀をめぐるせたその上から中を拝見すると、広々とした空間の奥に本殿が見える。

本殿の背後には、ご神体として祭られている山がある。高さが20~30mほどの小さな山で、頂上付近には3個の巨岩があるそうだ。ご神体の山なので実際に登ることは遠慮したのだが、おそらく「神様が宿る岩」として、はるかな古代から信仰されていたものなのだろう。

櫛岩窓神社は、延喜式(えんぎしき)で名神大社(みょうじんたいしゃ)のひとつとされた由緒ある神社で、「天の岩戸」を開いた櫛岩窓命(くしいわまどのみこと)、豊岩窓命(とよいわまどのみこと)、大宮比売命(おおみやひめのみこと)の三神がお祭りされている。巨岩への信仰が、天の岩戸の神話と結びついてごく自然に祭神となっていく、そんな過程を想像してもいいように思える。三神の姿を刻んだ木像は、いずれも国の重要文化財に指定されていて、僕は写真でしか見たことがないのだが、どの神様もふくよかな顔立ちながら、少し厳しい表情をしておられる。

櫛岩窓神社を出て、正面にある山塊をながめると、不自然に平らに見える山頂が見える。そこが、豊林寺城が置かれた山頂で、豊林寺はこのふもとにある。

「玄溪山(げんけいざん)豊林寺」と刻まれた標柱の左横から、集落の中を通り抜ける道を行くと、谷筋のいちばん奥に豊林寺がある。こけむした石垣と高い木立がお寺を囲み、潤った空気に包まれた静かな場所である。現在、お寺のそばに池はない。境内から少し下った場所には小さな溜池があるので、これが伝説にあった池だろうか。そうだとすると、お薬師様のお堂は、現在の豊林寺よりもずっと下の方にあったのかもしれない。

ご住職にうかがったところでは、現在、豊林寺では薬師如来はお祭りしておらず、この話そのものもほとんど忘れられたものであったという。今回参考にした伝説の原著者である中野卓郎さんによれば、この話は『丹波志(たんぱし)』の中にわずか2行だけ記録されていたものだそうであるから、忘れられた存在だったとしてもうなずける。



豊林寺  
(石碑)

小さな  
仏様が  
立っている



豊林寺(本堂)



豊林寺(境内)



豊林寺(看板)

## 街道の面影を残す大山宮



藁葺き屋根の民家が残る



道の脇に立つ石仏



朝もやが残る  
山と街道

追手神社（おってじんじゃ）は、豊林寺とは正反対の方角、篠山盆地の北西に位置する篠山市大山宮（おおやまみや）にある。現在は国道176号線が交通の動脈になっているが、かつてもここには街道が通り、丹波と摂津を結ぶ交通の要所であった。江戸時代に刊行された『但州湯島道中独案内（たんしゅうゆしまどうちゅうひとりあんない）』にも、この付近の地名が記されているという。

追手神社を訪ねる時には、是非、国道の西側に沿う旧道を歩いてみたい。山すそに沿って緩やかにカーブを繰り返す道をたどると、いかにも街道筋らしい家並みが続き、その間にはわらぶき屋根の家もぼつぼつと混じる。曲がり角に祭られた石仏が、いかにも所を得たものように見えるのは、風景にとけ込んでいるからだろう。

追手神社は、その大山宮の村はずれにある。

広い境内でまず目に入るのは、天を突くような巨大なモミの木である。「千年モミ」とも呼ばれる巨木は、国の天然記念物に指定されている。境内には、これに劣らぬほどのイチヨウの大木もあって、ともにご神木として大切に守られている。

境内の奥に、こぢんまりとした本殿が見える。閑静で質素な、いかにも田舎らしい神社と言ったら叱られるだろうか。夕暮れになり、灯りがともってぼんやりと照らし出された神社を見ていると、巨樹の中で眠っていた神様が、起き出してくるような錯覚にとらわれてしまう。



追手神社（鳥居）



追手神社  
（本殿）



夕暮れが迫る



千年モミ

追手神社の前から、街道筋を700～800mほど北へたどった所に、追入神社（おいれじんじゃ）がある。追手と追入という名からは、二つの神社に何か関係があるように想像されるのだが、具体的なことはよくわからない。ちょうど出会った区長さんにうかがったところでは、追入神社は、かつては村の北東の山腹にあったものを、現在の位置に移動したということであった。



追手神社（看板）



追入神社  
（鳥居）

追入神社では、秋祭りに三番叟（さんばそう）が奉納される。拍子木の音に合わせて舞われる三番叟は、江戸時代に伝えられたものだといわれている。大きな宿場町であったという追入の村には、人々の盛んな往来によって、さまざまな文化も伝えられたのだろう。



追入神社（本殿）



静かな境内



## 鐘ヶ坂から苅野神社へ



峠道の山



峠道



明治の隧道



隧道の傍の仏様

そのまま街道を進み、峠を越えて氷上へと下る坂道が鐘ヶ坂である。この峠越えはかなりの難所であったようで、明治になってからトンネル掘削が計画され、3年近い工事の末、明治16年に完成した。レンガ造りの明治の隧道（ずいどう）は今も保存されているが、通常は閉鎖されていて通ることはできない。最近、近代化遺産として注目されるようになり、時折開放されているようだから、興味がある人は行ってみるといいだろう。トンネルの入り口には、工事にあたって寄付を寄せた人たちの名が刻まれた碑が建っているが、その数の多さは、この地域の人々がトンネルに寄せる期待がどれほど大きかったかを示している。



隧道の傍の仏様

1967年には、自動車交通の発達に促されて二代目のトンネルが開通する。さらに2005年には新しいトンネルが開通し、2代目トンネルを通る車もほとんどなくなった。一つの峠に、明治・昭和・平成と、3本ものトンネルが同居する例は珍しいのではないだろうか。

いちばん高所にある明治のトンネルを見学した帰り、峠道から氷上側を見ると、新旧3本の坂道が重なりあうように走るのが見えた。これに峠越えの道を加えると、ここには古代から現代に至る4本の道が通ったことになる。新しい道が造られるたびに、古い道は通る人がなくなり、忘れられてゆく。神様が鐘を置いた場所も、今ではだれも知らないのである。



鐘ヶ坂（看板）



苅野神社（鳥居）

鐘ヶ坂を下って小倉まで行くと、苅野神社（かりのじんじゃ）がある。鐘を盗んで、逃げていった神様が祭られている神社である。現在の国道に並行した、山すそを巻く細い旧道に面して鳥居が建っていて、その奥に急な階段が続いている。そこを切り切ると、尾根に挟まれた細い谷筋を塞ぐように建てられた社殿に至る。

苅野神社は式内社（しきないしゃ）であるが、本来はもっと鐘ヶ坂のふもとにあったそうで、江戸時代の寛文年間に現在の位置に移されたということである。その故地までは訪ねる時間がなかったが、次に機会があれば是非行ってみたいものである。

それにしても、神様は、なぜ鐘を盗もうと思ったのだろう。いったいどこから盗もうとしたのだろう。尾根が迫る急な坂道に置き去られた鐘の正体は・・・。



長い階段を上る



狛犬



苅野神社（本殿）



苅野神社（看板）

時間がとても早く流れて行く現代、私たちが知らない所で、消えてゆく伝説も多いだろう。そういう時代に、失われかけた記憶をよみがえらせ、「再起動」させて謎を探してみたい。そう思うのは僕だけだろうか。



## 用語解説

### 丹波（たんば）

丹波国と同じ。現在の京都府と兵庫県にまたがる地域。国府、国分寺は、ともに現在の京都府亀岡市（かめおかし）に所在する。兵庫県の丹波地域は、現在、篠山市・丹波市の2市。

### 豊林寺（ぶりんじ）

篠山市福井に所在する真言宗の寺院。玄溪山（げんけいざん）と号する。伝承では、651年に法道仙人が開いたとされ、陽成天皇（ようぜいてんのう：在位876～84）の時には勅願所（ちよくがんしょ）となったと伝えられる。鎌倉時代には修験道の寺院として栄えたが、応仁元（1467）年、兵火により焼失した。再興後も、明智光秀の丹波侵攻により再び兵火をうけた。本尊は観世音菩薩坐像。

### 篠山盆地（ささやまぼんち）

兵庫県中央部を東西にのびる山地の東端にあたる、丹波山地内にある盆地。盆地北部の山々は、日本海側と瀬戸内海側の分水界をなす。盆地周囲を囲む山々の標高は、500～800m、盆地中央部の標高は約200mを測る。

### 櫛岩窓神社（くしいわまどじんじゃ）

篠山市福井に所在する神社。延喜式（えんぎしき）で、名神大社に列せられる古社である。社殿背後の山には、磐座（いわくら：神が宿る巨岩）を祭り、古代信仰を伝えている。祭神は、櫛岩窓命（くしいわまどのみこと）、豊岩窓命（とよいわまどのみこと）、大宮比売命（おおみやひめのみこと）で、3神の木像は重要文化財に指定されている。

### 延喜式（えんぎしき）

藤原時平、忠平らにより、延喜5（905）年から編纂が始められた法令集で、全50巻。完成は927年。967年から施行され、その後の政治のよりどころとなった。

### 名神大社（みょうじんたいしゃ）

延喜式で定められた神社の社格。鎮座の年代が古く由緒正しくて靈験ある神社。名神社。

### 櫛岩窓命・豊岩窓命・大宮比売命（くしいわまどのみこと・とよいわまどのみこと・おおみやひめのみこと）

『古事記』によれば、アマテラスオオミカミが天の岩戸（あまのいわと）から出て御殿に入った際、その門を守った神が、櫛岩窓命と豊岩窓命であり、仕えた女官神が大宮比売命であったとされる。このため朝廷でも、この3神への信仰が深かったという。

### 豊林寺城（ぶりんじじょう）

篠山市福井に所在する中世の山城跡。豊林寺背後の城山山頂（520m）にあり、福井城、大雲城（おくもじょう）とも呼ぶ。応永年間（1394～1428）に築かれ、大芋氏（おくもし）代々の拠点であった。

## 用語解説

### 丹波志（たんばし）

江戸時代（18世紀末）に編纂された、丹波地域3郡（天田郡（あまたぐん：現京都府福知山市）・氷上郡（ひかみぐん：現兵庫県丹波市）・多紀郡（たきぐん：現兵庫県篠山市））の地誌。全21巻25冊。編集は篠山藩の永戸貞著（ながとていちょ）と、福知山藩の古川茂正（ふるかわしげまさ）。まとまった史料に乏しい丹波では、地域研究に欠かすことのできない資料である。

### 追手神社（おってじんじゃ）

篠山市大山宮に所在する神社。祭神は大山祇命（おおやまつみのみこと）。創建年代は不詳である。境内にあるモミの巨木（千年モミ）は国指定天然記念物。

### 但州湯島道中独案内（たんしゅうゆしまどうちゅうひとりあない）

江戸時代出版された、城崎温泉への旅行ガイドブック。宝暦13（1763）年版と文化3（1806）年版があり、国内各地に現存。温泉の効能と入浴方法、環境、歴史、名所案内、みやげ物、交通路と交通費などが記されている。旅行に携行しやすいよう、ごく小型の書物（約7cm×16cm）となっている。

### 千年モミ（せんねんもみ）

追手神社（おってじんじゃ）境内にあるモミの巨木。樹高34m、幹周り7.8m、推定樹齢は800年とされる。

### 追入神社（おいれじんじゃ）

篠山市追入に所在する神社。秋祭で奉納される三番叟（さんばそう・さんばんそう）は、江戸時代中期に伝えられたといわれる。

### 三番叟（さんばそう・さんばんそう）

能の翁（おきな）で、千歳（せんざい）・翁に次いで3番目に出る老人の舞。正月や秋祭などで、祝いのために舞われる。多く場合、千歳・翁・三番叟の3つの舞からなり、これらを式三番という。翁には猿楽の伝統を伝えるものや、能・歌舞伎・人形浄瑠璃の影響を受けたものがある。兵庫県では摂津・丹波・但馬を中心に広くおこなわれている。

### 鐘ヶ坂（かねがさか）

旧多紀郡と氷上郡の郡境をなす峠。両地域を結ぶ街道が通る交通の要衝。『但州湯島道中独案内（たんしゅうゆしまどうちゅうひとりあない）』では、「鐘が坂追入の村はずれよりとげ登り十丁余難所の峠」とされる。特に丹波市側からが急峻な難路であった。明治16（1883）年に鐘ヶ坂隧道（ずいどう）、昭和42（1967）年には鐘ヶ坂トンネル、さらに平成18（2006）年には、新トンネルが開通した。

## 用語解説

苅野神社（かりのじんじゃ）

丹波市柏原町上小倉（かいばらちょうかみおぐら）に所在する式内社（しきないしゃ）。祭神は葛原親王（かづらはらしんのう）。元は鐘ヶ坂の麓にあり、現在、旧鎮座地には古宮（ふるみや）と呼ばれる祠（ほこら）が祭られている。

式内社（しきないしゃ）

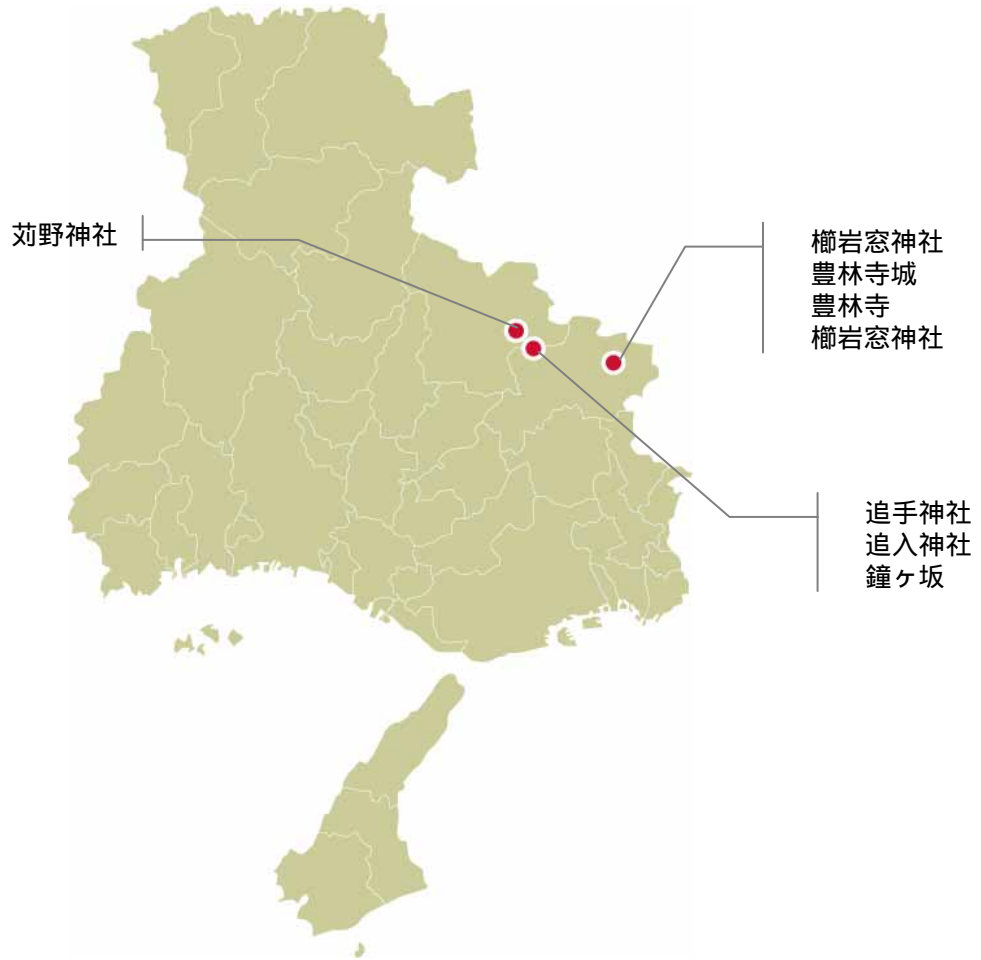
『延喜式』の「神名帳」に掲載されている神社。全国で2,861か所。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	たんなんの民話と伝説	1995	丹南ライオンズクラブ	丹南ライオンズクラブ
	丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし第6集	2006	「丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし」編集委員会	(財)兵庫県丹波の森協会
歴史・文化	大山村史 本文編	1964	宮川 満 編	丹南町大山財産区
	兵庫のふるさと散歩5 丹波編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	丹南町史 上巻	1994	丹南町史編纂委員会	丹南町
	丹波の祭と民俗芸能	1996	丹波文化団体協議会	神戸新聞総合出版センター
	兵庫の巨樹・巨木100選	2004	兵庫県	兵庫県



## 所在地リスト



栴岩窓神社	篠山市福井1170
豊林寺城	篠山市福井・下笹見
豊林寺	篠山市福井312
栴岩窓神社	篠山市福井1170
追手神社	篠山市大山宮字久保谷坪302
追入神社	篠山市追入字風呂谷166
鐘ヶ坂	丹波市柏原町上小倉
苅野神社	丹波市柏原町上小倉字カツラ山270-1

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏  
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館  
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日

ひょうご

—神と仏—

伝説紀行

くわばらくわばら欣勝寺  
雷の子と和尚さん

伝説

くわばらくわばら欣勝寺  
雷の子と和尚さん

紀行

「くわばらの里」から  
武庫川左岸に沿って

- ・くわばらくわばら
- ・欣勝寺の雷井戸
- ・武庫川左岸に沿って
- ・青野ダムから永沢寺まで

関連情報

用語解説  
参考書籍  
所在地リスト

## くわばらくわばら欣勝寺 雷の子と和尚さん

むかしむかし、天の上で雷（かみなり）の親子が雨をふらせようと、太鼓（たいこ）をたたいておりました。子供の雷は大張り切りです。どんどこどんどこと太鼓をたたいては、いなづまをぴかぴかと光らせておりました。

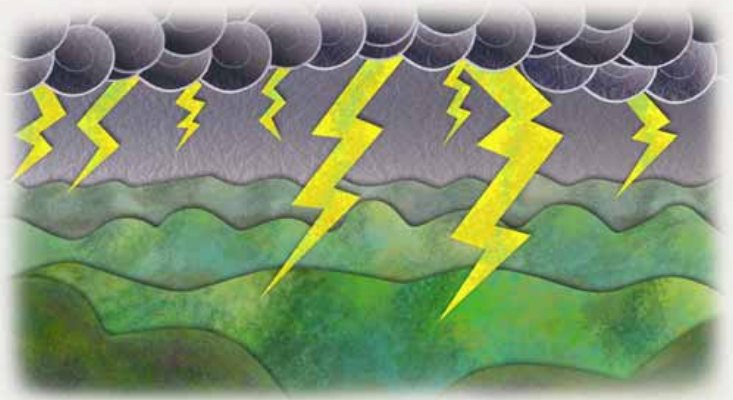
「こらこら、そんなにめちゃくちゃにたたいたら、危ないぞ」

雷の親はたしなめましたが、子供の雷は言うことを聞きません。

「それ、それっ」どんどこどんどこ。調子にのって太鼓をたたいては、あちらにざあざあ、こちらにざんざかと雨をふらせるありさまです。そうしているうち、張り切りすぎた雷の子は、雲の切れ目で足をすべらせて、人間の世界へまっ逆さまに落ちてしまいました。

雷の子は、桑原（くわばら）にある欣勝寺（きんしょうじ）の古井戸（ふるいど）に落ちこみました。ちょうどお勤めをしていた和尚（おしょう）さんは、ものすごい音をたてて落ちてきた雷にびっくりして、本堂から飛び出してきました。すると、井戸の底から「助けてー」という声が聞こえてきます。

和尚さんがのぞきこんでみると、井戸の底で雷の子が泣いています。あちこちに落ちては火事をおこしたり、人間のおへそを取ろうとしたり、悪さばかりする雷です。少しこらしめてやれ。そう思った和尚さんは、大きな木の板で、井戸にふたをしてしまいました。井戸の中は真っ暗です。





雷の子は泣きながら「助けてー。もう二度と悪さはしませんから」とさげんでいます。和尚さんは、しばらくの間知らんぷりをしていましたが、だんだんとかawaiiそうになってきました。それに、よく考えてみると、雷が雨をたっぷり降らせてくれるおかげで、お米もよく実るのです。

「こら、雷よ。これからはもう悪さはしないか」

「はい、もう二度と桑原村へは落ちませんから、助けて下さい」

「それなら、そこから出してやろう」

和尚さんはそう言うと、長いじゅうずを使って、雷の子を井戸からひっぱり出してやりました。雷の子は大喜びで、何度も何度も和尚さんにおじぎをしてから、雲の上へ帰ってゆきました。

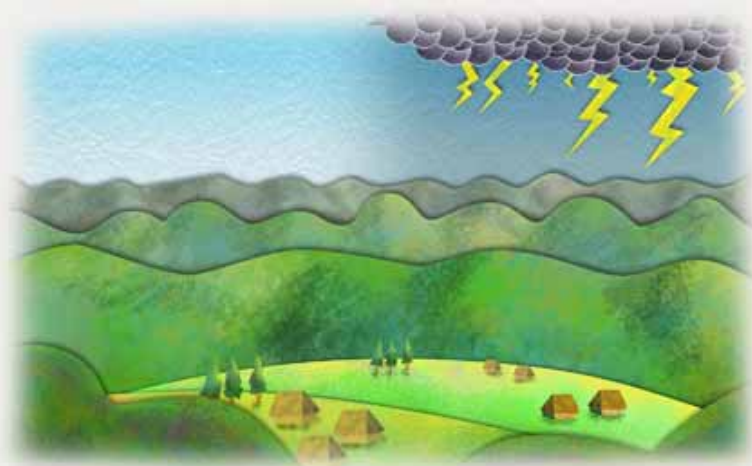
この話を聞いた雷の親は、ほかの雷たちを集めて言いました。

「これからは、三田(さんだ)の桑原村にだけは絶対に落ちてはならんぞ」

それからというもの、桑原村には二度と雷が落ちないようになったそうです。それを聞いたよその村の人たちは、雷が鳴り始めるとかやの中に入って、

「ここは桑原、欣勝寺。くわばら、くわばら欣勝寺」

と唱えるようになったということです。



くわばらくわばら欣勝寺 雷の子と和尚さん

おわり

## 紀行「くわばらの里」から武庫川左岸に沿って」

### くわばらくわばら

伝説紀行で神様と仏様の伝説を取り上げるようになったとき、いろいろな本を読んでいて、まっ先に目についたのが、「くわばらくわばら」の話であった。この言葉を知らないわけではなかったが、今や日常で使うことなどほとんどない言葉である。落語か何かで聞いたような記憶もあるが、大体、「何かまずいことが起きそうなときに使うのかな」という程度で、具体的に何を意味するのかさえ知らなかったし、近畿ではなく、関東の方の言葉だと思っていた。

そういうわけで「くわばら」が、三田市（さんだし）の桑原だと知ったときには、ぜひその正体を確かめてみようと思ったのである。

### 欣勝寺の雷井戸



欣勝寺（門） 森に包まれた寺 欣勝寺（本堂）

欣勝寺（きんしょうじ）は、三田市南部、武庫川（むこがわ）左（東）岸の桑原にあって、国道176号線からは東に400mほど離れた緑の丘陵に包まれている。日当たりの良い丘陵のすそは、ひな壇のように水田が並んでいて、その間の細い道を上ると、欣勝寺の門が見える。急速に発展をとげている三田市の市街地と違い、周囲の雑木林と水田が、落ち着いた空気を保ってくれている。古い村のお寺、そういった雰囲気は今でも残っている。

雷井戸は、お寺の門を入ってすぐ左手にあった。地表から上は切石で縁取りされているが、地下にあたる部分は、人のこぶしの3倍から人の頭ほどの自然石が積まれた、直径1mに足りないほどの小さな井戸である。おそらく地上部分は、新しく作り直されたのだろう。水がずいぶんたまっていたので、井戸の深さまではわからなかった。

傍にはいわれを書いた看板が立てられ、雷井戸と刻まれた石碑の足元には、小さな雷の人形が、何だか物言いたげな顔ですわっていた。

桑原のあたりに、本当に雷が落ちないのかどうか、僕は知らない。もちろん調べようもないのだけれど、昔の人にとって雷は、正体がわからないだけに恐ろしく、その一方で、雨を恵んでくれる大切な存在でもあったのだろう。足を滑らせて雲から落ちこち、和尚さんにしかってもらうことで、桑原村だけには落ちないようになってもらいたい。このお話にはそういう願いがこめられていたのかもしれない。

というわけで「くわばらくわばら」は、正しくは「ここは桑原欣勝寺、ここは桑原欣勝寺」と唱えなければならぬのである。世の中にはいろんな雷があるから、落ちそうなときは是非使ってみていただきたい。もちろん、逆効果ということもあるということをお忘れなく。



雷井戸

雷井戸（切石の枠）

雷井戸（看板）



雷の子がいた

雷井戸（石碑）



鬼面瓦

欣勝寺（境内）



## 武庫川左岸に沿って



本殿への階段

さて三田市から武庫川に沿って下ると、武田尾（たけだお）付近の溪谷を経て大阪平野西部に出る。そこから河内国までは船ですぐ。大和国や山城国も遠くない。このような位置にあって、丹波や播磨（はりま）とも接する北摂・西摂（ほくせつ・せいせつ）の地には、史跡や文化財が少なくない。ニュータウンができて、ここ20年ほどで三田の町の姿は大きく変わったが、武庫川の左岸に沿って、歴史や伝説をめぐってみよう。

桑原から少し北西へ行った三輪には、三輪神社と三田焼の窯跡がある。



三輪神社（本殿）



三輪神社（本殿）



三輪



三輪神社（看板）

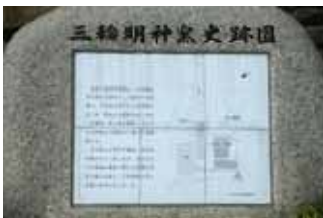
三輪神社は、三田市のみならず北摂でも屈指の古社である。奈良時代に、大和国（現在の奈良県）の大神神社（おおみわじんじゃ）から分祀（ぶんし）されたと伝えられ、国造りの神様であり、人々の暮らしの守り神でもあるオオナムチノミコトが祭られている。

2005年に遷宮祭がおこなわれたということであるが、銅板で葺（ふ）かれた、木の色もまだ新しい社殿は、しかし十分な風格を感じさせてくれる。境内からは、ふもとの鳥居からまっすぐに続く参道と、その周囲に広がる旧市街の中心部が一望できる。この場所は、ちょうど三田盆地の入り口にもあたるから、古代から重要な場所として神が祭られたのかもしれない。

三輪神社から続く尾根には、江戸時代の後期に三田焼の窯が営まれた。2003年には窯跡が史跡公園として整備され、窯の大きさや内部構造を見学できるようになっている。ここで焼かれた染付磁器や青磁は、京都、大阪などにも出荷されていたという。



まっすぐに続く参道



三輪明神窯跡（石碑）



整備された窯跡



窯跡



窯の構造

公園内には小さいながら展示室があって、出土品の一部を見ることができるほか、陶芸体験もできるから、焼物に関心がある人にはお勧めである。

三輪神社から武庫川沿いに国道を5kmほど北上し、上井沢の交差点を右折すると、青野ダムに至る。



## 青野ダムから永沢寺まで



青野ダム記念館

青野ダムは、1988年に完成した多目的ダムである。武庫川の小さな支流であった青野川をせき止めてできたダム湖は、今は青々とした水をたたえて千丈寺湖（せんじょうじこ）と呼ばれている。この青野ダム建設にともなって、旧石器時代から中世にまで至る、集落跡、古墳、窯跡など、平地が少ない山間部としては、驚くほど数多くの遺跡が発掘調査された。ちなみにこの地域にある「末（すえ）」という地名は、須恵器（すえき）を焼いていた、その「スエ」が転じたものである。出土品の一部は、青野ダム記念館に展示されていて、考古学ファンにとっては必見である。

千丈寺湖は、また、ブラックバス釣りの名所である。週末になると、駐車場にはバスファンが車を連れ、湖の周囲は大いににぎわっている。それはそれで楽しい風景なのだけれど、ダムができる前を知っている僕にとっては少々残念でもある。以前は、谷筋の真ん中を細い青野川が流れ、周囲の山の斜面には小さな段々畑が作られて、ひなびた懐かしい山里の風景があった。夏の夜、顔の前の指先も見えないほど暗い川の縁に立つと、無数のゲンジボタルが乱舞していたものである。

千丈寺湖の東を回ると、湖の北端近くに末西の集落がある。ここの公会堂にお祭りされているのが「末の観音様」である。三田市の伝説の一つで、池の底に沈んでいた観音様を、それとは知らずに踏み台にして遊んでいた子供が腹痛をおこし、不思議に思った村人が、池の底をさらって引き揚げたものだという。また、観音様の中に金が隠されていると思った若者が、観音様を壊そうとして腹痛をおこしたとも伝えられている。



展示室



観音様



永沢寺（門）

一方で観音様は、どんなに日照りが続いても、この村には水があって田畑が良く実るように守ってくれているとも言われている。今では数軒の家が交代でお祭りを行っているとのことである。お願いして拝見させていただいたが、思っていたよりも大きく、高さが2m以上もある立派な観音様であった。きらびやかな伽藍（がらん）があるわけではないが、いつまでも村で守り続けてほしい仏様である。



門と池と仏様



仁王像

末の村からさらに谷奥へと進むと、母子の集落を抜け、永沢寺（ようたくじ）に至る。もう摂津と丹波の国境に近い、三田市最北端である。

永沢寺は、室町時代に細川氏によって創建された寺院で、通幻禅師（つうげんぜんじ）を開祖としている。現在の建物は江戸時代中ごろに再建されたもので、広い境内には本堂、開祖堂、書院などが設けられて、落ち着いた雰囲気をかもしだしている。



長い廊下

この通幻禅師という人が、まさしく伝説そのもののような人だということをご存じだろうか。まずその生誕なのだが、「飴（あめ）買い幽霊」というお話を知っている人も多いだろう。「赤ん坊を身ごもった若い母親が死んで、葬られた後に、墓の中で赤ん坊を産み落とす。乳をやれない母親は、幽霊になって夜ごと飴屋に飴を買いに来る」というあのお話である。実はその赤ん坊が通幻だったというのだ。

また、長じて高德の僧となった通幻を慕って、竜が女性に姿を変えて説教を聞きに通った後、通幻の教えによって苦しみから解放され、そのお礼にと身の鱗（うろこ）を1枚残していった。その鱗に水をかけて雨乞（あまご）いをすれば、どんなかんばつときでも雨が降るといふ伝説も伝えられている。

雷から観音様、飴買い幽霊から竜の鱗まで、近代的なニュータウンがどれほど広がっても、その周りには、まだたくさんの伝説が生き続けている。



永沢寺（本堂）



永沢寺（本堂）

## 用語解説

### くわばらくわばら（くわばらくわばら）

落雷や災難、いやな事などを避けるために唱える言葉。桑畑には落雷しないという言い伝えによるものとされ、あるいは、菅原道真の領地であった和泉国桑原には、一度も落雷がなかったことによるともいわれる（ただし、和泉国の桑原に菅原道真の所領があったことを示す、正確な史料は存在しない）。三田市桑原と同様の伝説が、和泉国（現在の和泉市桑原町所在の西福寺）にもあるという。

### 三田市（さんだし）

兵庫県東部に所在する市。旧有馬郡北半部にあたり、江戸時代には三田藩として、九鬼氏が約240年間統治した。1958年より市制を施行。1980年代以降はニュータウン開発が進み、神戸、大阪のベッドタウンとして発展した。2007年11月現在の人口は、約113,600人である。

### 欣勝寺（きんしょうじ）

三田市桑原に所在する、曹洞宗（そうとうしゅう）の寺院。太宋山（たいそうざん）と号する。平安時代中期にあたる天禄年間（970～73）に、清和天皇（せいわてんのう）から分かれた源満仲（みなもとのみつなか）が開いたとされる。元は真言宗であったが、鎌倉時代、曹洞宗の開祖道元が桑原を訪れた際、この寺の山が宋の不老山に似ることから太宋山欣勝寺と命名し、以後、曹洞宗に改宗されたと伝える。

### 武庫川（むこがわ）

篠山盆地に源流をもち、三田盆地、武庫川渓谷を経て大阪湾に注ぐ河川。延長は約65km、流域面積は496平方キロメートル。主な支流には、青野川、有馬川、波豆川などがある。三田盆地より下流にあたる、宝塚市武田尾（たけだお）から西宮市生瀬（なまぜ）周辺では、深さ100～200mの渓谷を形成する。下流域は武庫平野とも呼ばれ、大阪平野の北西部を占める。河口付近は「武庫の浦」と呼ばれ、万葉集にもその地名が見える。

### 三輪神社（みわじんじゃ）

三田市三輪に所在する神社。大和国一宮である大神神社（おおみわじんじゃ：奈良県桜井市所在）から分祀（ぶんし：神を分けて祭ること）された神社で、オオナムチノミコト（大己貴神）を祭神とする。新抄掇勒符抄（しんしょうきゃくちやくふしょう：平安時代に成立した法制書）等によれば、天平神護元（765）年9月摂津の国に大和の大神神社の封戸（ふこ：社寺に所属して、租税や労役を納める民）を置いたという記述が見えることから、この時代にはすでに存在していたと考えられており、県下でも屈指の古社である。

## 用語解説

### 三田焼（さんだやき）

三田市内で、18世紀後半から昭和10（1935）年ごろまで生産された陶磁器の総称。寛政11（1799）年から大正初期まで続いた、三輪明神窯はその代表である。三田焼で最も著名なものは三田青磁（さんだせいじ）であるが、初期には、赤絵や染付などを生産していた。

文政7（1810）年には、京都から欣古堂亀祐（きんこどうかめすけ（1765～1837）：京都の陶工。三輪明神窯に招請されて特に青磁の制作を指導し、三田青磁の恩人と称えられる。後には、篠山市内で王子山焼の制作を指導した）を迎えて、青磁のほか、赤絵や染付磁器も多数生産されるようになり、三田焼は最盛期に至った。しかし、亀祐が去って以後はしだいに衰退した。明治に入り三田陶器会社が設立されて、一時復興をとげたが、昭和10年ごろに生産を終えた。

### 大神神社（おおみわじんじゃ）

奈良県桜井市にある神社。神社東方にある三輪山を神体として祭る。大和国一宮で、三輪明神とも呼ばれる。祭神は大物主神（おおものぬしのかみ）、大己貴神（おおなむちのかみ）、少彦名神（すくなひこなのかみ）。日本で最も古い神社の一つとされている。

### 遷宮（せんぐう）

神社において、本殿を建て替えて、神体・神霊を移すこと。遷座ともいう。定期的におこなわれるものを式年遷宮と呼び、伊勢神宮の場合は、20年に一度すべての社殿を建て替えて遷宮がおこなわれている。

### 染付（そめつけ）

素焼きした磁器の表面に、呉須（ごす：酸化コバルトを主成分として鉄・マンガン・ニッケルなどを含む鉱物質の顔料）で下絵付けを施し、その上に透明な釉（うわぐすり）をかけて焼いたもの。青または紫がかかった青に発色する。中国の元代に始まり、明代に隆盛。日本では江戸初期の伊万里焼に始まる。

### 磁器（じき）

やきもののうち、白色で透光性があり、硬く緻密（ちみつ）で吸水性がなく、叩（たた）くと金属的な音を発するもの。ただし磁器の概念は幅が広く、国によっても異なっており、中国においても陶器と磁器の区別は、日本と大きく異なっている。

### 青磁（せいじ）

青緑～緑色の釉（うわぐすり）を特徴とする磁器。白磁、黒釉磁（こくゆうじ）とともに、東アジア三大陶磁器とされる。

### 青野ダム（あおのだむ）

三田市末を流れる武庫川支流の青野川に、洪水調整、灌漑（かんがい）用水の確保などを目的として建設されたダム。1988年竣工。ダム湖は千丈寺湖（せんじょうじこ）と呼ばれる。総貯水量は1,510万立方メートル。

青野ダム建設範囲内では、ダム建設に伴って、後期旧石器時代から中世にわたる、集落、古墳、窯跡など、さまざまな種類の遺跡が発掘調査された。その一部は、現在、青野ダム記念館（三田市末字末野道東2189-1 三田市立青野ダム記念館 079-567-0590）で展示されている。



## 用語解説

### ブラックバス（ぶらっくばす）

スズキ目サンフィッシュ科の淡水魚のうち、オオクチバス、コクチバスなどの総称。北米が原産で、日本には、1925年に移入された（箱根、芦ノ湖）。その後人為的放流が繰り返されたことで全国に広がったが、特に1980年代以降、ゲームフィッシングの対象魚として爆発的に広がり、兵庫県下でもほとんどの河川、ため池等で生息が確認されるまでに至っている。ブラックバスの放流によって、在来の魚類が激減するなどの影響が指摘されており、2004年に制定された「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」により、輸入放流などが禁止された。

### ゲンジボタル（げんじぼたる）

甲虫目ホタル科に属する昆虫。成虫の体長は15mm前後で、腹部末端に発光器官をもつ。また、卵・幼虫も発光する。本州・四国・九州の、水質が良い河川に生息し、成虫は6月頃にあられる。水質の悪化や、河川の護岸がコンクリート化されたことによって激減していたが、現在は、各地で復活の試みがおこなわれている。

### 末の観音様（すえのかんのんさま）

三田市末に伝わる民話。戦乱によって観音像が池に投げ込まれ、それを知らない人が池に入って像を踏んだところ、腹痛をおこした。そこで池を干したところ、観音像が見つかったため、村でお祭りをするようになり、以降、村では常に田畑の実りも豊かであったと伝える。

### 伽藍・伽藍配置（がらん・がらんはいち）

伽藍とは寺院の建物のこと。伽藍配置とは、寺院における堂塔の配置で、時代や宗派により、一定の様式がある。

### 永沢寺（ようたくじ）

三田市に所在する、曹洞宗の寺院。青原山（せいげんざん）と号する。応安年間（14世紀後半）に、細川頼之（ほそかわよりゆき）が後円融天皇（ごえんゆうてんのう）の命により七堂伽藍を建立した。開祖は、通幻（つうげん）。以後細川氏の庇護を受けた。

釈迦如来、大日如来、阿弥陀如来の釈迦三尊を本尊とする。建物は、安永7（1778）年に再建された本堂、開祖堂、庫裡、接賓、書院などがある。

### 室町時代（むろまちじだい）

足利尊氏（あしかがたかうじ）が建武式目（けんむしきもく）を制定した1336年、または征夷大將軍に任ぜられた1338年から、織田信長（おだのぶなが）によって、足利義昭（あしかがよしあき）が京から追放された1573年までの、約240年間。1467年の応仁の乱以降は、戦国時代とも呼ばれる。

### 細川氏（ほそかわし）

清和源氏（せいわけんじ）の流れをひく、足利氏の支族。足利義季（あしかがよしすえ）が三河国細川村に住み、細川姓を名乗ったことに始まる。足利尊氏（あしかがたかうじ）の挙兵に従ったことから、室町幕府の管領（かんれい：室町幕府で將軍を補佐した最高職）として、讃岐・阿波・河内・和泉などを領国として勢威をふるった。

応仁の乱後は衰退したが、織田氏、豊臣氏に仕えた後、関ヶ原の戦いでは徳川氏に属し、江戸時代には肥後熊本54万石を領する有力外様大名となった。

## 用語解説

### 通幻(つうげん)

室町時代、曹洞宗の僧(1322~91)。豊後国(大分県)に生まれ、長じて能登国(石川県)総持寺に入った。細川頼之(ほそかわよりゆき)により建立された、永沢寺の開山として迎えられ、丹波地域に教えを広めた。後、総持寺住職。

通幻の禅は極めて峻烈で、試問に答えられない者を、境内に掘った穴へ投げ込んだと伝えられる。門下には、「通幻十哲」と称される優れた禅僧があって、通幻の教えを広めた。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	兵庫の民話	1960	宮崎修二郎・徳山静子	未来社
	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
	くわばらくわばら欣勝寺(紙芝居本)	2004	三田の民話・紙芝居編集委員会編	三田市教育委員会
	三田の民話100選(上)	2007	新編「三田の民話」編集委員会	三田市教育委員会
歴史・文化	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	兵庫のふるさと散歩1 神戸・阪神・三田編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
	角川日本陶磁大辞典	2002	矢部良明ほか編	角川書店
	青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)	1988	兵庫県教育委員会	兵庫県教育委員会
その他	わがまちさんだ遊ingマップ	不詳	三田市教育委員会	三田市教育委員会
	三田市三輪明神窯史跡園	不詳	三田市三輪明神窯史跡園	三田市三輪明神窯史跡園
	さんだ みんなわまっぷ(見学者用パンフレット)	1995	三田市・三田市教育委員会	三田市・三田市教育委員会
	原色日本甲虫図鑑	1985	黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之	保育社

## 所在地リスト



末西公会堂  
永沢寺  
青野ダム記念館

欣勝寺  
三輪神社  
三輪明神窯跡

欣勝寺	三田市桑原866
三輪神社	三田市三輪3-5-1
三輪明神窯跡	三田市三輪字宮ノ越858-1
末西公会堂	三田市末369
永沢寺	三田市永沢寺210
青野ダム記念館	三田市末字末野道東2189-1

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏  
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館  
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日



ひょうご  
—神と伝—  
伝説紀行

おこった氏神様  
たび重なるお祈りの結末

伝説

おこった氏神様  
たび重なるお祈りの結末

紀行

赤穂岬の伝説と風土  
・ 赤穂浪士の里の伝説  
・ 地名に残る海岸線  
・ 赤穂城下を訪ねる  
・ 坂越湾に浮かぶ島

関連情報

用語解説  
参考書籍  
所在地リスト

## おこった氏神様 たび重なるお祈りの結末

むかしむかし、大津（おおつ）は小さな貧しい漁村でした。村人は、朝早くから夜おそくまでいっしょうけんめいに働きましたが、暮らしは少しも楽にはなりません。

「もう少し楽に暮らせるように、氏神様（うじがみさま）をお願いしたらどうだろう」

村人たちはそう話し合っ、氏神様のお社をお願いしにゆくことになりました。

「どうか、魚がたくさんとれるようにしてください。魚が売れたら立派なお社を建てますから」

みんな頭を下げて、氏神様をお願いしました。するとそれからというもの、漁へ出るたびに大漁です。暮らしは、どんどん豊かになりました。氏神様のお社も、立派なものを造ることができました。



「暮らしは楽になったけど、さびしい村のまんまじゃなあ」

「もっとにぎやかな町になったら、いいのになあ」

そこで村人たちは、また氏神様をお願いをしました。

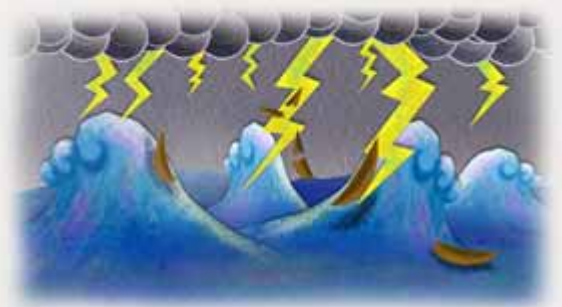
「どうか、大津をにぎやかな大きい町にしてください。そうすれば、氏神様のお祭りを、もっと盛大にいたしますから」

村人たちは、毎日毎日、氏神様をお願いしました。

そのうちに、大津の港にはたくさんの船が来るようになり、やがて「大津千軒（おおつせんげん）」と呼ばれるほどたくさんの家や店が建ち並んだ、にぎやかな港町になりました。氏神様のお祭りも、あちらこちらから見物人がやってくる、大きなお祭りになりました。

ある年のことです。ものすごい大嵐（おおあらし）が村をおそいました。港につないであった何十艘もの船が、大波でこわれてしずみ、たくさんの村人が亡くなりました。悲しんだ村人は、また氏神様の所へ行ってお願いしました。

「氏神様、このような嵐がくる海で働くのはもういやです。どうか、漁師をしなくても暮らせるようにしてください」



村人たちは前よりももっと熱心に、お祈りをしました。そうするとまもなく大雨が降って、あふれた大津川が川上から運んできた土で、大津の港はうまってしまいました。ところが、その土はたいへんよく肥えていましたので、田畑を作ることができるようになりました。

「これはありがたい。これからはみんなでひゃくしょうをして暮らせるぞ」  
村人たちは喜んで、力をあわせて田畑を耕すようになりました。

数年がすぎると、村人たちはまた氏神様の所にやってきてお願いをしました。

「氏神様。おかげさまで、漁師をしなくても暮らせるようになりました。でも、年に一回のお米だけでは、年貢（ねんぐ）を納めると食べていだけでせいっぱいです。このままでは氏神様のお祭りもできません。どうか、年に二回、米ができるようにしてください」

それからというもの、大津では年に二回、米がとれるようになりました。村人は大喜びです。氏神様にお願いした年が羊年だったので、二度目にとれるお米を「羊米（ひつじまい）」と呼ぶようになりました。一度目にとれたお米から年貢を納め、残ったお米は売って、そのお金でにぎやかなお祭りをすることができます。そのうえ二度目の羊米は、みんなで分けあうことができます。羊米は、一度目のお米よりも少し味が悪かったのですが、それでも、ふだん稗（ひえ）や粟（あわ）ばかり食べていた村人たちにとって、米が食べられるということは、ほんとうにうれしいことでした。





ところが、そのうちに、おいしいお米を氏神様に差し上げるのが、だんだんおしくなってきました。

「こんなうまい米を、年貢で納めてしまったり、氏神様に差し上げたりするのはおいしいの。最初の米をわしらが食べて、羊米を年貢に混ぜることにしよう」

「氏神様のお祭りも、羊米を売ったお金でやればよかろう」

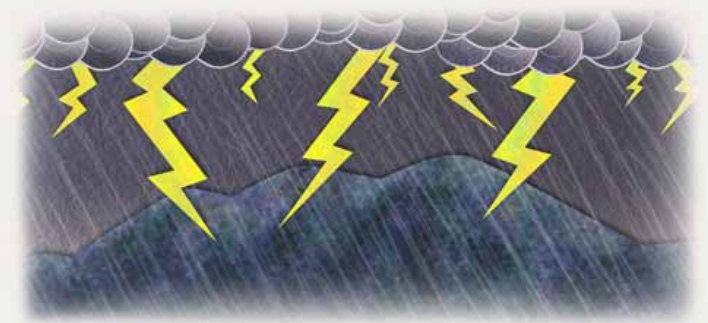
羊米は、一度目にとれたお米ほど高い値段では売れません。それからというもの、大津の祭りは、少しさみしくなりました。

何年か経つと、村人たちはもっとぜいたくな暮らしをするようになりました。

「羊米を売ったお金でお祭りをするよりは、わしらがもっとうまいものを食べて、楽に暮らすようにしよう」

こうして大津の村人は、ほかのどの村よりもぜいたくな暮らしをするようになり、氏神様のお祭りもやめてしまいました。もちろん、氏神様にお願いした昔のことも忘れてしまったのです。そしてある年、大風でお社がこわれたことも知らず、ぜいたくな暮らしを続けていました。

とうとうおこった氏神様は、黒鉄山（くろがねやま）のおくへいってしまいました。そして、大水を出して黒鉄山の土と石を大津の田へ流し、大津村の田畑を全部うめてしまったのです。そんなことがあって、大津村のお米は、年に一回だけしかとれなくなったということです。



おこった氏神様 たび重なるお祈りの結末  
おわり

## 紀行「赤穂岬の伝説と風土」

### 赤穂浪士の里の伝説

播州赤穂（ばんしゅうあこう）と言えば、思い出すのは「赤穂浪士（あこうろうし）」である。この史話そのものも伝説に近いものがあるが、そこからさまざまな伝説が派生してもいる。江戸時代に実際にあった事件も、テレビドラマや映画などで、ずいぶんいろいろなイメージが刷り込まれて、史実の輪郭はしだいにわかりにくくなっている。史実は、後世の人たちの思いが投影されて、伝説との間をゆれ動いてゆくのだろう。

それとは別に、赤穂の地には古くから残る伝説も少なくない。そのお話の一つを入り口にして、穏やかな瀬戸内の海、清流千種川（ちくさがわ）の河口に開けた平地と、背後にひかえる緑の濃い山々に抱かれた赤穂を歩いてみた。

伝説で取り上げた大津村は、赤穂市中心部から北東に4kmほど離れた場所にある。大津川という小さな川が、地区の中央を流れて赤穂港に注いでおり、海岸までも大体同じくらいの距離だろうか。大津でいちばん大きな神社は大津八幡神社であるから、これが伝説で語られた「氏神様」だろうと考えて訪ねてみた。

### 地名に残る海岸線



大津八幡神社（参道）大津八幡神社（石碑）

大津八幡神社は、和気清麻呂（わけのきよまる）にゆかりが深いと伝えられている。和気清麻呂が、称徳天皇の勅命を受けて宇佐八幡宮に向かう途中、大津の港に立ち寄ったということで、その船をつないだ松があり、また清麻呂が帰路にも立ち寄って、宇佐八幡宮より勤請したのが現在の大津八幡宮であると伝えられている（『播州赤穂郡志（ばんしゅうあこうぐんし）』）。

村の中の細い道を通って階段を登ると、広い境内の奥の一段高い場所に、堂々とした風格のある拝殿が建っている。訪れたときはちょうど秋祭りであったようで、赤と青の幟（のぼり）が立てられていた。境内からは海までを望むことができるけれど、伝説に言うとおり、「かつて大津が港だった」のであれば、ほんの目と鼻の先が海だったのだろう。

黒鉄山は、八幡神社の北西に望むことができる。高くはないが、重厚な印象を受ける山並みの手前に、三角形の一段高い山頂を見せている。



大津八幡神社（鳥居） 鳥居としめ縄

今は海岸から4kmも離れている大津が港町だったというのは、にわかには信じられないような気もする。しかし大津という地名は、「大きな港」そのものの意味である。大津八幡神社の南方には西から張り出す尾根があって、その先が大津川に接しているのだが、この付近には「船渡（ふなと）」という地名が残っている。さらに国土地理院の地図をよく見てみると、現在の大津川は、この船渡あたりから平野の中央を通らず、不自然な感じで山すそを巻くように流れて赤穂港に達している。船渡の東には、「古浜町」、「磯浜町」、「片浜町」などという地名が並んでいて、このあたりに古い海岸線があったことを想像させる。

こうしたことを考え合わせると、いつのころかはわからないにせよ、かつては船渡の近くまで入り込む湾があったと考えても、大きな間違いではなさそうである。それが大津川の氾濫（はんらん）などにともない、しだいに埋まって海岸平野となり現在に至ったのであろう。伝説の中で、黒鉄山から土砂が流れて港が埋まった、あるいは田畑が埋まったとされているのは、海が埋まってゆく過程で起きた、古い災害の記憶をとどめているからではないだろうか。

災害の記憶を後世に伝えたい、さらには人の心がおごることをいさめたい。昔の人のそんな思いがこの伝説を生んだと考えるのは、飛躍しすぎだろうか。



大津八幡神社（境内）



祭の幟



夕暮れが迫る



黒鉄山（遠景）



## 赤穂城下を訪ねる



大手門



石垣

東西を千種川と大津川に挟まれ、北側を雄鷹台山（おたかだいやま）にさえぎられた三角形の平地に発達しているのが、赤穂市の中心部である。赤穂浪士で名高い赤穂城も、この三角形の平地の先端付近に築かれた城であった。

赤穂城の北にある花岳寺（かがくじ）は、元は浅野氏の菩提寺（ぼだいじ）として建立された寺院で、赤穂義士もここに祭られている。城跡から北へ、城下町の面影をとどめた細い通りを入ると、いちばん奥に、大きくはないが雰囲気のある山門が建っている。この山門は、赤穂城の塩屋総門を明治になってから移設したもので、市の文化財に指定されている。



日本真景播磨・垂水名所図帖



西海航路図巻



花岳寺（門）



花岳寺（看板）



花岳寺（境内）



本堂の生け花

玉砂利を敷いた明るい境内には、大きく枝を張った「大石良雄なごりの松」も残る。ただしこれは2代目で、大石自身が植えたという初代は、昭和初期に枯れてしまい、現在ではその切り株だけが保存されている。



鳴らずの鐘



水琴窟

この松の隣にあるのが「鳴らずの鐘」である。赤穂義士の切腹という悲報を聞いた人々が花岳寺に集まり、弔いのためにこの鐘を打ち続けたという。あまりにも打ちすぎて音色を出し過ぎたためであろうか、その後、この鐘は打っても鳴らなくなってしまい、「鳴らずの鐘」と呼ばれるようになったという。



日本真景播磨・垂水名所図帖  
（忠義塚）



播州赤穂城下台雲山  
華岳禅寺全図  
（義士の墓）

こうした伝説によって、太平洋戦争中も「義士にゆかりの鐘」ということで、供出を免れたというから、伝説が文化財を守ったとも言えるだろう。ただ語り継がれただけの事柄でも、時には不思議な働きをすることがあるのだ。



## 坂越湾に浮かぶ島



随神門



大避神社

赤穂市街から国道250号線を通って千種川を渡り、坂越橋東の交差点から東へ道をたどると、すぐにトンネルをくぐって坂越（さこし）の町に着く。こども広い湾に面した、古い港町である。湾の奥に、ぼつんと浮かぶのが生島（いくしま）である。坂越の町中にある大避神社（おおさけじんしゃ）は、元はこの島に祭られていたとのことで、現在でも毎年秋におこなわれる、坂越の町と生島の間を、神輿（みこし）を船に積んで渡る祭り、「船渡御（ふなとぎょ）」がおこなわれている。



生島全景



大避神社



祭の幟が立つ

これほど陸に近い島でありながら、生島にはほとんど自然林と言っていいような森が残っている。古くから、この島の木を切ったり、落ち葉を拾ったりするとたたりがあるという伝説があったためのである。

生島の照葉樹林は、スタジイやウバメガシをはじめとする自然林から構成され、植物分布上重要なものとして、天然記念物に指定されている。神域として何百年も守り続けられた森は、何世代も引き継がれてきた遺産そのものであろう。穏やかな海に浮かぶ森に夕日が射す光景をながめていると、今の時代は、いったい何を未来に残せるだろうかという思いがわいてくる。



播磨名所巡覧図絵

## 用語解説

### 赤穂浪士（あこうろうし）

赤穂義士（あこうぎし）とも呼ぶ。元禄15（1702）年に、吉良義央（きらよしひさ）を襲って、主君浅野長矩（あさのながのり）の仇（あだ）を討った、元赤穂藩士の47名のこと。この事件は「元禄赤穂事件」と呼ばれ、後には事件を題材とした『仮名手本忠臣蔵』をはじめとする小説、芝居などに取り上げられて人気を博した。

### 千種川（ちくさがわ）

兵庫県の播磨地域西部を流れ瀬戸内海に注ぐ河川。鳥取県境にある三室山南麓に源流をもち、延長は67.6km、流域面積は752平方キロメートル。河口には赤穂三角州が発達する。上・中流域に大規模な都市がないため、良好な水質が維持されており、兵庫県を代表する清流とされている。

### 大津八幡神社（おおつはちまんじんじゃ）

赤穂市大津に所在する八幡神社。和氣清麻呂が九州の宇佐神宮から勧請（かんじょう：神仏を分けて別の地に祭ること）したとされる。大津八幡神社の木造菩薩立像は、赤穂市指定文化財。

### 和氣清麻呂（わけのきよまる）

奈良時代末～平安時代初頭の公卿（733～99）。従三位。769年、僧道鏡が皇位を奪おうとした事件の際、宇佐八幡宮の神託をもってこれを退けた。そのため大隅（鹿児島県）に流されたが、道鏡の失脚後に復権。桓武天皇（かんむてんのう）の信任を得た。

### 称徳天皇（しょうとくてんのう）

奈良時代末の女性の天皇（718～70）。第46代の孝謙天皇（こうけんてんのう）として在位した後、淳仁天皇（じゅんにんてんのう）に譲位したが、藤原仲麻呂の乱の責めによって淳仁天皇を退位させて、再度第48代天皇として即位した。その後、天皇に寵愛された僧道鏡が実権を握り皇位を奪おうとしたため、これに反対する貴族が、和氣清麻呂を宇佐八幡宮に派遣して、神託を得るといった事件が起こった。

### 宇佐八幡宮（うさはちまングう）

大分県宇佐市に所在する神社。正式には宇佐神宮。八幡神社の総本宮とされる。社伝によれば725年に創建されたといい、第一位の祭神を応神天皇とし、以下、比売大神（ひめのおおかみ）、神功皇后（じんぐうこうごう：仲哀天皇の皇后で応神天皇の母）を祭る。八幡造（はちまづくり）と呼ばれる建築様式の本殿は国宝。

### 黒鉄山（くろがねやま）

赤穂市西部にある山。標高は430.9m。頂上からは、瀬戸内海方面の眺望が開ける。

## 用語解説

### 赤穂城（あこうじょう）

赤穂市上仮屋に所在する江戸時代の城。別名を蓼城（たでのすじょう）という。国史跡。赤穂三角州上にある、典型的な平城である。室町時代から安土桃山時代にかけて、同地には加里屋城、大鷹城があった。縄張りは変形輪郭式。本丸と二の丸が輪郭式に配され、その北側に三の丸が梯郭式に置かれている。天守台は設けられているが、天守閣は建築されなかった。縄張りは甲州流兵学者の近藤正純。

### 花岳寺（かがくじ）

赤穂市加里屋に所在する曹洞宗の寺院。台雲山（たいうんざん）と号する。歴代赤穂藩主の菩提寺。浅野長直（あさのながなお）が、藩主として常陸笠間から赤穂に移った際に建立した。浅野長矩（あさのながのり）の切腹によって浅野氏が断絶して後は、永井氏、森氏の菩提寺となった。大石良雄をはじめ、赤穂義士ゆかりの遺品を多く残す。

### 浅野氏（あさのし）

浅野氏は、もと常陸国笠間を領したが、1645年に赤穂へ転封され、以後1701年までの間、長直（ながなお）、長友（ながとも）、長矩（ながのり）の三代にわたり赤穂藩主をつとめた。長矩は1701年に、江戸城内で刃傷事件を起こして切腹。浅野家は断絶した。

### 菩提寺（ぼだいじ）

先祖代々の墓を置き、葬式や法事をおこなう寺。

### 大石良雄（おおいしよしお）

赤穂藩の家老（1659～1703）。内蔵助（くらのすけ）は通称。藩主浅野長矩（あさのながのり）が、江戸城内で吉良義央（きらよしひさ）を負傷させた事件で切腹を命じられた後、浅野家再興を図ったが受け入れられなかった。長矩切腹の翌年、赤穂浪士46人とともに、江戸本所にあった吉良邸に討ち入り、義央を殺して主君の仇（あだ）を討った。

### 生島（いくしま）

赤穂市東部の坂越湾（さこしわん）にある島。島内の樹林は、対岸にある大避神社の森として長く保護されており、スダジヤやアラカシ、タブノキなどが繁茂する暖地性の自然林となっている。植生の重要性から、瀬戸内海国立公園の特別保護区および国の天然記念物に指定されている。

### 大避神社（おおさけじんじゃ）

赤穂市坂越（さこし）に所在する神社。創建年代は不詳であるが、鎌倉時代には有力な神社であったとされる。祭神は天照大神（あまてらすおおみかみ）、春日大神（かすがのおおかみ）、大避大神（おおさけのおおかみ）。大避大神とは、秦氏の祖先である酒公（さけのきみ）と秦河勝（はたのかわかつ）である。元は大酒社（おおさけのやしる）と呼ばれ、坂越湾内の生島に祭られていた。例祭は瀬戸内三大船祭りの一つに数えられ、2艘（そう）の小船に神輿を乗せて船渡御がおこなわれる。



## 用語解説

### コヤスノキ（こやすのき）

トベラ科トベラ属の常緑低木。学名はPittosporum illicioides。中国中部、台湾にも分布する。明治32年に、揖保郡（いぼぐん）新宮町において大上宇市（おおうえういち）が発見し、牧野富太郎（まきのとみたろう）が新種として発表した。

### チトセカズラ（ちとせかずら）

マチン科ハウライカズラ属のつる性木本。学名はGardneria multiflora。日本、中国に分布するが、国内での分布は中国地方と琉球列島に限られ、兵庫県は分布の東限にあたる。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話西播篇	1972	郷土の民話西播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	赤穂の昔話	1986	赤穂民俗研究会	赤穂市教育委員会
歴史・文化	兵庫のふるさと散歩3 西播編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
	赤穂市史第一巻	1981	赤穂市史編さん専門委員会編	赤穂市
	赤穂市史第二巻	1982	赤穂市史編さん専門委員会編	赤穂市
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	赤穂の地名	1985	赤穂市総務部市史編さん室編	赤穂市
	播磨伝説散歩	2002	橘川真一	神戸新聞総合出版センター
その他	原色日本植物図鑑木本編	1979	北村史郎・村田源	保育社

## 所在地リスト

大津八幡神社  
黒鉄山  
赤穂城  
花岳寺  
生島樹林



大津八幡神社	赤穂市大津1060
黒鉄山	赤穂市西有年
赤穂城	赤穂市上飯屋1424ほか
花岳寺	赤穂市加里屋1992
生島樹林	赤穂市坂越字生島335-1

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第2刷 2009年4月1日

## 参考サイト（全編）

種別	サイト名	URL
官庁	兵庫県ホームページ	http://web.pref.hyogo.jp/
	改訂兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック 2003(兵庫県庁公式サイト内 / 兵庫県健康生活部環境 局自然環境保全課)	http://www.kankyo.pref.hyogo.jp/JPN/apr/hyogoshizen/reddata/
	三田市役所ホームページ	http://www3.city.sanda.lg.jp/
	小野市ホームページ	http://www.city.ono.hyogo.jp/p/1/4/
	淡路市ホームページ	http://www.city.awaji.hyogo.jp/
	洲本市ホームページ	http://www.city.sumoto.hyogo.jp/
	南あわじ市ホームページ	http://www.city.minamiawaji.hyogo.jp/
	篠山市ホームページ 丹波篠山五十三次ガイド	http://www.city.sasayama.hyogo.jp/
	福崎町ホームページ	http://www.town.fukusaki.hyogo.jp/
	たつの市ホームページ	http://www.city.tatsuno.hyogo.jp/
	神戸市文書館(西区)	http://www.city.kobe.jp/cityoffice/06/014/top.html
寺院	欣勝寺ホームページ	http://www.kinsyoji.jp/
	永沢寺ホームページ	http://www.youtakuji.net/
	神積寺ホームページ	http://www.tawara-monjyu.com/
	善光寺ホームページ	http://www.zenkoji.jp/
	達身寺ホームページ	http://www.tashinji.jp/index.htm
	日光院ホームページ	http://www.fureai-net.tv/myoukensan/
	法隆寺ホームページ	http://www.horyuji.or.jp/
	花岳寺ホームページ	http://www.eonet.ne.jp/~kagakuji/
神社	三輪神社ホームページ	http://homepage2.nifty.com/miwajinja/i-saizin.html
	大神神社ホームページ	http://www.oomiwa.or.jp/
	伊勢神宮ホームページ	http://www.isejingu.or.jp/
	上賀茂神社ホームページ	http://www.kamigamojinja.jp/
博物館・ 資料館	淡路文化史料館ホームページ	http://www1.sumoto.gr.jp/siryokan/
	兵庫県立考古博物館ホームページ	http://www.hyogo-koukohaku.jp/
	フィールドミュージアム京都	http://www.city.kyoto.jp/html/somu/rekishi/fm/
	京都府立総合資料館ホームページ	http://www.pref.kyoto.jp/dezi/data/28.html
その他	財団法人神戸市民文化振興財団ホームページ	http://www.kobe-bunka.jp/
	財団法人日本ダム協会ホームページ	http://www.soc.nii.ac.jp/jdf/
	丹波「未来」新聞ホームページ	http://tanba.jp/
	但馬の百科事典	http://www.tanshin.co.jp/zaidan/
	Wikipedia	http://ja.wikipedia.org/

## 参考書籍（全編）

書籍名	刊行年	著者名	発行者
日本考古学小辞典	1983	江坂輝彌・芹沢長介・坂詰秀一編	ニューサイエンス社
角川日本地名大辞典28 兵庫県	1988	角川に本地名大辞典編集委員会編	角川書店
国史大辞典(全15巻)	1991	国史大辞典編集委員会	吉川弘文館
日本考古学用語辞典	1992	斉藤忠編	学生社
新版 日本史辞典	1996	浅尾直弘・宇野俊一・田中琢 編	角川書店
広辞苑第五版	1998	新村出編	岩波書店
日本歴史地名大系 第二十九巻 兵庫県の地名	1999	(有)平凡社地方資料センター編	平凡社
兵庫の難読地名がわかる本	2006	神戸新聞総合出版センター編	神戸新聞総合出版センター
改訂・兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック 2003	2003	兵庫県県民生活部環境局自然環境保全課編	

